ISSN 0918-1334

考古論叢 神奈川

第10集

三輪善之助と影向寺出土瓦 …… 杉山 博久
—『武蔵古瓦行脚雑記帳』の紹介—

有舌尖頭器のサイズをめぐる諸問題 …… 藤山 龍造
—再生加工の問題を中心として—

神奈川県城山町向原東遺跡出土の表裏縄文土器 …… 山田 仁和

相模川下流左岸域における弥生時代後期前半の様相 …… 中村 哲也
—倉見才戸遺跡調査成果の検討—

長柄・桜山第1・2号墳覚書 …… 伊丹 徹

南武蔵南部の横穴墓 …… 田村 良照
—横浜・川崎地域—

石鉢とは何か …… 小池 聡

平成14年(2002)4月
神奈川県考古学会

誌名中の「神奈河」は，鶴岡八幡宮文書のうち，北条時宗が文永３年（1266）５月２日に武蔵目代殿あて発給した下文中の「神奈河」に拠るもので，これが地名神奈川の初出文書である。

考古論叢 神奈河

弟10集

平成14年４月

＊目　　次

三輪善之助と影向寺出土瓦…… 杉山　博久　1
—『武蔵古瓦行脚雑記帳』の紹介—

有舌尖頭器のサイズをめぐる諸問題…… 藤山　龍造　9
—再生加工の問題を中心として—

神奈川県城山町向原東遺跡出土の表裏縄文土器 …… 山田　仁和　31

相模川下流左岸域における弥生時代後期前半の様相 …… 中村　哲也　49
—倉見才戸遺跡調査成果の検討—

長柄・桜山第１・２号墳覚書 …… 伊丹　徹　63

南武蔵南部の横穴墓 …… 田村　良照　77
—横浜・川崎地域—

石鉢とは何か …… 小池　聡　97

神奈川県考古学会

三輪善之助と向影寺出土瓦

—『武蔵古瓦行脚雑記帳』の紹介—

杉　山　博　久

一

もう十数年前のことになるが、東京・神田の古書店街を歩いていたとき、いつも立ち寄るK書店で、「こんなものがありますが、興味ございますか？」と差し出されたものがあった。見ると、一冊は、表記も何もない粗末な和装仕立ての冊子であったが、中を開くと、袋とじの一丁目に「三輪」の六角印が押してあり、二丁目には、

武蔵古瓦行脚雑記帳
本稿は春永政氏と共に大正十二年二月より同
年六月迄の間に武蔵国中の古瓦散布地を遠足
したる備忘録であって古瓦と同時に見聞した
事項はなる可く採録した次第であります
大正十二年六月　　三輪　善之助

とあって、民俗学者、歴史考古学者として活躍した三輪善之助の研究上の備忘録であることが知られた。さらに、もう一冊の紐綴じ、二つ折りの薄い冊子は、すでにインクの色も薄れていたが、

大正十一年三月廿一日
下総国分寺踏査記

と表記されており、さらに、張り込まれた古瓦拓本に、「武蔵古瓦行脚雑記帳」と同じ「三輪」の六角印が捺印されていること、さらに、末尾に「三輪善之助」の署名もあって、これも三輪の遺跡踏査記であることが明らかであった。署名の上に、「春永様」とあるのを見ると、或いは春永に献呈したかその予定のものであったかも知れない。他に、三輪が、多賀城や中尊寺、毛越寺、塩竈神社など、東北旅行をした際のスナップ写真も挟み込まれていた。さっそく需めて帰り、三輪がこの備忘録や踏査記を用いてどのような論考を作成したのかを調べたことであった。そして自筆備忘録などを手に入れることが出来たことから、三輪という研究者にも親しみと関心を抱き、その研究活動の跡を辿ってみたくなり、三輪に関連する資料を少しづゝ収

集してきた。が、板碑研究や鬼子母神と子安信仰など、三輪が大きな業績を残した学問領域は、私のまったく疎いところであって、残念ながら、いま、多くを語ることは出来ない。それで、三輪の全業績についての評論は後日を期することゝし、また、紙数の関係もあろうから、こゝでは、「武蔵古瓦行脚雑記帳」に焦点を絞り、その概要を紹介するほか、同帳に収載された神奈川県内唯一の古瓦出土地である影向寺を中心に、その仕事を紹介してみたいと思う。他の一編、「下総国分寺踏査記」については、別の機会に紹介する。

二

先ず、「武蔵古瓦行脚雑記帳」と題する自筆備忘録であるが、同帳は、縦24.8cm、横16.8cmの大きさで、袋綴じ二四丁である。最初の一丁は、内表紙として白紙で、すでに紹介した六角印が捺印されているばかりである。最後の一丁も裏内表紙の意味か白紙である。拓本あるいは図面（見取り図）などの折り込みないし貼り込みが三五枚ある。写真も添付されている。綴じ込まれた東京三越製の用箋には、カーボンによる複写が行われているが、一般には墨書されており、朱書きの注などが加えられている。

三丁目からが備忘録であって、まず、三輪が確認した武蔵国内に於ける一四ヶ処の古瓦出土地の地名が記載され、さらに「武蔵国古瓦発見地畧図」が折り込まれている。同図は、江戸川、中川、荒川、多摩川の諸河川を水色の絵具で書き込み、最寄りの鉄道路線を加え、赤ドットで発見地を標示（麹町区の分は未記載）したものである。その「武蔵古瓦発見地名表」を転載すると、

武蔵古瓦発見地名表

地　　名	種　　類	推定年代	遺蹟ノ種類
北多摩郡国分寺村字国分	布目、巴、唐草、	奈良朝	寺址
国分寺旧址	文字瓦、		
北多摩郡国分寺村恋ヶ窪羽根沢	布目、唐草、	奈良朝	寺址
仮楽園	文字瓦、		
北多摩郡国分寺村字金仏堂	布目、巴、唐草、	奈良朝	寺址
	文字瓦、		
北多摩郡府中村字京所薬師堂	布目、巴、唐草、	奈良朝	寺址
	文字瓦、		
橘樹郡宮前村影向寺	布目、巴、文字瓦、	奈良朝	寺址
	唐草瓦、		
比企郡亀井村大字泉井字新沼谷	布目、巴、唐草、	奈良朝	（国分寺瓦）

及ビ字金沢	文字瓦、		窯址
南多摩郡稲城郡（村の誤記）大字大丸字城山及ビ瓦ガイト	布目瓦、	奈良朝	窯址
大里郡寄居町大字末野	布目、文字瓦、	奈良朝	（国分寺瓦）窯址
北埼玉郡埼玉村大字埼玉字下埼玉盛徳寺内	布目、唐草瓦、	奈良朝	寺址
入間郡東金子村字小谷田及字新久	布目、巴、文字瓦、	奈良朝	寺址
入間郡勝呂村大字石井字下石井勝呂小学校内	布目、巴瓦、	奈良朝	寺址
入間郡毛呂村毛呂本郷臥竜山出雲伊波比神社内	布目、巴瓦、	足利期	寺址
荏原郡大井町字滝王寺	布目、	藤原期	寺址
東京市麹町区丸の内	巴瓦、	徳川時代	邸宅

とある。東京市麹町区丸の内（千代田区丸の内）や入間郡勝呂村大字石井のように、江戸期あるいは室町期の瓦出土地も含み、比企郡亀井村や入間郡東金子村例のように、異なる字に所在する古瓦出土地を一括しているものもあるが、取敢えず、原表のまゝに整理すると、一二ヶ処が奈良・平安朝期の古瓦出土地及び窯址とされている。その一二ヶ処のうち、寺院址は八ヶ所、窯址が四ヶ所である。一四ヶ処を郡別に見ると、多摩郡に四ヶ処（国分寺村　府中村）、入間郡に三ヶ処（東金子村　勝呂村　毛呂村）、比企郡（亀井村）、橘樹郡（宮前村）、大里郡（寄居町）、北埼玉郡（埼玉村）、南多摩郡（稲城村）、荏原郡（大井町）、東京市（麹町区）に各一ヶ処となる。多摩郡国分寺村の三ヶ処のうちに武蔵国分寺址が含まれていることはいうまでもない。さらに、これらの一四ヶ処の古瓦出土地について、各出土地ごとに、出土古瓦と見聞した事項が記録されているわけであるが、例えば、比企郡亀井村大字泉井字金沢及字新沼谷の項を引用してみると、

東上線坂戸駅から玉川町行の馬車に乗って途中入間郡苦林（ニガバヤシ）で小型の瓢墳円墳数十基を見かけました、墳上には皆葺石があって石槨の露出したのも見えます、其傍の善能寺には建武三年外沢山の板碑がありました、亀井村から徒歩い泉井に入ると右手に見える金沢寺の南側桑畑には布目瓦と土器片が沢山散乱してゐます、此寺には嘉慶二年と康安二年の板碑がありました、猶進んで新沼谷の丘の裾に窯址があって布目瓦、磚並に祝部土器の様な鼠色の破片が焼土に交って無数に出ます、村人の話では嘗て此丘に男一人立ち得る程の穴が

あった由それは瓦窯でありませう、
此窯址から発見した巴瓦唐草瓦并に播羅、入間、秩父等の文字瓦は国分寺旧址から発見さるゝものと同じであって考古学雑誌六の四に対照すればよく判明します、
又豊由島と篦書きした瓦が出ました、之れは豊島の古い書き方でありませう、
横見の刻印ある瓦は私共が国分寺村で拾ったのと全然符合します
以上の証拠で此地は国分寺瓦の製造地なりと断言することが出来ます、
此村でも稀に石器が発見せらるゝそうでした、

とメモは入念である。また、国分寺址出土の古瓦と符合し、従って、「此地は国分寺瓦の製造地なりと断言することが出来ます」という三輪の理解も添えられていて参考になる。北多摩郡府中町字京所の項では、荏原の文字瓦を採集したといゝ、住田正一のいう普門寺址に該当すると想定し、朱書きして、「此地武蔵国分尼寺址として最信するに足れり」と記してもいる。入間郡東金子村字新久及字小谷田や同郡勝呂村大字石井字下石井の項には、東光寺や宗福寺境内に所在する板碑が紹介されてもいる。

昭和三年一月に発表された「武蔵野の古瓦」(『武蔵野』11-1）は、この備忘録に基づいて作成されたものである。その冒頭に、

数年前に畏友春永政氏と共に武蔵各郡を踏査して、国分寺以外に幾多の未知の布目瓦発見地のあることを知り、奈良朝から足利時代頃までの遺跡のあるを確め得た。故に私のノートから左にこれを列挙する。

とあることから確かである。同稿では、東京市麹町区例を省き、児玉郡青柳村字寄島、南多摩郡堺村相原、同郡元八王子村梶原八幡神社、入間郡山口村勝楽寺、西多摩郡三田村御嶽神社例を加え、武蔵国内一八ヶ処の古瓦出土地を紹介している。児玉郡青柳村字寄島例など、「武蔵古瓦行脚雑記帳」に見えず、「武蔵野の古瓦」に増補された古瓦出土地は、当然、大正一二年六月以降の調査によって追認されたものと考えられる。その五ヶ処のうち、南多摩郡堺村相原や西多摩郡三田村御嶽神社例については、「武蔵野の古瓦」発表以前に、『武蔵野』に関連する記事が掲載されている。例えば、相原例に関する記述を引用してみると、「武蔵野の古陶窯」(『武蔵野』８―４　大正15年９月）に、

武蔵南多摩郡堺村相原谷戸にも、祝（部字脱）土器の窯址が残つてゐる。此地は八王子の南方相原駅の附近で、トンネルの上の山の辺りに祝部土器が掘出される。尚同地の原巳之助氏宅の裏の崖からも、祝部土器の破片と、布目瓦が出る此瓦も、矢張り武蔵国分寺へ寄附のものと思はれる。

以上の三ヶ所の祝部土器製造遺跡は、相互に共通した特徴がある。即ち発掘さるゝは多量破片のみなること、但偶々完品に近きものあるも、曲り、歪み等ありて、所謂ハネ物に属すること、往々数枚の土器の重ねたるまゝ凝結して掘出さるゝこと、依て之等の遺物は自ら其地の竈址たることを説明するものである。又同時に布目瓦の発見せらるゝは其地が、土質、水利、窯場の位置等に於て、瓦の製造に適当してゐた為、国分寺建立の際に、瓦の製造所に充てられ、恐らく其後も窯業を営んだものと想像せられる。

とある。「三ヶ所」とあるのは、他に大里郡寄居町例と比企郡亀井村例にも言及しているからである。西多摩郡三田村御嶽神社例については、「御嶽山上の遺物」(『武蔵野』10－1　昭和2年8月)がある。

が、『武蔵古瓦行脚雑記帳』や「武蔵野の古瓦」に記載された神奈川県内の古瓦出土地は、橘樹郡宮前村影向寺一ヶ処が記録されているばかりで、しかも、『武蔵古瓦行脚雑記帳』の記述は極めて簡略である。すなわち、

考古学雑誌十三の二、武蔵野五の三に拙稿があります、発見したのは巴瓦二種と都築の文字瓦であります、又附近の古瓦は国分寺と同じく奈良朝と思ひます、

とあるのみである。そして八葉の蓮華文軒丸瓦二種と平瓦破片(「都」の文字瓦か)の写真及び軒丸瓦の拓本写真が添付されているほかに、礎石と推定される「影向石」と呼ぶ大石の略図が添えられているものゝ、瓦の拓本は添付されていない。大石は、径五尺と六尺、厚さ二尺と計測され、中央部に径八寸と一尺の柱受けの孔が穿たれたものと記録されている。「武蔵野の古瓦」に於ける記述は、後にふれる「影向寺の瓦」(『武蔵野』5－3　大正11年12月)を承けて詳細になる。

三

その「武蔵古瓦行脚雑記帳」の影向寺の記載のうち、「考古学雑誌十三の二、武蔵野五の三に拙稿があります」とあるのは、「影向寺寺域発見瓦」(『考古学雑誌』13―2　大正11年10月)と「影向寺の古瓦」の二編を指す。備忘録は、大正12年2月から6月にかけての踏査の記録であるから、この二編が、同年の踏査に基づくものではなく、それ以前の調査によるものであることは確かである。『考古学雑誌』の記事はごく簡略であるから、『武蔵野』の方の報告を引用すると、

春永政氏より多摩川西岸の古刹を探るから一緒にと誘引を受け初夏の風爽かに新緑相映ずる多摩川二子の清流を渡つた。

二子の町を西南に通り過ぎ溝ノ口から左折して台地に添つて南東に進むこと一里弱影向寺台に登ると布目瓦の落ちてゐるので目的地に着いたのを知つた。

寺は神奈川県橘樹郡宮前村に在つて天台宗威徳山影向寺と称し薬師堂鐘楼及庫裏等完備した閑寂な精舎である。……

境内は正しく南面し中央に薬師堂あり、其南西の鐘楼に徳川期の鐘が懸けてある、そして薬師堂の東北隅に銀杏の一巨樹が茂つてゐる、門前の東側にも大槻樹一株あり其根元に影向石と称ふる巾五尺長六尺厚二尺程の楕円形の石がある、中央に穴を穿つた様子から見ると古の礎石であらう、寺域には布目瓦の破片が広く散布して居るのと此礎石とから推して往古一大伽藍の在つたのを想像するに足るが勿論其配置なぞは不明である。

本坊に蔵する境内出土の巴瓦二種の内其一は雄健な単弁式蓮華紋の周囲に波紋を配し中房小さく七個の蓮子を置く、又他の一は波紋なき単弁蓮花紋に大なる中房あり十三個の蓮子を持ち武蔵国分寺の奈良朝瓦に比較して遜色なき優品である。同じく寺内発掘の平瓦に都と篦書されたのは都筑郡を意味するものらしい、……

武蔵国分寺は多摩川の北方約一里の地点にあり……、両寺其国宝の薬師仏を安置し、布目瓦文字瓦の手法さへ似たる事よりも武蔵野の貴重なる史跡として此影向寺を保存したいものと思う。

とある。影向寺の状況を述べ、同寺に保存されていた軒丸瓦二点と「都」字の篦書きのある平瓦一点を観察したところを記し、さらに影向石の写真三葉を添えて詳細である。軒丸瓦等の寸法は記載されていないが、写真からはかなり大形の瓦であることが推察される。この原稿執筆の基になった三輪の影向寺踏査の日時は不明であるが、原稿執筆の日時が大正一一年五月一四日であり、「初夏の風爽かに新緑相映ずる」頃の踏査というから、この月の初旬か、前の月の下旬のことでゞもあろうか。前にふれた「武蔵野の古瓦」の記述も大同小異であるが、「影向石」を「塔の中心礎石」と限定したことゝ、中房を小さく、七個の蓮子を配した単弁式蓮花紋軒丸瓦を「大和の飛鳥時代の巴瓦の模製」とし、一三個の蓮子を持つ軒丸瓦を「大和地方の奈良時代に流行した複弁式の感化をうけたものらしい」としたのが新味であった。

ところで、その三輪の踏査記の発表に先立って、大場磐雄は大正七年九月から、影向寺への調査行を試みている。もっとも、この時点での大場の関心は、縄文時代の遺物散布地ということにあったようで、『楽石雑筆』にも、

九月二十九日　堀田、山内二氏と共に採集す。道順は目黒　祥雲寺山　下沼部　影向寺野川にして、……影向寺裏にて遺跡発見、石鏃採集。……

とあるばかりで、出土瓦あるいは寺院址に関してはまったく触れるところがない。この時には、山内清男を伴っての調査行であったらしい。同年一二月にも、大場は影向寺を訪れている。が、

この時に、古代伽藍の存在には考え及ばなかったのか、どうやら、「影向石」と思われる石についても、「又ここに足跡の石ありてこれにたまりし水を目につければききめありという」などと記録するにとどまって、礎石との指摘はない。大正一一年一〇月に至って、漸く、「畑中より境内へかけて採集す。布目瓦の採集物多し。……坂道を下るに飯塚蓮華紋ある巴瓦を得つ、喫驚してゆずりうけぬ」と、初めて古代瓦の出土に注目したかのようである。この軒丸瓦の発見を契機に、影向寺出土の古瓦に関心を寄せるようになったらしく、大正一二年二月にも影向寺に赴き、調査の結果を、『楽石雑筆』のなかで、「影向寺の研究」のタイトルでまとめ、古瓦と「影向石」に関して大分言及している。その部分を引用すると、

まず最初に寺内にゆき住職に逢い古瓦を見せて貰いたり。その数は巴瓦二個、平瓦完全一個破片数個、文字瓦破片一個なり。巴瓦の中一個は蓮弁卵形三重装飾ありて八個、子房不規則にて一三個、製作やや退歩的のところあり。色は淡黄褐色、一個はそれよりやや大にして蓮弁八個卵形各々蘂に楔状線を現わす。子房は七個規則正しく、周囲にデイグザグ文様をめぐらす。外と文帯との間三分製作雄健色は薄墨色なり。文字瓦は灰色の平瓦の表面に都とヘラ書きせるもの、都筑郡の意なるべし。その外格子文様、網形文様、縄目文様をあらはせる平瓦破片あり。又一個の平瓦破片には裏の布目を施せる部分に約一分の隆起帯を施せるものあり。蓋しひっかけの為に設けしにや。……

寺にカバンをおきて影向寺礎石を測定す。石質は蛇文岩の如し。蓋し塔の礎石か。

とある。この所見は、同年中に、「影向寺発見の古瓦に就いて」(『武相研究』３・５・７)にまとめられたらしい。同文献は、神奈川県立図書館などにも架蔵されておらず、今のところ閲覧出来ないでいる。さらに、『楽石雑筆』の大正15年の項には、「文様集成十六輯古瓦集中に、和田千吉蔵の古瓦あり、巴瓦の破片にて推定年代は奈良朝前期とあり」などと書き残し、古瓦のスケッチも添えて記録するなど、影向寺出土の古瓦への関心を持ち続けていた。

『文様集成』も未見であるが、後に引用する住田正一の記録から、同書が大正７年以前の刊行であることが確かであり、考古学研究者としては、早い時期に、和田千吉が軒丸瓦を所蔵していたことは明らかになる。たゞ、収集時の様子などは不明である。

大場と前後して、山中　笑や上羽貞幸なども影向寺を踏査している。上羽は、大正10年頃と翌11年の終わりか12年の初めに影向寺に出掛けており、二度目の踏査は、集古会で山中や木村の話しに触発されての影向寺行きであった。三輪の「影向寺寺域発見瓦」は読んでいたようで、影向石について、「足跡石の礎石なるべしといふ御説を賛同いたしました」などと書き残している(「遺跡巡りと影向寺」『考古学雑誌』13―６　大正12年５月)。また、石野瑛『武相の古代文化』(大正13年)に、大場採集の古瓦というものが紹介されているが、軒丸瓦二点と「都」字の箆書きのある平瓦片一点のうち、軒丸瓦は、大正11年10月以降の踏査で採集したものとし

て、平瓦は、三輪が報告している影向寺所蔵の一点のように見受けられる。石野は、「宮前村の影向寺は此の古道（律令制度下の東海道……引用者注）に近い一古刹で礎石及び古瓦が存して居る」といゝ、古代寺院址と指摘しているが、それには三輪や大場の報告が預かって力があったことは疑いない。その「都」の篦書きのある平瓦は、田沢金吾「古瓦（奈良時代）」（『日本考古図録大成』16　昭和８年）にも収載されている。なお、同書には、神奈川県内出土の古瓦は、横須賀市公卿町の曹（宗）源寺や高座郡海老名村国分の相模国分寺の軒丸瓦も紹介されている。

四

武蔵国分寺の古瓦は、早くから文字瓦が学界の興味を引き、篠原市之助「武蔵国分寺古瓦に就きて」（『考古学会雑誌』２－７　明治31年11月）や沼田頼輔「武蔵国分寺発見に係る文字瓦」（『考古界』１－１　明治34年６月）、野中完一の「武蔵国分寺廃寺跡の文字瓦」（『考古界』１－８　明治35年１月）以下、多くの報告が発表されているが、影向寺出土の古瓦に関する本格的な紹介は、三輪の『考古学雑誌』や『武蔵野』の報告を以て嚆矢とするかのようである。住田正一の「古瓦発見地名表」（『考古学雑誌』９－１　大正７年９月）の武蔵国の項に、

影向寺　　巴、　　奈良　文　　和田

とあるのは、前に引用した大場の文章に、「文様集成十六輯古瓦集中に、和田千吉蔵の古瓦あり」とある『文様集成』に依拠することが明らかであり、古瓦研究で名高い住田も、大正七年九月の段階では、影向寺を探訪し、出土の古瓦を実見してはいなかったようである。この事実からしても、三輪の仕事は十分に注目されてよいように思うのである。

有舌尖頭器のサイズをめぐる諸問題

—再生加工の問題を中心として—

藤　山　龍　造

序章
第一章 有舌尖頭器研究におけるサイズの問題
第二章 有舌尖頭器分析の新たなる視点
終章

日本列島に於いて、細石器文化が発展的消滅を遂げると、やがて土器や弓矢を生活手段の中に採り入れた新しい文化としての縄文文化が誕生する。その具体的な展開は未だ詳らかではないが、幾つかの主要な石器（道具）の消失と出現と変貌とその組合せの変化を追求することによって、徐々に発展過程が明らかにされていくと考えられる（小林達雄1961：49）

序章

縄文時代の初頭には、土器、弓矢などの道具が出現し、普及してゆくことが知られている。これらは先行する先土器時代には存在しなかった道具であり、その導入によって様々な変革が起こったことは充分に想起される。たとえば近藤義郎（1965）らが言及したように、煮沸具としての土器が導入されることによって、食物調理法に新たな選択肢が加わったと考えられるし、狩猟具としての弓矢の導入によって狩猟戦略、狩猟対象の幅が広がったことなどは充分に考えられる。こうした点において、先土器時代から縄文時代への移行期は大きな変革の時期であったと捉えることができる。縄文時代初頭におけるこれら新技術の導入に対しては、早くから関心が示されており、とくに土器からのアプローチは山内清男（1929）らによって昭和初年から開始されている。

冒頭に記した小林達雄（1961）の見解は、まさにこうした移行期の変革に対する関心から提示されたものである。ここで小林は石器研究という方法から、この変革へと接近する姿勢を示している。すなわち当該期に特徴的な石器の変遷を追うことによって、新技術導入の過程へと迫る可能性について記している。なかでも好適な研究対象の一つとして有舌尖頭器を挙げているが、この小林の視点、指針は妥当である。有舌尖頭器は石鏃(1)が出現する直前からその初現期にかけて認められ、このことから弓矢の導入、普及という技術革新について考える上で不可欠な研究対象と考えられる。石器そのものの出現、普及、消滅という観点からはもちろん、それを用いた狩猟活動の変化という点においても、有舌尖頭器の研究は重要な位置を占めている。そのような意義が見出されたからこそ、芹沢長介（1966）をはじめとして、幾人もの研究者によってその変遷への接近が試みられたと言えよう。

このように縄文時代初頭、すなわち縄文時代草創期について研究するうえで、有舌尖頭器の

比重は小さくない。しかし一方でこの時期の資料が量的に貧弱であること、良好な層位的出土例が限られていることなどもあり、活発に有舌尖頭器を研究する環境に恵まれていないのも事実である。こうした現状を踏まえるのであれば、資料の集成、蓄積にはじまる基礎的な研究があらためて要求される。そうしたかたちで地盤を固めてゆくことがまずもって必要であろう。

近年では各地で資料の集成が試みられており（たとえば上敷領1997、窪田2001、飛騨考古学会2001）、その蓄積も進みつつあるが、なかでも南関東地域は有舌尖頭器の資料が比較的豊富な地域である。とくに神奈川県およびその周辺地域においては著名な遺跡も多く(2)、縄文時代草創期の良好な資料が認められる。とくに花見山遺跡（横浜市ふるさと歴史財団1995）の有舌尖頭器は「花見山型」と呼ばれることもあるように、良好な資料として知られている。こうした遺跡の調査例は近年でも増加しつつあり、三ノ宮・下谷戸遺跡（かながわ考古学財団1999a）からは数百点におよぶ膨大な資料が出土している。これは量的な面ではもちろん、有舌尖頭器の製作技術、製作体制など、製作址遺跡の様相を窺い知ることができる点で、第一級の資料として位置づけられる。また湘南藤沢キャンパス内遺跡（慶應義塾1992、1993、1994）では広大な面積が調査されており、有舌尖頭器の平面分布を観察できる稀有な遺跡である。

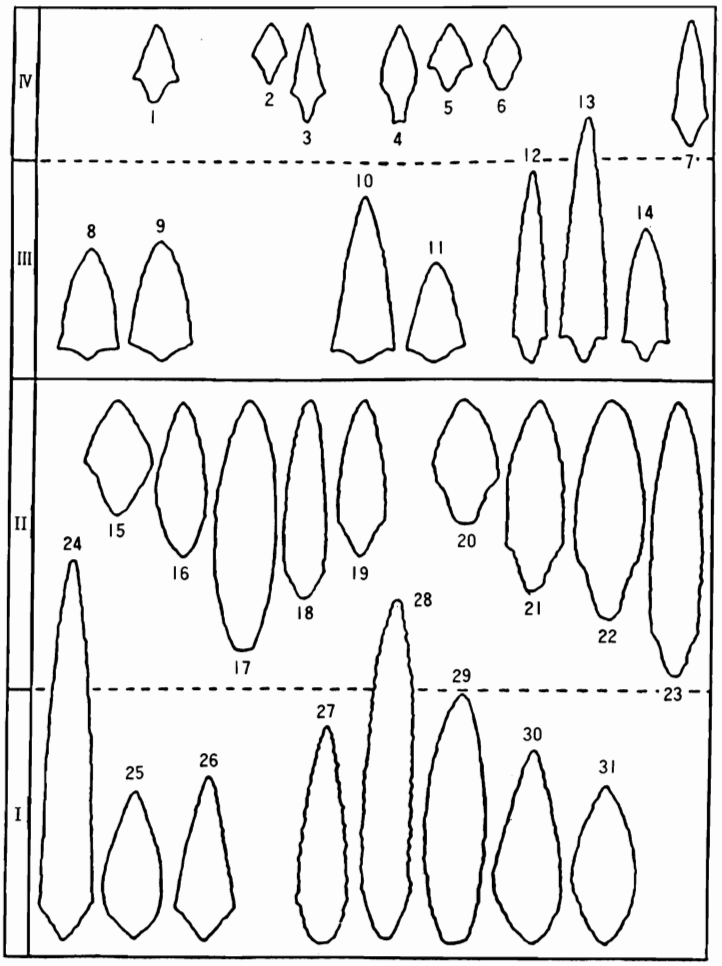
このように有舌尖頭器研究のうえで、神奈川県およびその周辺地域は全国的に見ても屈指の地域である。そうしたことから、まずはこの地域を中心として基礎的研究を進めることも可能と考えられる。本稿では有舌尖頭器の基礎的研究の一環として、とくにサイズに注目しつつ、その変遷の整理を試みる。

第一章　有舌尖頭器研究におけるサイズの問題

1．先行研究の傾向

有舌尖頭器の編年は芹沢（1966）によってその試案が提出されて以来、複数の研究者によって論じられてきた（たとえば増田1981、加藤1978、鈴木1986、白石1988など）。これら先学の成果として、現在までにその大略的な変遷が明らかになりつつある。これらの成果については既に各所で触れられているため（たとえば鈴木1986、白石1988など）、ここでは詳述を控える。だがそれら先行研究に共通した方法的傾向が認められる点には注意を要する。すなわち有舌尖頭器の編年研究では、その平面的な形態がいくつかに類型化され、それぞれに共伴する土器や石器群の比較をとおして、時間軸上に序列化される。この一貫した手続きに基づいて、各類型は時間的な前後関係に置き換えられる。

こうして構築される編年観は、主にその舌部形態とサイズを変遷の指標としている。すなわちこれらの属性が経時的にどのように変化するかという点に注目する。たとえば芹沢（1966）は不明瞭な舌部を呈するものから明瞭なものへ、長大なものから短小なものへという変化を描いたが（第１図）、これはその典型である。このように主に二つの属性の変化に注目する傾向



第１図　芹沢(1966)による編年試案

1. 長野県曽根　2～3. 埼玉県橘立岩陰　4～6, 12～14. 新潟県小瀬ヶ沢　7. 山形県一ノ沢　8～9. 愛媛県上黒岩岩陰　10～11. 長野県柳又　15～19. 新潟県中林　20～23. 北海道　24～26. 福井県鳴鹿　27～31. 新潟県本ノ木

があるが、なかでもサイズの変化を重視する傾向がある。この理由の一つとして、石鏃の出現との関連がある[3]。たとえば芹沢（1966）らのように小型化現象の先に石鏃の出現を求める見解もあれば、より複雑な変化を想定し、単純に石鏃へと結び付けない見解もある。いずれにせよ先行研究においては、経時的なサイズの変化が重視されるが、この点において通時的なサイズのバラエティーに対する関心は大きかったと言える。

その一方で、一時期、一地域におけるサイズのバラエティーを重視することは少なかったようである。もちろん研究の当初から、こうした共時的なバラエティー[4]が認められることは知られていた。たとえば芹沢（1966）による編年試案の図（第１図）を見てもそれは明らかである。だがこうしたサイズのバラエティーは、有舌尖頭器の大略的な変遷を把握するために、さほど重視されることなく捨象されてしまう傾向があったことは否めない。たとえば芹沢編年で

は、これらのバラエティーは研究対象としては重要な位置を占めず、むしろ大型から小型への変遷を提示する上でさほど注目されなかったようである。もちろん増田一裕（1981）のように身部長比などを提示することはあったが、それらが研究の中心となることは稀であった。

こうした傾向が認められるなかで、筆者はこの共時的バラエティーを捉えることにも充分に意義があると考えている。有舌尖頭器は狩猟具、特に投槍の先端部としての機能を与えられることが多いが（鈴木1972）、こうした道具は様々な目的に応じてサイズを作りかえることが少なくない。とくに用途差などはその好例である(5)。それだけに狩猟具を研究する際には、共時的にどれほどのサイズ差を呈するかという点に対しても注意を払うことが要求される。

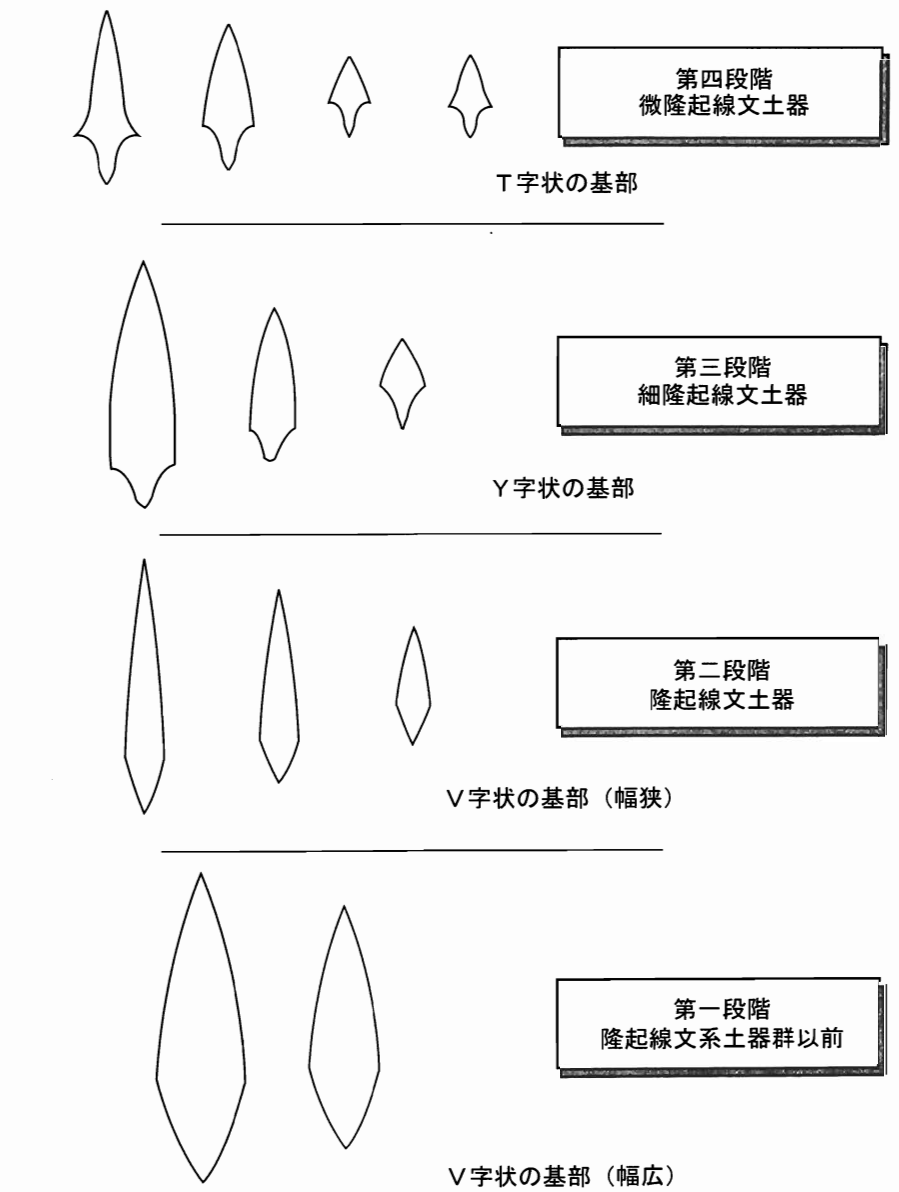
もちろん大略的な編年を把握するには、共時的なサイズ差をひとたび捨象したうえで考察する必要がある。その点において、先行研究は相応の成果をあげたと評価することができる。だがそうして変遷の大略が把握されつつある昨今においては、改めて共時的なバラエティーに対して目を向けることも要求される。ともすれば捨象されてしまいがちなこれらの情報に注意することによって、新たな有舌尖頭器の変遷の様相ひいては石鏃との関係についても射程に捉える可能性がある。この点において、小型化という変遷の傾向を捉えつつも、一時期に複数のタイプが認められるとした白石浩之（1988、1989）の視点は評価すべきである(6)。以下本稿では有舌尖頭器の基礎的研究を行ううえで、こうした共時的なサイズ差にも目を向けつつ、その変遷の整理、検討を試みる。

2．有舌尖頭器の変遷概観

ところで共時的なバラエティーを把握するには、大略的な変遷が定まっていなくてはならない。ここでは分析対象地域(7)における有舌尖頭器の変遷を概観した後に、サイズの問題に触れることにする。当該地域におけるその変遷に関しては既に私見を記したことがあるため（藤山2001a）、ここでは詳細に論ずることを避け、変遷の概要についてのみ記す（第２図）。これは主に伴出する土器との関係から設定したものである。

第一段階

隆起線文系土器群以前の有舌尖頭器を発生期の資料として位置づける。土器を伴出しない資料、あるいは無文土器など、隆起線文系土器群に先行すると考えられる土器を伴出する資料をここにまとめた。この段階の資料は一般に舌部、返しの作出が不明瞭であることに特徴を求められる。側縁部は比較的緩やかなラインを描いて舌部へと移行するため、V字状の基部を呈する。この段階では幅が広く、槍先形尖頭器との区別が難しいこともある。また土器を伴わない資料と伴う資料とでは時期差を示す可能性があるものの、セツルメントの問題(8)もあることから、ここでは同一の段階として区分しておく。勝坂遺跡（第45次調査）出土資料（相模原市市道磯部上出口改良事業地内遺跡調査団1993）、前田耕地遺跡出土資料（加藤他1983、前田耕地



第２図　有舌尖頭器の変遷

遺跡調査会1977～1986）などがこの段階に該当すると考えられる。

第二段階

隆起線文系土器群のうち古相の所産とされる隆起線文土器（太隆起線文土器）を伴出する資料をここに位置づける。返しの作出は明瞭でなく、第一段階に引き続いてV字状の基部を呈するが、幅狭な資料が目立つようになる。この段階において槍先形尖頭器との区別は明瞭になる。この形状を呈する資料には、一部に土器を伴出しない例も存在し、第一段階との中間的様相を呈する。このことから若干古相の資料として位置づけることが可能かもしれないが、第一段階同様の理由から、ここでは同一の段階として一括する。南鍛冶山遺跡出土資料（藤沢市教育委員会1994）、黒川東遺跡出土資料（川崎市1979）、多摩ニュータウンNo.426遺跡出土資料（東京都埋蔵文化財センター1981）などがこの段階に該当すると考えられる。

第三段階

隆起線文土器に後続する細隆起線文土器を伴出する資料を第三段階としてまとめた。舌部の作出が第二段階に比して明瞭になり、それと連動して返しの作出も明瞭となっている。返しから舌部端にかけて緩やかに内湾するものが多く、これによって基部はY字状を呈する。湘南藤沢キャンパス内遺跡Ⅰ区出土資料（慶応義塾1992）などがこの段階の資料として位置づけられる。

第四段階

隆起線文系土器群のうち、終末段階の所産と考えられる微隆起線文土器に伴出する資料をこの段階に位置づけた。返しの作出は第三段階よりもいっそう明瞭になり、舌部の作出も顕著になっている。返しが水平に近く張り出す資料も目立ち、細い舌部を作出するものも多いことから、基部はT字状に近くなる。側縁部の形状は内湾、外湾、それらを組み合わせたものなど多様である。三ノ宮・宮ノ前遺跡（伊勢原市教育委員会1990）、能見堂遺跡（横浜市ふるさと歴史財団1997）、宮之前南遺跡（かながわ考古学財団1998）、三ノ宮・下谷戸遺跡（かながわ考古学財団1999a）、宮之前遺跡（かながわ考古学財団1999b）などから出土した資料をこの段階の所産と見なすことができる。

以上に記した有舌尖頭器の変遷は、舌部がV字状からY字状を経てT字状へと変化する過程としてまとめることができる。これは舌部の明瞭化、あるいは返しの明瞭化と言い換えることも可能であり、この点では芹沢（1966）らが提示する編年観とほぼ矛盾しない。さらに言うのであれば、舌部に関しては一時期における形態の変異は顕著でなく、ある程度の規格性がある。これは舌部が着柄部であるゆえにランダムにつくることなく、一定の形状におさまる必要が

あったためと考えることもできる。

3．サイズの変遷について

このように舌部の形状に注目することによって、有舌尖頭器の変遷を定めることができる。こうしたなかで、先行研究でも注目されてきたサイズの変遷について検討していきたい。本稿ではサイズのバラエティーという視点から、その変遷を追跡してゆくが、はじめにそれがどの程度のサイズに収まるかという点について考える。第３図に最大長のヒストグラムを提示したが、これを見ればあらためて各段階にバラエティーが認められることが分かる。以下に段階ごとの傾向を示す。

第一段階

この段階の資料は出土点数が多くないことから詳細な検討は避けるが、最大長100㎜を超える資料が多いと考えられる。この点においても、槍先形尖頭器との峻別は容易でない。

第二段階

最大長100㎜を超える長大な資料が散見される一方で、40㎜程度の短小な資料も認められる。この段階の資料も数量的に充分でないことから即断は避けるべきだが、多くの資料は50㎜から70㎜程度の範囲に収まる。

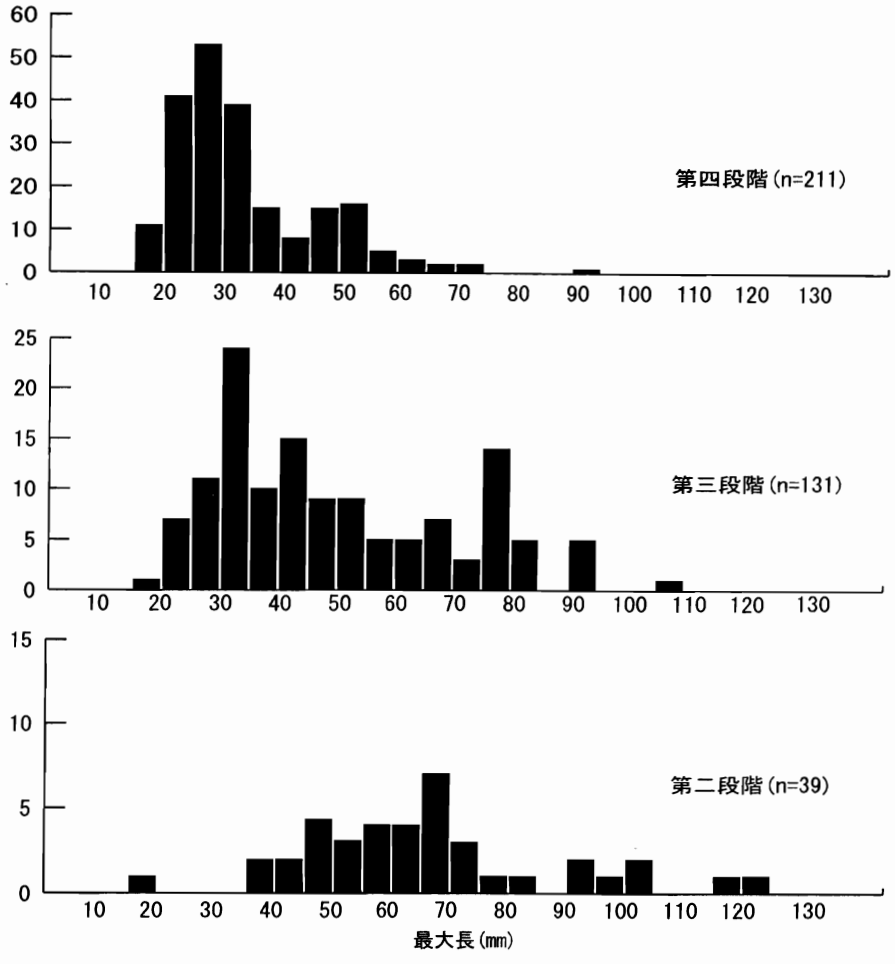
第三段階

この段階の資料は特徴的である。最大長は20㎜前後から100㎜を超えるものまで、かなりのバラエティーを示す。こうしたなかでも30㎜から40㎜程度の資料が多く認められ、一方で80㎜程度の資料も一定量存在する傾向が認められる。すなわち少なくとも大きく二つの集中域を示す点に特徴がある。

第四段階

この段階の資料も第三段階に類似した傾向を示す。最大長20㎜前後から60㎜を超える資料まで幅がある一方で、最大長20㎜から30㎜程度の資料が多数を占めている。ただしこれは三ノ宮・下谷戸遺跡（かながわ考古学財団1999a）の膨大な資料がここに集中するためであり、実際には最大長50㎜前後の資料も多い。このように前段階と同様、大きく二つのサイズに集中する傾向を指摘できる。

編年上重要な指標とされてきたサイズであるが、大略的な傾向を捉えた場合には、初期の長大な資料中心の段階から、短小な資料中心の段階へと変遷してゆく過程が看取される。このよ



第３図　有舌尖頭器のサイズとその変遷

うに捉えるならば、サイズの変遷に関しても芹沢（1966）らの編年観と大きく食い違うことはない。だがここに見て取れるように、有舌尖頭器のサイズには常にバラツキがあり、これに注目するならば若干様相は異なってくる。バラツキがあるのは、石器が規格品ではないことから当然の傾向と見ることもできるが、ここではバラエティーを示しつつも一定のまとまりを示す点に注意してみたい。注目すべきはとくに後半段階において、一つのサイズに収斂しない点である。すなわち第三段階、第四段階においては、少なくとも二つ以上のサイズに偏る傾向が顕著である。このようにサイズという側面に関しては、ある程度小型化の傾向を示しつつも、とくにその後半段階では、大小二つ以上のタイプに分化している可能性が指摘される。

第二章　有舌尖頭器分析の新たなる視点

１．有舌尖頭器の再生加工をめぐる問題

1-1）石器の再生加工

ただしこの問題について考えるのであれば、再生加工という避けては通れない問題がある。すなわち単純に二つ以上のサイズに集中するからといって、それが製作時に生み出されたものと即断するわけにはいかない。言い換えるのであれば、このサイズ差は破損に伴う補修によって生じた可能性もあり、製作の当初においては認められなかった可能性もある。後述するように、近年では短小な有舌尖頭器がこうした現象によって説明されるケースもあるため、その可能性について触れておきたい。

再生加工に関する議論はFrison（1968）や Dibble（1987）による議論が著名である。Frisonは北アメリカ先史時代の石器資料に関して、Dibbleはヨーロッパ中期旧石器時代の資料、とくにスクレイパーに関して研究したことで知られている。これらの研究で指摘されたのは、石器の形態は製作から廃棄に至るまでの過程で、再生加工によって変形されるため、その結果廃棄され、現在我々が考古資料として目にする資料の形態は、必ずしも製作時のそれと同一ではないという点である。

これらの観点は国内にも導入され、阿部祥人（1993）、長崎潤一（1987）、新田浩三（1995）、簗瀬裕一（1985）ら多くの研究者によって、様々な器種に関する分析が試みられている。しかしこれらの成果があげられる一方で、リダクション理論の濫用が見受けられるのも事実である。そもそもは形態分類に対する警鐘として提示されたリダクション理論であるが、近年では詳細な検討を欠いているにも関わらず、リダクションによってあらゆる形態のバラエティーを説明しようとする傾向も認められる。当然のことかもしれないが、再生加工によって石器の形態が変化しうる可能性と、それによって石器の形態が変化した事実は区別して考えなくてはならない。詳細に再生加工品の事例を検討しつつ、どの程度形態が変化しうるのか、どれほどの頻度でそうした現象が認められるのかという点について検討する必要がある。そしてそれ相応の根拠をもってリダクションの可能性とそれによる説明の有効性が提示されなくてはならない。

1-2）有舌尖頭器のサイズと再生加工

これは有舌尖頭器に関しても同様である。一般にその主たる機能が投槍など狩猟具の先端部と推定されることは既に触れた。そうした用途から考えて、有舌尖頭器が頻繁に破損したことは容易に推測がつく。その際に、恐らくはその製作上の効率や石材の節約といった要因から、しばしば破損部分を補修し、完形の石器へと作り直すことによって、再び狩猟具としての機能を取り戻させたことは充分に想定される（たとえば阿部1993, Frison, Wilson, and Wilson 1976, Flenniken and Raymond 1986, Flenniken and Wilke 1989）。狩猟具という性質上、破

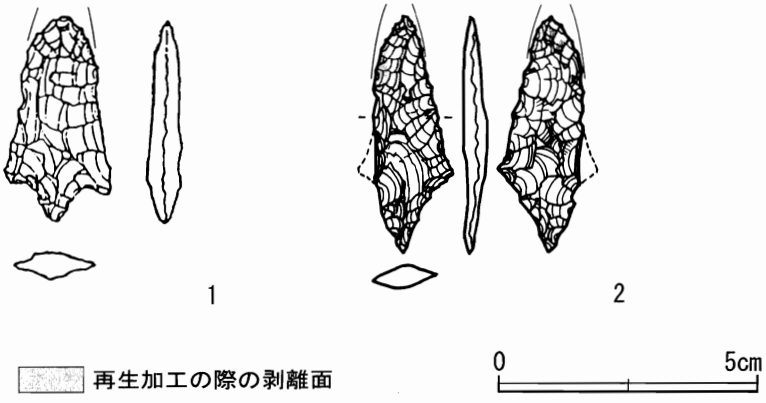
損の頻度も決して低くなかったであろうから、そうした石器が頻繁に修復されたとしても、決して不思議ではない。とくに先端部や舌部の破損が多いことは充分に想定されるし、実験によっても同様の傾向が得られている（たとえば御堂島1991, Barton and Bergman 1982, Bergman and Newcomer 1983, Flenniken and Raymond 1986, Odell and Cowan 1986, Towner and Warburton 1990)。そして何よりも出土例に先端部、舌部の破損が多いことから、そうした破損の修復を目的とした加工、すなわち再生加工によって有舌尖頭器の最大長が変化し、サイズの大小が生産された可能性は充分に考えられる。

実際に短小な有舌尖頭器が再生加工の産物として説明されることは珍しくない。たとえば「花見山型」[9]などと称せられる短小な資料が、再生加工のなれの果てとして語られるケースがある。また北海道の遠軽ポイントが再生加工の産物である可能性について指摘されるなど[10]（横山1986：7)、やはり再生加工による説明が少なくない。だがときとしてそうした説明は印象論に終始し、明確な根拠を有していないこともある。やはり再生加工によって小型化しうる可能性と、実際に小型化した現象との区別が必要である。ここでは再生加工が施されたと判断される有舌尖頭器について、いくつかの事例を検討し、それによる説明の可能性を探る。

1-3）再生加工の事例

ところで尖頭器の再生加工は何を根拠にして判定すべきであろうか。Frison らは尖頭器に対する再生加工は以下の特徴によって見極められるとしている。すなわち再生加工を施された尖頭器は、①長軸方向の断面を観察した場合、その末端部において急激に厚みを減じ、②先端部に、製作時の規則的な剥離と異なる不規則的な剥離を有する上に、③側縁部の形状が急激に変化する、とする。更には④衝撃剥離が新たな剥離によって切られているものも、再生加工品としてみなしうるとしている(Frison and Stanford 1982：195-197)。またこれに加えて、先端部の剥離面とそれより下位の（すなわち基部よりの）剥離面との先後関係が明瞭な場合、すなわち前者が後者に比して時間的に後に形成されたと判断される場合、これも再生加工の傍証と見なすことが可能であろう。

こうした観点からいくつかの事例を観察してみよう（第４図)。１は子合頭遺跡から出土した有舌尖頭器である[11]。明瞭な舌部、返しが作出されており、現存で最大長40㎜、最大幅21㎜、最大厚7㎜を測る。両側縁部からの丁寧な押圧剥離によって、シンメトリカルに仕上げられている。個々の剥離は比較的深く、中軸線まで達するものもある。舌部は特に細かい剥離によって丁寧に作出されている。本資料の側縁部は直線的であるが、先端部で急激に屈曲している。屈曲部の剥離面は他の剥離面に後続することから、これらによって先端部の屈曲が生じたと考えられる。また先端部の長軸方向の断面を観察すると、急激に厚みが減少しており、不自然な形状を呈する。このことから先端部の破損に伴って、その部分に再生加工が施された資料と判断される。



第4図　再生加工を施された有舌尖頭器の例
1. 子合頭遺跡　2. 花見山遺跡

また２は花見山遺跡より出土した資料である。舌部の作出は明瞭だが、返しはそれほど明瞭でない。右側の返しを欠損しており、現存で最大長46㎜、最大幅16㎜、最大厚4㎜を測る。表裏両面とも左右側縁部より押圧剥離が施されており、素材面は認められない。本資料の先端部は左右非対称であるが、これは左側縁部に対して重点的に細かな剥離が施されることによって先端部が作出されたためである。この剥離は下位の剥離に比して新しく施され、これによって先端部が屈曲していることから、先端部の破損に伴う再生加工品と推察される。

1-4）再生加工説の可能性

ここに観察されたように、有舌尖頭器に再生加工が施された例はいくつか認められる。このことから考えて、再生加工の結果として有舌尖頭器が小型化することは、実際に起こった現象といえる。しかしここで注意しなくてはならないのは、こうした事例は必ずしも多くないという点である。前述した事例のように、再生加工の痕跡が明瞭に観察された資料は極めて限られている。もちろんこれは痕跡が明瞭な資料に関しての話であり、それ以外にも再生加工を施された資料が存在することは充分に考えられるし、それが自然であろう。しかしここで重要なのは、そのように認定し得ない資料が存在することを考慮に入れたとしても、再生加工の事例が少ないと考えられることである。破損資料を観察すると、充分に再生加工が可能であるにもかかわらず、それが施されていない資料が多い。このことから考えて、少なくとも折れれば補修するほど、再生加工が高頻度であったと判断することはできない。

有舌尖頭器に対して再生加工を施すには、本来身部のなかでも基部寄りであった部分を先端部へと作りかえなくてはならない。しかしながら、ある程度の厚みを持った基部寄りの部分を

先端部へとつくりかえるには、その厚みを取り除いて、先端部に適した薄さにする必要がある。また同時にそれを尖頭状に作り上げなくてはならないことから、極めて煩雑な作業が要求される（西村1989）。この点において有舌尖頭器はスクレイパーなどの器種とは異なっており、再生加工を加える作業は容易ではない。これは僅かな破損であればさほど問題とならないかもしれない。しかし長大な資料を短小な資料として再生するのであれば、この工程を避けることはできない。

したがって効率という問題について考えるのであれば、再生加工によって大きく形態を変更することが、それ程有効だとは考えられない。ましてや長大な資料が短小なそれへと変わるまで、徹底的に再生加工を繰り返すことが日常的であったと積極的に判断することはできない。第４図に示した事例を観察する限りでは、再生加工によって10㎜前後サイズが減少したと判断されるが、これは例外的な数値ではないだろう。すなわち再生加工を原因とする小型化現象は確かに認められるが、それによって数十㎜もサイズが変化したと想定するのは現実的ではあるまい。換言するならば、有舌尖頭器の変遷過程で認められる大小の分化現象が、こうした二次的要因に帰されると判断することはできない。

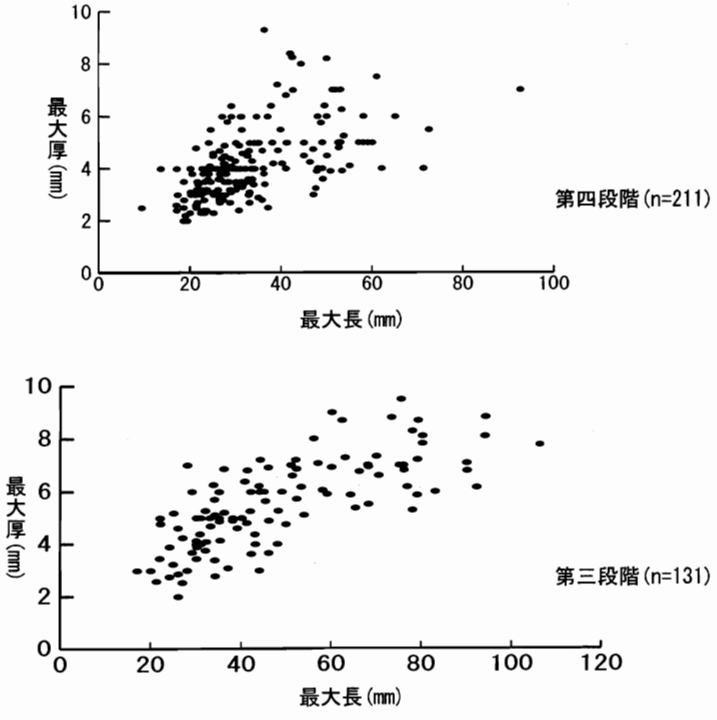
２．有舌尖頭器のつくり分け

2-1）最大厚の問題

以上のように再生加工という要因のみにてサイズのバラエティーを説明することは、いささか妥当性に欠けている。共時的なサイズのバラエティーへと目を向けるのであれば、やはり大小の資料が分化している可能性を考慮に入れなくてはならない。このように考えた場合、有舌尖頭器の最大厚について検討することが重要な意味を帯びてくる。再生加工が施され、石器の形態が変形するとき、一般に厚さはもっとも変化しにくい属性の一つと考えられる(12)。したがってこの属性に注目することによって、再生加工の有無について検討することも可能と考えられる。ここではこの属性に注目し、再生加工による説明の妥当性を検討する。なお以下では便宜的に、ヒストグラム（第３図）上に認められる大小をそれぞれ「大型品」、「小型品」と呼ぶことにする(13)。

資料数が多い第三段階、第四段階について、その最大長－最大厚比を散布図にて示した（第５図）。「大型品」に対して再生加工が加えられ、その結果「小型品」へと変化したのであれば、両者の最大厚は近似することが予測される。しかし現実は必ずしもその通りではない。すなわち「大型品」と「小型品」とでは最大厚に少なからず差が認められることが分かる。すなわち第三段階においては、後者の多くは最大厚3㎜から6㎜程度を測るのに対して、前者は最大厚6㎜から9㎜程度が主体となっている。また第四段階においては、「小型品」が最大厚2㎜から5㎜程度を測る一方で、「大型品」は多くが4㎜から7㎜の範囲に収まることがわかる。このように両段階において、「大型品」と「小型品」とでは最大厚にズレが認められる。

こうした点を鑑みるのであれば、「小型品」を「大型品」のなれの果てとして位置づけるこ



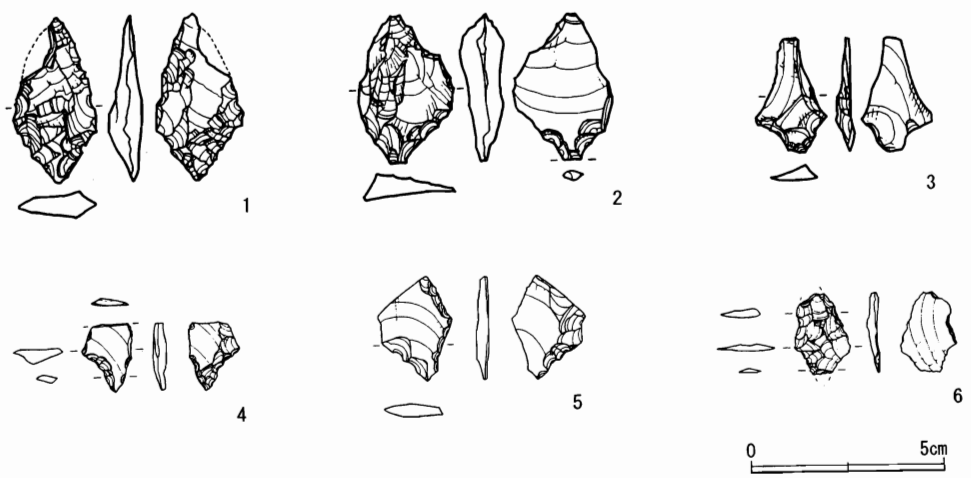
第５図　有舌尖頭器の最大長－最大厚比

とは困難をともなう。もちろん最大厚に関して、両者が近似する場合もある。したがって、再生加工の結果小型化した資料が存在する可能性は認めなくてはならないだろうし、実際に存在する。しかしここで重要なのは、それでも製作の当初から「大型品」と「小型品」とが存在したと考えられる点である。

2-2）素材選択の問題

この問題を考えるうえで、素材の選択に注目することも重要である。たしかに有舌尖頭器は両面加工石器であるため、素材面を残さないものが多い。それゆえ素材の選択について検討することは必ずしも容易でない。しかし「小型品」に関しては素材面を残す資料も少なくないことから、選択された素材について触れることもあながち不可能ではない。

第６図に有舌尖頭器の未成品を示した。ここから「小型品」の素材について若干触れてみたい。紙幅の都合上詳述は控えるが、これら未成品に共通しているのは、そのいずれもが完成品を幾分上回る大きさ、厚さの剥片であるという点である。そしてこれに細かな押圧剥離を施し



第６図　「小型品」の未成品
1～3. 花見山遺跡　4～6. 三ノ宮・下谷戸遺跡

ていくことによって、先端部や舌部などの部位が作出されてゆく。すなわちここでは大型の素材を大幅に作りかえるのではなく、小型の素材に対して少々の調整を加えることによって完成品へと仕上げてゆく傾向が認められる。周縁調整の資料、主剥離面を残す資料が多いのは、こうした工程に由来すると考えられえる。

一方の「大型品」の素材に関しては不明なところが多い。だが「大型品」の素材がどのようであれ、ここで重要なのは「小型品」の素材が小さく、ともすれば完成した「大型品」をも下回るという点である。すなわち「小型品」は素材選択の時点で小さいのであって、「大型品」の再生加工の産物とみなすことは困難である。「大型品」と「小型品」とでは、製作の工程そのものが異なっていた可能性も想定される。この点については稿を改めて論ずるが、本稿で重要なのは、やはり両者が製作の段階から区別されているという点である。

2-3）小結

上述した最大厚、あるいは素材の選択について総合的に考慮するならば、製作時から有舌尖頭器が「大型品」と「小型品」とに区別されていたと判断される。少なくとも第三段階、第四段階に関してはそのように言えよう。ただし第二段階に関しては資料不足であるため、大小の分化について決断を下しかねる。短小な資料が限られており、また最大厚などの属性に関しても明瞭な差異が認められないことから、再生加工の可能性を積極的に否定できない。この段階には細身かつ長大な資料が多く、破損しやすい形態を呈するだけに、そうした可能性も想定しなくてはならない。むしろ第三段階、第四段階において、大小の区別が明瞭になる点にこそ意義を見出すことができるのかもしれない。

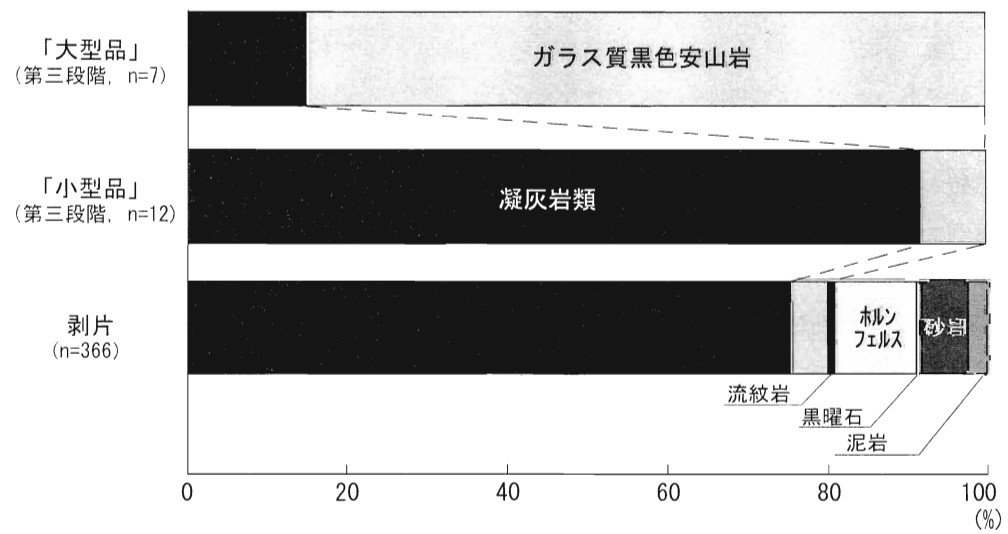
3．製作地の問題

3-1）湘南藤沢キャンパス内遺跡の事例分析

ところでこのようにサイズが分化しているなかで、ときとして「大型品」と「小型品」とが使用石材からも区別される点には注意を要する。ここではそうした原材料に関する問題を取り上げるが、各遺跡を超えて一律に石材の問題を論ずるよりも、豊富な資料を出土した遺跡単位の事例分析からはじめたい。

本稿では広大な面積が調査され、多くの有舌尖頭器を出土した湘南藤沢キャンパス内遺跡（慶應義塾1992、1993、1994）の事例を取り上げることからはじめる。本遺跡は、相模川の東岸、高座丘陵のほぼ中央部に位置し、縄文時代草創期の良好な資料が検出されている。本研究では、同遺跡から出土した有舌尖頭器のうち、第三段階の資料19点、第四段階の資料14点を対象とし、「大型品」と「小型品」との石材差についてそれぞれ検討した。

第三段階の検討結果を第７図に示してあるが、ここから一目瞭然なように、「大型品」と「小型品」とではその使用石材が少なからず異なっている。すなわち「大型品」には、本遺跡周辺では箱根火山周辺でしか採取できないガラス質黒色安山岩（たとえば上本・境1998、柴田1994、1995、1996、柴田・上本・山本1991、山本1993、1996、山本・柴田・高松1997）が多用されているのに対し、「小型品」は遺跡周辺で採取可能な凝灰岩類（柴田1994、1995、1996、中村1995）が多用されている。これは言い換えるのであれば、「大型品」が主に非在地系の石材を選択的に利用して製作されるのに対して、「小型品」が在地系の石材を多用して製作されるという、明瞭な差異が認められる。また第四段階に関しては「大型品」が限られているため断言するこ



第７図　湘南藤沢キャンパス内遺跡における有舌尖頭器および剥片の石材組成

とができないが、類似した傾向を読み取ることが可能である。

さらに本遺跡から出土した剥片の石材組成について検討した結果[14]（第７図）、殆どが在地系石材の凝灰岩類であり、非在地系石材であるガラス質黒色安山岩は僅かであった。しかも後者のほとんどは、尖頭器などを調整する最終段階で生じた剥片であるという結果を得た[15]。これに加えて、有舌尖頭器の未成品及び、明らかに製作時に破損したと考えられる有舌尖頭器についても検討したところ、そのすべてが凝灰岩製の「小型品」であった。

そうしたことから、少なくとも本遺跡に関しては次のように結論することができる。すなわち「大型品」が遺跡外で製作され、本遺跡に搬入された一方で、「小型品」に関しては、遺跡内で製作された可能性が指摘できる。すなわち「大型品」と「小型品」とでは、その製作地が異なっていた可能性がある[16]。この点に関して、前田耕地遺跡（加藤他1983、前田耕地遺跡調査会1977～1986）や三ノ宮・下谷戸遺跡（かながわ考古学財団1999a）、下茂内遺跡（長野県埋蔵文化財センター1992）など、石材の原産地周辺に位置し、狩猟具を大量に製作、搬出していた遺跡が認められることは極めて示唆的である。

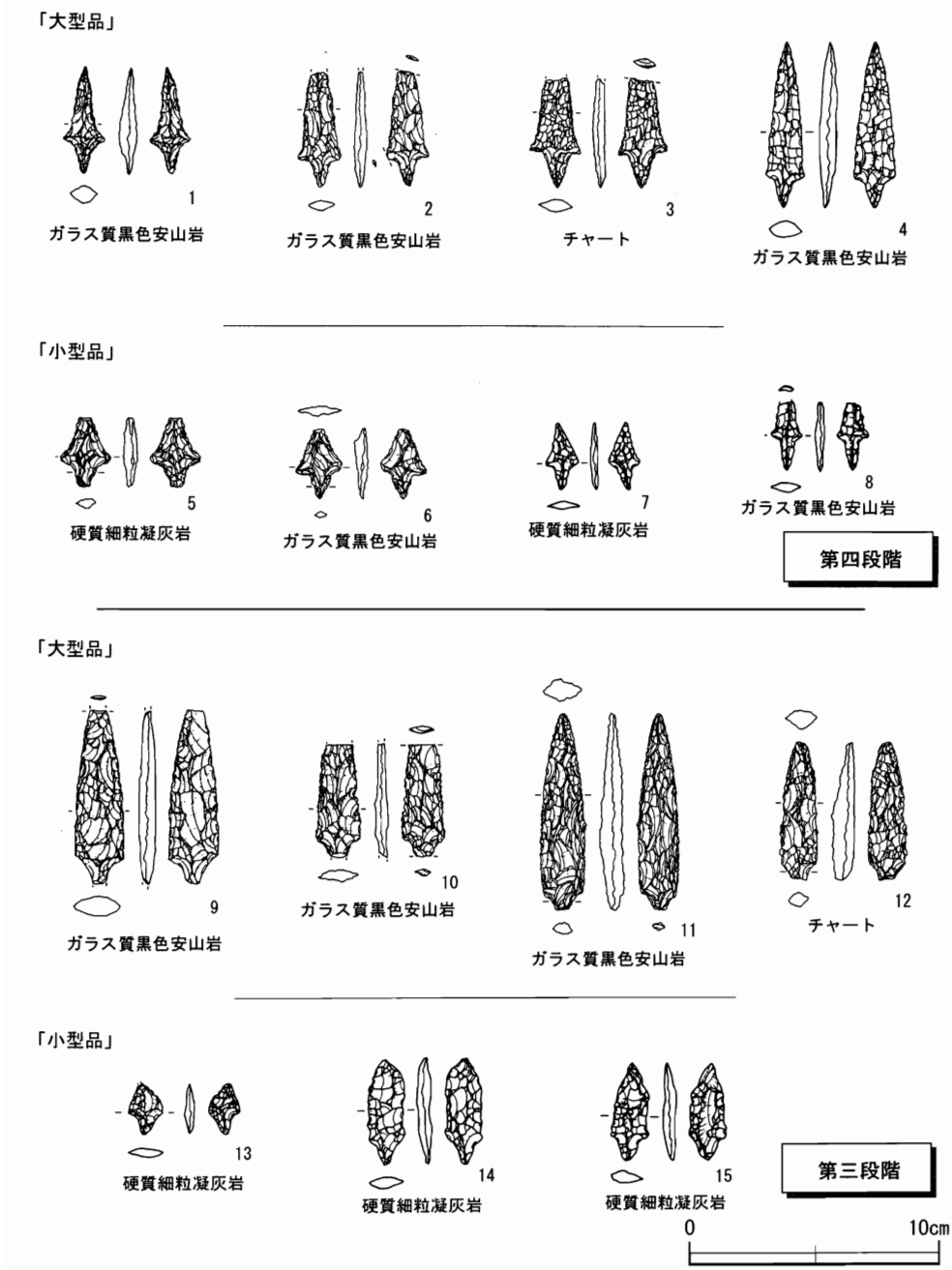
3-2）製作場所の問題

こうした事例を踏まえて他遺跡の例について考えるならば、類似した傾向が看取されることに気がつく。とくに相模野台地以西の地域に顕著な傾向であるが、この地域ではやはり「大型品」にガラス質黒色安山岩やチャートなど、非在地系の石材が多用されている（第８図）。これら非在地系石材を用いた「大型品」が多く認められる一方で、その未製品や製作時の破損品は限られている。またその素材となりうる礫、剥片も限られており、製作の痕跡を窺い知ることが困難である。前述した事例分析の結果を考え合わせるのであれば、これらの「大型品」が搬入品であった可能性も想定しなくてはならない。

その一方で「小型品」にはガラス質黒色安山岩も用いられるが、その他在地の石材も多用される傾向を見て取れる。これらには湘南藤沢キャンパス内遺跡（慶應義塾1992、1993、1994）のように、遺跡内で製作されたと判断される資料も少なくない。しかし三ノ宮・下谷戸遺跡（かながわ考古学財団1999a）のようにガラス質黒色安山岩を用いて、「小型品」ばかりを大量に製作、搬出していた遺跡もあることから、必ずしも単純化して考えることはできないようである。とくに第四段階以降、ガラス質黒色安山岩製の「小型品」が増加する点には注意する必要があるだろう[17]。こうしてみた場合、有舌尖頭器の製作場所は極めて複雑な様相を呈していると言うこともできる。製作址遺跡、消費地遺跡の調査例が増えなくてはその詳細な検討は困難であろうが、今後そうした製作地の問題についても考えてゆく必要がある。

終章

マクロな視点から捉えるのであれば、有舌尖頭器の変遷は大型から小型へという流れを描く



第８図　有舌尖頭器の「大型品」と「小型品」

1～3, 9～10. 吉岡遺跡群A区　4, 7, 13～15. 湘南藤沢キャンパス内遺跡Ⅰ区

5～6, 11～12. 臼久保遺跡　8. 湘南藤沢キャンパス内遺跡Ⅱ区

ことができる。これはその変遷の一側面として重要である。一方で本稿の主目的は、ややミクロな視点も使い分けつつ、その変遷を捉えることであった。すなわち各段階に認められるサイズのバラエティーに注目することによって、より複雑な有舌尖頭器の変遷過程を捉えられる。これによって少なくともその後半段階において、有舌尖頭器は「大型品」と「小型品」とに分化している様相を読みとることが可能である。

この分化は再生加工という単一の要因に帰されることはない。むしろ製作時から両者が区別されていた姿を読みとることが可能である。もちろん再生加工という現象そのものは否定されないが、それでもこうした様相が看取される点が重要である。これら大小の資料はときとして製作場所を異にしていた可能性もあり、そうした複雑な体制のなかで有舌尖頭器が製作されていたと考えることができる。

もちろんこれは有舌尖頭器のみにて完結する問題ではない。この第三段階、第四段階は石鏃が狩猟具の組成へと加わり、安定してゆく時期である。当然のことながら、有舌尖頭器の小型化現象の延長線上に石鏃の出現を想定することはできない。むしろここで注目すべきは、隆起線文系土器群の後半段階において、大小の有舌尖頭器、石鏃に槍先形尖頭器が加わった、極めて複雑な狩猟具組成が認められる点である。この複雑な組成こそが有舌尖頭器の後半から終末段階の様相である。そしてこうした組成から、石鏃主体の組成へと移行してゆく。これこそが縄文時代初頭における石鏃出現、普及の過程である。

この点において石鏃導入と有舌尖頭器のサイズ分化との関係は注目に値する。ここでは結論を留保せざるを得ないが、このサイズ差が機能差を反映したことなどは、充分に想定される。したがってこのサイズ差を的確に位置づけることによって、石鏃を主体とした狩猟具組成へと移行してゆくその様相について接近する可能性もある。サイズ差の性格について考えることは容易でないだろうが、居住地に残された資料と、そこから持ち出された資料のサイズが異なっている点（藤山2001b）は、重要なヒントかもしれない。いずれにせよ狩猟具のサイズ分化という観点から、先土器時代から縄文時代への移行の様相について、その一端を捉えることも可能となってくるだろう。

註

(1) 縄文時代初頭における「石鏃の出現」とは、慣例的に無茎石鏃の出現を指すことが多い。これは縄文時代前半における石鏃の大半に茎の作出が認められないことによるが、実際には短小な有舌尖頭器が鏃的に使用された可能性もある。すなわちここで言う「石鏃の出現」とは、器種としての石鏃の出現と同義であり、必ずしも弓矢の出現とパラレルでないことに注意しなくてはならない。本稿では石鏃という用語を用いるとき、慣例にしたがって無茎石鏃を指すことを断っておく。

(2) 比較的早くから知られている遺跡として、上野遺跡第1地点（大和市教育委員会1986）、なすな原遺跡（なすな原遺跡調査会1996）、花見山遺跡（横浜市ふるさと歴史財団1995）、相模野第149遺跡（大和市教育委員会1989）、寺尾遺跡（神奈川県立埋蔵文化財センター1980）などがある。これらの大半は隆起線文系土器群、あるいはその前後の段階に比定されるが、南関東ではこの段階の遺跡が多いことで知られる。一方で後続する多縄文系土器群の段階に比定される遺跡は限られている。このように縄文時代草創期でも、その前葉の遺跡が多い点に本地域の特色を求めることができる。

(3) もちろんこれは石鏃出現への関心にとどまらない。たとえば重要な問題として、本ノ木論争との関連がある。長大な尖頭器と短縄文を施文した土器との共伴の可能性をめぐっては、芹沢と山内との間で議論が交わされたが（芹沢・中山1957、山内1960、山内・佐藤1962）、ここでは長大な尖頭器の時間的位置が問題となる。言い換えるのであればそれが縄文時代初頭の早い段階の所産であるか、それとも遅くまで存在するかどうかが問題となるのである。この点において、長大な有舌尖頭器の時間的位置に関心が寄せられる。

(4) ここで共時的というとき、必ずしも厳密な意味での共時性を指すわけではない。すなわちここでは同時性を指すのではなく、近接した時間を含んだ概念としてこの用語を用いている。

(5) たとえば佐藤宏之（2000:126）はロシア沿海州の狩猟漁労採集民であるウデヘが、クマやアカシカ用の「大型の槍」と、イノシシ用の「小型の槍」とを区別して利用する事例を報告している。

(6) 白石（1988）は舌部の形状などに基づいて、有舌尖頭器を6つの類型に大別している。そしてそのうちいくつかが組み合わさって変遷してゆく過程を提示した。白石の指摘は熟考に値するが、その事実認定には慎重を要する。すなわち土器との確実な共伴関係が捉えられない事例も多いことから（藤山2001a：42）、今後そうした点も含めて検討してゆくことが要求される。

(7) 本稿で分析対象とするのは神奈川県およびその周辺地域である。具体的には多摩川流域の武蔵野台地から多摩丘陵、相模野台地を経て相模川西岸の秦野盆地、大磯丘陵へと続く地域を主体としている。なお本稿で提示する変遷観は東日本一帯で適用可能と考えている。

(8) 狩猟場、一時的なキャンプサイト、石器製作址など、恒常的な居住の場以外では、必ずしも土器を出土するとは限らない。このことから、土器を伴出しないことイコール時期差と即断することは慎重を要する。遺跡の機能について勘案したうえで時間的問題が論ぜられるべきである。

(9) ともすれば「花見山型」という概念は曖昧に定義されたまま用いられ、研究者間で一貫していないことがある。そもそも坂本彰（1995）は、良質な石材の入手が困難な花見山遺跡において、原石が徹底的に消費される姿を「花見山型」として定義している。すなわちここで指摘されたのは、石器の「製作から器種構成に及ぶ全体系」（坂本1995：119）であった。

一方で白石浩之（1988）のように、返しや舌部の作出が明瞭な有舌尖頭器に対してその用語を使用する場合もある。これは石器群ではなく、有舌尖頭器という単一の器種に限定した定義である。さらに有舌尖頭器に限定した場合でも、短小な資料のみを示す場合もある。またよりいっそう限定して、花見山遺跡に認められる十字形の資料（報告書図版66、No.66）のみを指す場合もあり、その定義が相当に入り乱れていることが分かる。

このことから、現時点で「花見山型」なる用語を用いるのは混乱を招く恐れがある。したがって用語の使用を控えるか、もしくは明確な定義のもとに使用することが要求される。

(10) 横山（1986：7）は遠軽ポイントが量的に限られている点、形状のいびつさ、二次加工の粗さなどから、それが長大な立川ポイントの再生加工品である可能性について触れている。再生加工の可能性について論じる際には、こうした根拠が提示されることが望ましい。

(11) 本資料に関しては、筆者は実見しておらず、実測図上の判断であることを断っておく。また計測値に関しても同様である。

(12) たしかに有舌尖頭器は両面加工石器であるがゆえに、再生加工の際に厚みを減ずることもあっただろう。しかしそれは破損部の厚さが変化することであって、最大厚そのものは変化しにくかったと考えられる。

(13) ヒストグラム上でのサイズの分布から考えて、「大型品」と「小型品」との境界に関しては、便宜的に50㎜（第三段階）、40㎜（第四段階）と設定しておく。

(14) 「情報基盤センター」（慶應義塾1994）より出土した剥片に関しては、すべてを実見していないため、ここではデータに加えていない。本調査区出土資料の大半は、伴出した土器との関係から、第二段階の所産と判断されるため、データとしては問題ないと考える。

(15) 一方の凝灰岩製の剥片には礫打面の資料も多いことから、原石もしくはそれに近い状態でそれが持ち込まれたことが推察される。

(16) この傾向は槍先形尖頭器にも当てはまる。短小な資料には凝灰岩類が多用されるのに対して、長大なそれにはガラス質黒色安山岩やチャートなどの非在地系石材が利用されている。このことから、後者が遺跡外で製作された搬入品であった可能性を指摘することができる。

(17) 想像をたくましくすることが許されるならば、この段階において三ノ宮・下谷戸遺跡のように「小型品」ばかりを集中的に製作、搬出する体制が整った可能性もある。「小型品」の位置づけとともに、今

後検討してゆかなくてはならない問題である。

引用・参考文献

［論文（邦文）］

阿部祥人　1993　「石器の欠損と再生加工」　『史学』62-3

上本新二・境雅仁　1998　「箱根火山のガラス質黒色安山岩」　『神奈川考古』34

加藤晋平他　1983　「秋川市前田耕地遺跡　－縄文時代草創期の住居址と石器製作址－」　『日本考古学協会第49回総会　研究発表要旨』

加藤　稔　1978　「有舌尖頭器に関する覚書」　『弓張平遺跡　第一次二次発掘調査』

上敷領久　1997　「南関東における有舌尖頭器の展開」　『東京考古』15

窪田恵一　2001　「武田西塙遺跡の旧石器時代終末期～縄文時代草創期石器群について　－茨城県における当該時期の一様相－」　『武田西塙遺跡　旧石器・縄文・弥生時代編』

小林達雄　1961　「有舌尖頭器」　『歴史教育』9-3

近藤義郎　1965　「後氷期における新しい道具」　『世界歴史　第一巻　先史の世界』　人文書院

坂本　彰　1995　「第3章　第3節　石器」　『花見山遺跡』

佐藤宏之　2000　『北方狩猟民の民族考古学』　北海道出版企画センター

柴田　徹　1994　「使用石材から見た旧石器時代の南関東における地域性について」　『松戸市立博物館紀要』1

柴田　徹　1995　「南関東における石器石材」　『石器石材』

柴田　徹　1996　「かながわにおける縄文草創期の使用石材」　『かながわの縄文文化の起源を探る』

柴田徹・上本進二・山本薫　1991　「宮ヶ瀬遺跡群および神奈川県内出土の緻密黒色安山岩製石器の石材産地」　『宮ヶ瀬遺跡群Ⅱ』

白石浩之　1988　「縄文文化の起源をめぐる問題　－有舌尖頭器からの一提言－」　『神奈川考古』24

白石浩之　1989　『旧石器時代の石槍』　東京大学出版会

鈴木道之助　1972　「縄文時代草創期初頭の狩猟活動　－有舌尖頭器の終焉と石鏃の出現をめぐって－」　『考古学ジャーナル』76

鈴木道之助　1986　「新東京国際空港No.12遺跡の有舌尖頭器をめぐって」『千葉県文化財センター研究紀要』10

芹沢長介　1966　「新潟県中林遺跡に於ける有舌尖頭器の研究」　『日本文化研究所研究報告』2

芹沢長介・中山淳子　1957　「新潟県津南町本ノ木遺跡調査予報」　『越佐研究』12

長崎潤一　1987　「石斧の形態変化について　－接合資料を中心として－」　『早稲田大学大学院文学研究科紀要　別冊　第14集　哲学・史学編』

中村喜代重　1995　「旧石器時代の相模野台地と凝灰岩原産地」　『旧石器考古学』51

西村勝広　1989　「西区第Ⅲ層出土槍先形尖頭器の形態分類と修正・再生加工の可能性について」　『野川中洲北遺跡』

新田浩三　1995　「下総型石刃再生技法の提唱」　『千葉県文化財センター研究紀要』16

飛騨考古学会　2001　「有舌尖頭器集成」　『飛騨と考古学Ⅱ　旧石器特集号』

藤山龍造　2001a　「神奈川県下における有舌尖頭器の変遷」　『利根川』22

藤山龍造　2001b　「狩猟具出土の場とその評価　―縄文時代草創期における「単独出土」資料の位置づけ―」　『民族考古』5

増田一裕　1981　「有舌尖頭器の再検討　－本州・四国の出土例を中心として－」　『旧石器考古学』22

御堂島正　1991　「石鏃と有舌尖頭器の衝撃剥離」　『古代』92

簗瀬裕一　1985　「乱馬堂遺跡におけるエンド・スクレイパーの属性分析」　『考古学研究』31-4

山内清男　1929　「関東北に於ける繊維土器」　『史前学雑誌』1-2

山内清男　1960　「縄文土器文化のはじまる頃」　『上代文化』30

山内清男・佐藤達雄　1962　「縄文土器の古さ」　『科学読売』12- 13

山本　薫　1993　「緻密黒色安山岩製石器の石材産地推定方法について」『筑波大学先史学・考古学研究』4

山本　薫　1996　「中部・東海および関東地方の石器に利用される緻密黒色安山岩（ガラス質黒色安山岩）の特徴と石材産地」　『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年』

山本薫・柴田徹・高松武次郎　1997　「ガラス質黒色安山岩製石器の石材産地推定方法に関する研究－蛍光X線分析法とプレパラート法による石材産地推定結果の比較と評価－」『縄文時代』8

横山英介　1986　「北海道の有舌尖頭器」　『考古学ジャーナル』258

[論文（欧文）]
Barton, R. N. E. and C. A., Bergman 1982 “Hunters at Hengistbury: Some Evidence from Experimental Archaeology” *World Archaeology* 14-2
Bergman, C. A. and M. H., Newcomer 1983 “Frint Arrowhead Breakage: Examples from Ksar Akil, Lebanon” *Journal of Field Archaeology* 10-2
Dibble, H. L. 1987 “The Interpretation of Middle Paleolithic Scraper Morphology” *American Antiquity* 52-1
Flenniken, J. J. and A. W., Raymond 1986 “Morphological Projectile Point Typology: Replication Experimentation and Technological Analysis” *American Antiquity* 51-3
Flenniken, J. J. and P. J., Wilke 1989 “Typology, Technology, and Chronology of Great Basin Dart Points” *American Antiquity* 91-1
Frison, G. C. 1968 “A Functional Analysis of Certain Chipped Stone Tools” *American Antiquity* 33-2
Frison, G. C. and D. J., Stanford 1982 *Agate Basin Site: A Record of the Paleoindian Occupation of the Northwestern High Plains* Academic Press ,New York
Frison, G. C. M., Wilson and D. J., Wilson 1976 “Fossil Bison and Artifacts from an Early Altithermal Period Arroyo Trap in Wyoming” *American Antiquity* 41-1
Odell, G. H. and F., Cowan 1986 “Experiments with Spears and Arrows on Animal Targets” *Journal of Field Archaeology* 13-2
Towner, R. H. and M., Warburton 1990 “Projectile Point Rejuvenation: A Technological Analysis” *Journal of Field Archaeology* 17-3

[発掘調査報告書]*
伊勢原市教育委員会　1990　「三ノ宮・宮ノ前遺跡」　『文化財ノート』1
神奈川県立埋蔵文化財センター　1980　『寺尾遺跡』
かながわ考古学財団　1998　『長津田遺跡群Ⅳ　宮之前南遺跡』
かながわ考古学財団　1999a　『三ノ宮・下谷戸遺跡Ⅰ』
かながわ考古学財団　1999b　『長津田遺跡群Ⅴ　宮之前遺跡』
川崎市　1979　『黒川東遺跡』
慶應義塾　1992　『湘南藤沢キャンパス内遺跡　第2巻　岩宿時代・縄文時代Ⅰ部』
慶應義塾　1993　『湘南藤沢キャンパス内遺跡　第1巻　総論』
慶應義塾　1994　『湘南藤沢キャンパス内遺跡　情報基盤センター（仮称）』
相模原市市道磯部上出口改良事業地内遺跡調査団　1993　『勝坂遺跡第45次調査』
東京都埋蔵文化財センター　1981　『多摩ニュータウン遺跡』（昭和55年度　第3分冊）
長野県埋蔵文化財センター　1992　『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書1　－佐久市内その1－　下茂内遺跡』
なすな原遺跡調査会　1996　『なすな原遺跡　No.2地区調査』
藤沢市教育委員会　1994　『南鍛冶山遺跡発掘調査報告書　第1巻　縄文時代草創期』
前田耕地遺跡調査会　1977～1986　『前田耕地』Ⅰ～Ⅳ
大和市教育委員会　1986　『月見野遺跡群上野遺跡第1地点』
大和市教育委員会　1989　『相模野第149遺跡』
横浜市ふるさと歴史財団　1995　『花見山遺跡』
横浜市ふるさと歴史財団　1997　『能見堂遺跡』

*発掘調査報告書の類に関しては、本文中に引用したもの以外は割愛した。ご容赦願いたい。

『考古論叢　神奈河』の寄稿要綱

1．神奈川県考古学会の学術研究会誌として『考古論叢　神奈河』を刊行する。

2．発行は、年１回とする。

3．会誌の内容は、原則的には神奈川県及びそれに関連する主題についての論文、資料・研究ノート等の発表の場とする。

4．原稿の採否等、編集・刊行上の業務は、編集委員会を設け、そこで実施する。

5．会誌に寄稿することができる者は、次のとおりとする。

(1)　神奈川県考古学会の会員。

(2)　編集委員会から調査・研究上に必要があって寄稿の依頼がなされた者。

(3)　その他、編集委員会で適当と認めた者。

6．寄稿する原稿の枚数は、原則として制限しない。ただし、編集委員会の判断で、紙数等の関係から分割して掲載することもありうる。

7．原稿料金の支払い、掲載料金の徴収は行わない。

原稿の募集!!

『考古論叢　神奈河』は、みなさまで育てる会誌です。

考古学界に衝撃を与えるような論文も歓迎しますが、身近かにある資料の紹介や、研究ノートも気楽に投稿してください。

第11集の締切は、平成14年12月末日を予定しております。ふるっての寄稿をお待ちしております。

編集委員　田村良照、依田亮一、大塚真弘、諏訪間　順

問い合わせ先　田村良照　Tel　046-234-6977（自宅）

神奈川県城山町向原東遺跡出土の表裏縄文土器

山　田　仁　和

1．はじめに
2．向原東遺跡出土の土器
3．神奈川県内の比較資料の検討
4．表裏縄文土器の編年
5．初源期の表裏縄文土器に関連する土器
6．石畑系列の検証
7．おわりに

1．はじめに

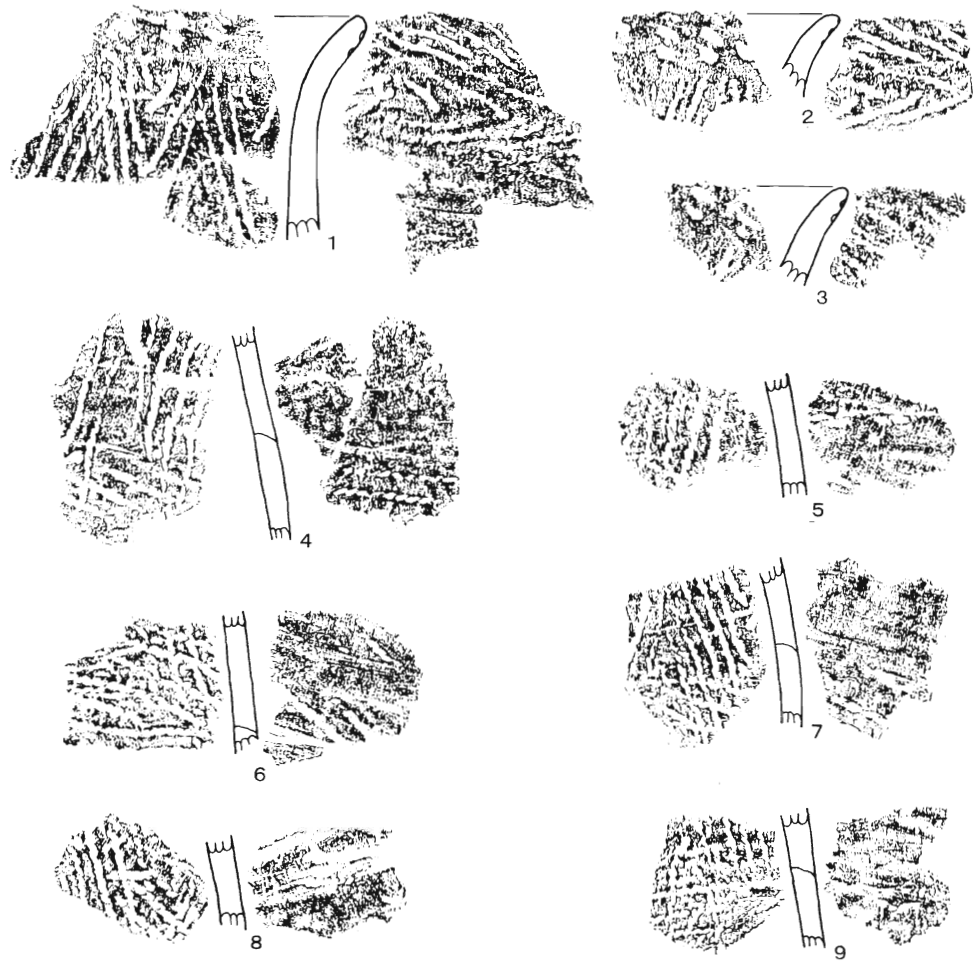
神奈川県における縄文時代草創期土器の研究は、土肥孝氏の先駆的な取り組み（土肥1986）があり、また大和市域の上野遺跡第１地点、第２地点、相模野第149遺跡、上草柳第３地点東遺跡、深見諏訪山遺跡、綾瀬市寺尾遺跡、藤沢市代官山遺跡、横浜市花見山遺跡等では比較的まとまった資料が出土し資料が蓄積されてきた。しかしながら、これらの遺跡の多くでは隆線文系土器が主体的に出土し、草創期後半に関しては良好な資料に恵まれていない。

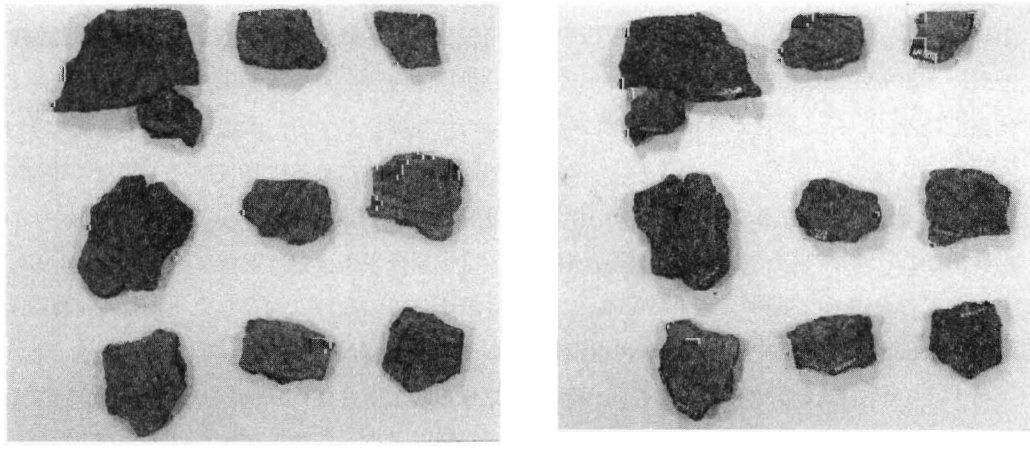
本稿では、神奈川県津久井郡城山町向原東遺跡から出土した器面表裏に施文された草創期後半に位置づけられると考えられる土器の分析をつうじて、当該期の土器群の編年と系統について検討する。

2．向原東遺跡出土の土器

第１図に示した資料は1999年に実施された川尻向原土地区画整理事業にともなう埋蔵文化財調査で向原東遺跡において出土した（註1）。遺跡の位置、立地および図示した遺物の出土状況の詳細については近日中に刊行予定の報告書に譲ることとし概要を述べることとする。遺跡は神奈川県津久井郡城山町向原に所在し相模川と谷津川の合流地点の河岸段丘上に立地する。遺物出土地点は、段丘縁辺から約600m東に位置し平坦な地形を呈する。本遺跡の基本土層は表土を含めて５層に分けられ、このうち本遺跡出土土器の大半を占める中期後半の土器は第Ⅲ層を中心として出土する。ここで検討する土器は第Ⅲ層から５点、第Ⅳ層から７点、第Ⅴ層から１点検出され、すべて同一個体片である。層位的には中期後半の土器と明瞭に分離できないが、出土地点の周辺では早期後半（条痕文系）以外は出土していない。図示した土器は平面的には直径約２ｍの範囲に集中し、約60cmの上下差をもって出土した。

第１図１～９は接合しないものの同一個体片である。１～３は口縁部片、４は口縁部下の弱い括れ部から胴部中央部のやや膨らむ部位、５～９胴部上半から中央部にかけての部分にあた





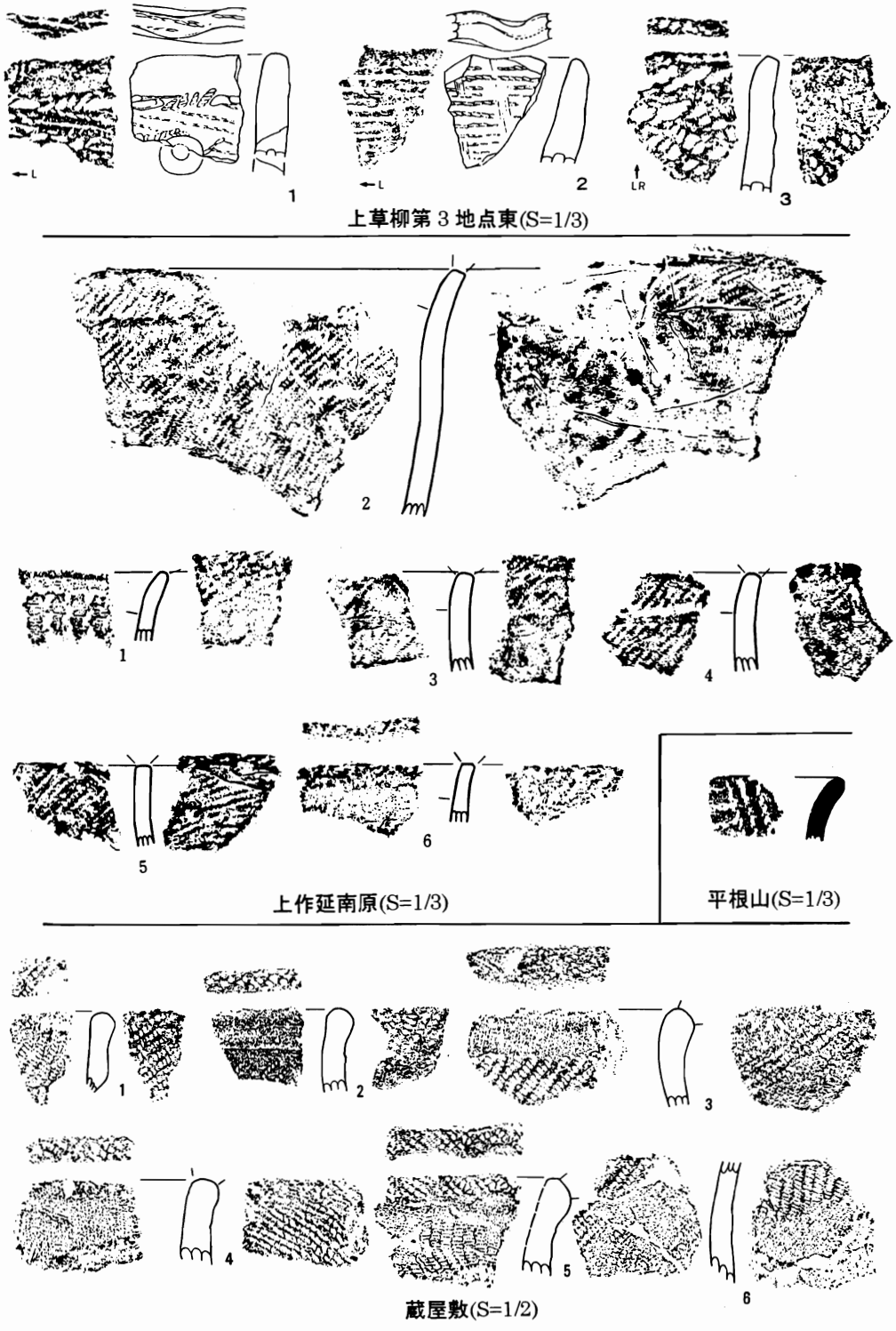
第１図　向原東遺跡出土土器（Ｓ＝1/2）

る。色調は外面が暗めの赤褐色、内面は暗褐色を呈し、胎土には小砂粒を含む。胴部内面には指腹による浅い凹凸がみられる。口唇部はやや尖頭状～丸頭状を呈し肥厚はしない。口縁部は長さ2.5～３cm、緩く外反し頸部がわずかに括れ、胴部はやや膨らんで底部に移行すると考えられる。文様は口唇部直下の外面にＲ撚の撚糸を用いた短い撚糸側面圧痕が右下がりに２～３条、縦位に間隔を開けて施される。この撚紐側面圧痕の周囲は施文時の押圧により窪んでおり、口縁部を上面方向から観察すると細かい波状を呈している。撚糸側面圧痕は１条に３～４の節が認められる。口縁部から胴部最大径付近までには縦方向に木目状撚糸文が施文されている(註2)。胴部には斜位から横位方向に施文されている。器面の条の切り合いからは、胴部の施文後、口縁部に縦位の施文が行われたことが観察される。口縁部内面には外面と同一原体によると推定される木目状撚糸文を横位に施文する。１、４にみられるように、内面施文は口縁外反部は密であるがその下には無文部をおき、胴部には疎らに施文される。

この土器は表裏縄文土器で、いわゆる多縄文系（註３）に属するものと一応考えられるが南関東においては当該期の資料は未だ少なく類例を指摘することは困難である。そこで、本資料のいくつかの特徴に注目し、他遺跡の資料と比較することによって編年的、系統的位置付けを明らかにしていく。向原を比較検討する上での具体的な特徴は、1）口縁部の押圧施文、2）口縁部の幅の広い文様帯、3）器面表裏面に施文、4）口縁が外反し胴部がやや膨らむ器形、等である。表裏縄文土器のうち地文以外に文様を施文される資料は少ない。はじめに口縁部文様帯をもつ例について検討していく。

３．神奈川県内の比較資料の検討

神奈川県内における表裏縄文土器のうち口縁部文様帯をもつものおよび関連する資料を第２図にあげた。上段１～３は上草柳第３地点東遺跡（中村1984）出土で、１、２には地文に横走する撚糸文が施文され、１は口縁部の幅の狭い無文部下に絡条体圧痕が施され、この下部にやや間隔をあけて撚糸側面圧痕が見られる。２は横走する撚糸文が観察されるが、土肥孝は上部の条が回転手法ではなく撚糸側面圧痕であるとしている（土肥1986)。１、２はともに口縁の上面観が波状を呈する。３は地文にＲＬ縄文が施され、この上に地文より太いＲＬ原体を横位に２段押圧している。内面には口縁部に無文部を有し、以下にＲＬ縄文が施文される。表面の短い撚糸側面圧痕の横圧される幅と裏面の無文部の幅がおおよそ一致することを土肥が指摘している。このほか、同遺跡ではＬＲ縄文の地文上に２条の撚糸側面圧痕を施文した土器が２点出土している。これらの資料は地文縄文上に横位の撚糸側面圧痕で幅の狭い文様施文部を区画する共通性が認められる。１についてはは口縁無文部がこの文様施文部の上に重畳するという特徴を有する。



第２図　上草柳第３地点東・上作延南原・平根山・蔵屋敷遺跡出土土器

報告書では文様の系統からは回転縄文土器に比定できるだろうとしながら、横位撚糸が施文されることから縄文草創期の回転縄文土器群と撚糸文土器群を繋ぐものとの評価を与えている（中村1984）。また、先に言及した土肥孝の考察（土肥1986）では、押圧手法が用いられるという共通性、１、３の無文部の両側に地文を有する点からこれらに「型式学的近似性を感じざるを得ない」とした上で、柊の湖Ⅱ式と同一時期ないしやや古い時期に位置づけている。土肥の編年観は押圧→半置・半転→回転という変遷を重視しており、表裏縄文の存在と押圧手法の採用から前記のような編年的位置付けとなった考えられる。しかしながら、表裏縄文である３の内面の幅狭の無文部は後段で論じる表裏縄文の内面施文の縄文に対比出来るものとすれば、表裏縄文でも古くは位置づけられないこと、および撚糸側面圧痕は井草式でも用いられることから、これらの土器群は柊の湖Ⅱ式に先行することはないものと考察される。

第２図中段１～６は上作延南原遺跡（持田1986）の資料で、２～４は同一個体とされている。１は表面の口縁部にＬ撚の撚糸を用いた短い撚糸側面圧痕を２段、傾きを違えて羽状に施文する。内面には単節縄文が、表面の２段の撚糸側面圧痕の施文部とほぼ同じ幅で施される。２～４の口縁部には幅の狭い無文部が見られ、施文はこの無文部を境として「上方に向けてと、下方に向けてとに、振りわけてされており、上下方向に振り分け施文で少し盛りあがった感のある５㎜幅の無文境界帯が横走し、口頸部文様帯を作り出している」とされている（持田1986）。内面には無文部上部の縄文施文部と同じ幅で縄文が施される。５は表裏両面とも縄文が施文されており、内面は遺存部以下にも及ぶものと推定されている。６は口縁部表面に無文部を有しこの下部にＬＲ縄文を施す。内面の縄文施文部の幅が外面の無文部の幅とほぼ一致する点は注目される。

上草柳第３地点東遺跡と上作延南原遺跡の資料は撚糸側面圧痕の施文あるいは無文部により口縁部に幅の狭い文様帯を区画、作出し、内面にはこの表面の文様施文部とほぼ同一の幅で縄文施文部ないし無文部が見られることを特徴とする土器群であるといえる。後者の特徴を有するものが、蔵屋敷遺跡（小林1992）出土の表裏縄文土器群（第２図下段１～６）中に確認される。２～４は口唇部直下に横位の器面調整による無文部があり、内面にはこれと同一幅で縄文が施文されている。また、６は口縁部が欠損し口唇直下が不明だが内面の縄文施文が括れ部までおよぶことからすれば、２～４に見られる表面の無文部は存在しないと推定される。

向原東遺跡資料の内面施文は外反する口縁部を中心に行われ、この下に指頭押圧の目立つ無文部をもち胴部中央部は疎らである。内面の無文部下端は器面表面では、撚糸側面圧痕の施文方向が縦位から横位にかわる部分にあたり、器表裏面の文様施文の幅を対応させようという意図がうかがえる。このような特徴については、上草柳第３地点の土器に関して前に触れたように土肥が指摘しており、上作延南原遺跡の資料はその好例である。蔵屋敷遺跡においては器表面に作出された無文部の幅に対応して内面に縄文が施される。上作延南原遺跡や蔵屋敷遺跡の表裏縄文は、内面の縄文施文が口縁部付近に限られるという特徴を有することから後述する戸

田哲也の提唱する「三枚原型」の段階に位置づけられる。器面表面の口縁部文様帯幅の狭小化と、内面施文の口縁部への集中化傾向は並行して進んでいると考えられる。

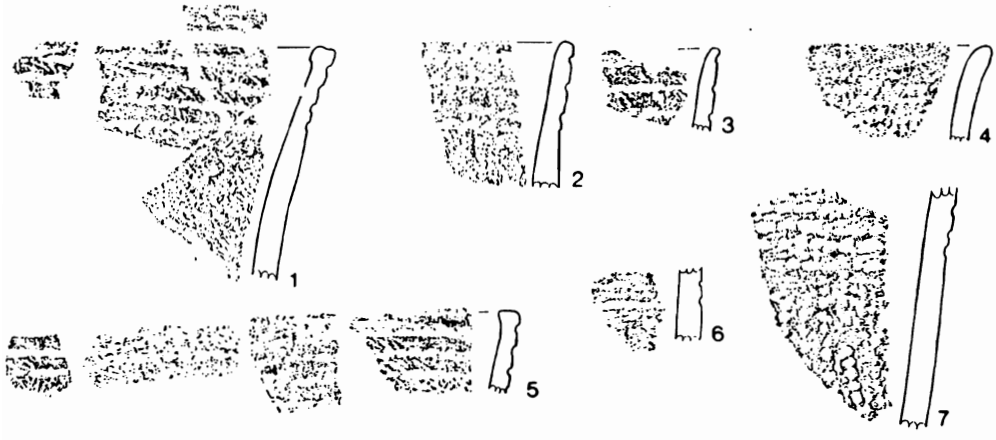
4．表裏縄文土器の編年

表裏縄文土器については近年、いくつかの論考が発表され、とくに編年的位置付けについては異なった見解が提示され共通の理解に至っていない。

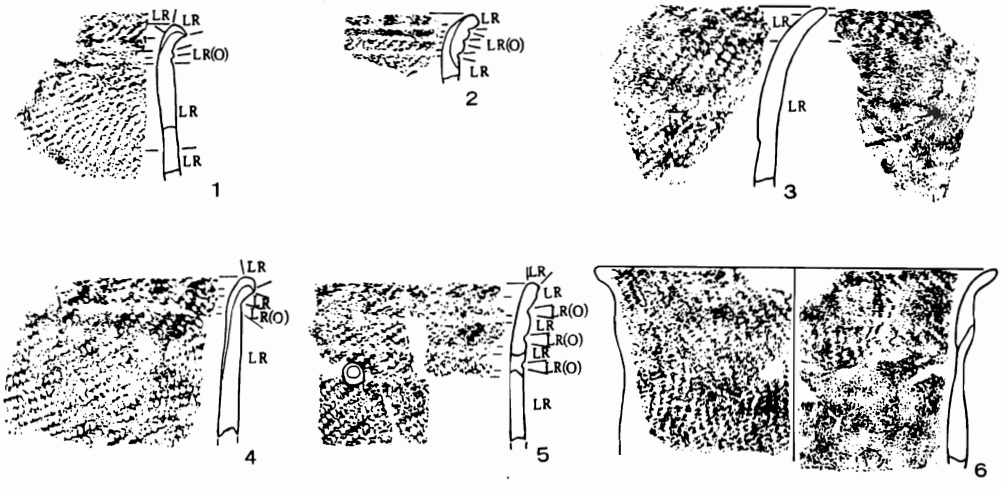
戸田哲也は表裏縄文土器を井草式以前に位置づけるが（戸田1988）、宮崎朝雄・金子直行は井草式直前段階に大谷寺洞穴を位置づけ、学史上著名な栃の湖や石畑、小佐原、栃原等を井草Ⅰ式、三枚原、増野川子石の一部等を井草Ⅱ式に並行させた（宮崎・金子1989）。戸田の編年観は、小佐原→三枚原を基軸として室谷下層式の並行関係に置き、これに「石畑２類」、栃原岩陰出土の縄側面圧痕文を後続させ、室谷上層式に並行するとした。戸田は1994年の論文（戸田1994）では、石畑１類、２類を石畑下層、石畑上層と「呼び変えることを改めて提案したい」としており、この改変には「土器認定の訂正を含め」ていることが触れられている。1988年と94年の戸田の見解の異同について検討すると、石畑１類は94年の論文では石畑上層に含められたものが多く、石畑下層の資料は88年の論文では石畑１類としてあげられてた２点があるのみで、94年の論文ではじめて取り上げられたものが大半である。さらに、石畑上層は三枚原に「大略並行するという編年的位置を改めて主張しておきたい」と述べているが、88年の段階では表面のみ回転縄文、縄側面圧痕文を特徴とする石畑２類は「室谷上層式に類似するといわれる」と解説しており、井草式並行の段階の可能性が高いことを示唆していた。表裏縄文土器の終末を井草式以前とする戸田の立場からすれば、この訂正は詳細に取り上げられるべきであろう。戸田の88年の見解を重視すれば、石畑上層は室谷下層および上層に並行することになり、井草式の直前から井草式並行の位置を占める土器が含まれることになる。

表裏縄文土器の編年に関して筆者は、器面内面に凹凸が目立ち縄文が胴部下半まで施文される「小佐原型」から、内面整形が丁寧に行われ内面の縄文施文が口縁部に集中する「三枚原型」への変遷は、戸田が主張に従い基軸にすべきであると考える。各型の標識とした両遺跡は至近距離にあり、この新旧関係は石畑岩陰において層位的にも保証されているとすべきである。これを小佐原・三枚原系列とする。このように考えた場合、問題なのは戸田が旧稿（戸田1988）で「石畑２類」とした土器群のうち撚糸側面圧痕をもち内面に縄文施文のない資料（第３図１、２、４、５）である。戸田はこれら栃原岩陰の撚糸側面圧痕の資料について「石畑岩陰において確認された層位関係に基づけば、この類は表裏縄文より上層位に存在するようであり、室谷上層式との関連のもとにより新しい時期の所産と考えられる可能性がある」とされた。石畑岩陰の層位の認定については議論があり（宮崎・金子1989、中島1991、山形1991）、戸田も若干の修正をしているが、ここで問題としている土器群（第３図下段）が最下層（14層）の上位か

大谷寺洞穴(S=1/3)



雨古瀬(S=1/3)



石畑(S=1/3)

第３図　大谷寺洞穴・雨古瀬・石畑岩陰遺跡出土土器

ら出土していることは認めてよいと思われる。この石畑岩陰で第１群第６類とされた、縄文が「表面のみの施文で、口縁直下に１～３条の押圧縄文が加えられる」および第７類「第６類同様押圧縄文が加えられるが、器壁が薄く、胎土に金雲母を大量に含んでいる。また、口縁は外反せずに直立する」（巾1988）とされた土器の編年的な位置と系統はどのように考えるべきであろうか。

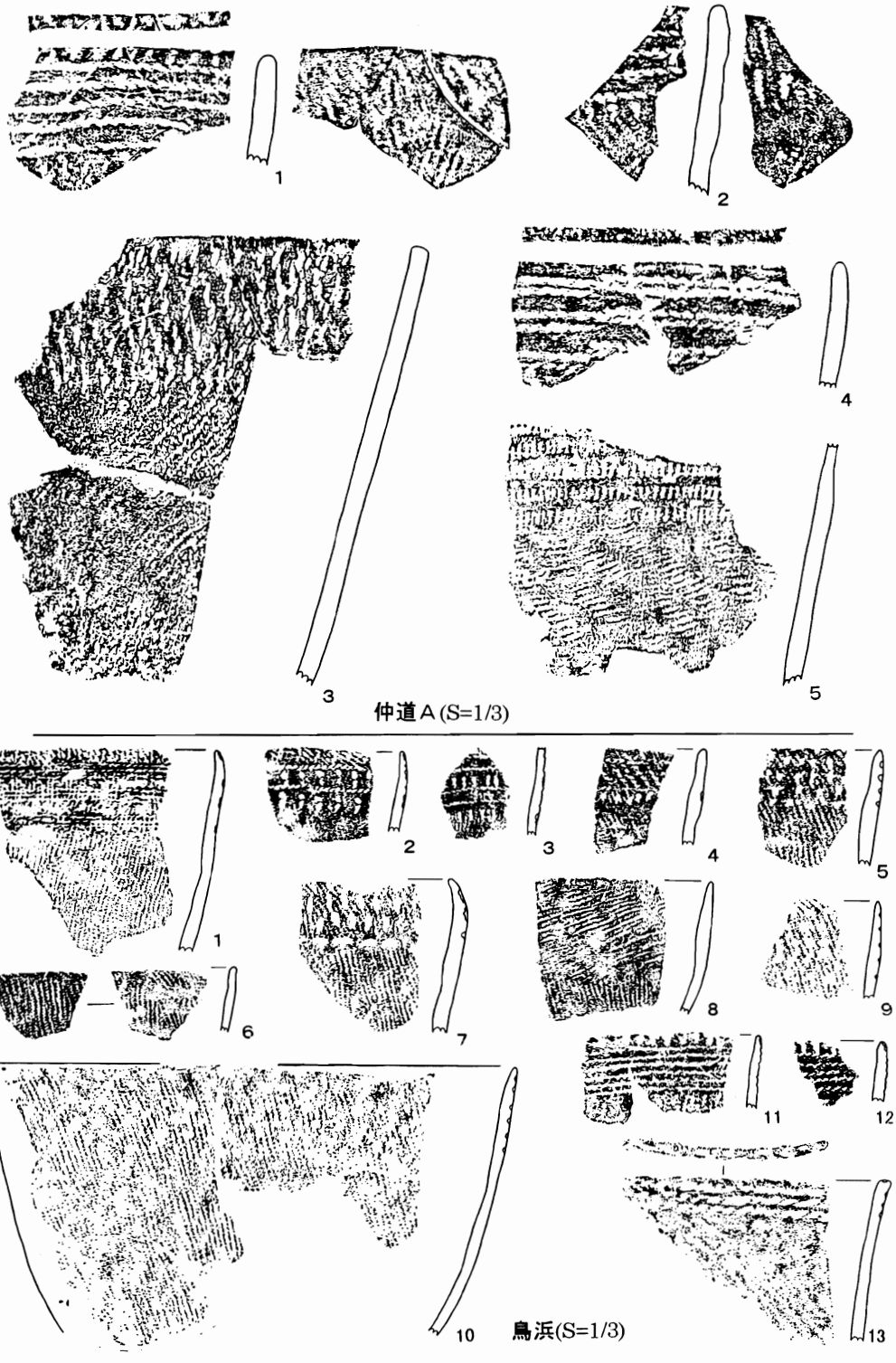
第３図上段は大谷寺洞穴出土である。（宮崎・金子1989）に初めて実則図が公表された。口縁部は角頭状を呈し、やや内湾する。文様は地文に縄文を施文し、口縁部に４条、実測図では胴部に１条の押圧縄文が認められる。宮崎・金子の論文では胴部の押圧縄文は３条とされている。『栃木県史　資料編１』（塙1976）の153P第10図上段の２列目中央には、３条の押圧縄文の施文された胴部破片が掲載されており、このような資料の存在から胴部の押圧縄文は３条とされたものかとも考えられる（あるいは、この２点が同一個体と推定されているのか）。宮崎・金子は、この大谷寺の資料を井草Ｉ式の直前段階（大谷寺Ⅲ式段階）におき石畑岩陰遺跡の土器群（本稿第３図下段）への文様からは型式学的な連続性が認められることを強調するとともに、器形のうえで前者が口縁が隅丸方形で平底を呈し、後者が口縁が円形で緩く外反し、胴部がやや丸みをもって丸底の底部につながるという大きな変化が存在するとし、これが井草式成立の影響によるものとして、石畑岩陰を井草式の初頭に位置付ける編年を発表している（宮崎・金子1989）。大谷寺洞穴の押圧縄文の施文される資料（第３図上段）から石畑岩陰の資料（第３図下段４）への変化は「線状押圧縄文の口縁部文様帯は幅をやや狭くして」と説明されている。前述したように表裏縄文土器にあって口縁部に文様の施文される土器群に関しては、時期が新しくなるにしたがって施文部の幅が狭くなる傾向にあることは認められるが、大谷寺洞穴資料は押圧縄文が胴部の中位、最大径付近にまで施文され、口縁部からこの部分までを「文様帯」とすれば石畑岩陰への変化は「やや狭く」した程度ではない。ちなみに（宮崎・金子1995）では、「大谷寺Ⅲ式段階の押圧縄文は、通常口縁部に４条前後施文されて一定の幅を持ち、口縁部文様帯を構成することが特徴になる」と説明されている。横位に並行して押圧縄文を施文する土器群（上草柳第３地点東、中道Ａ、雨古瀬、石畑岩陰、鳥浜等）において押圧縄文が胴部中位にまで及ぶ例は大谷寺洞穴以外では今までのところ確認されておらず、例外的な資料とすることが出来るかもしれない。しかしながら、大谷寺洞穴の内面施文は胴部中位ないし底部付近までおよんでおり、内面器面は凹凸（指頭押圧痕）が目立つ。三枚原→小佐原で認められる内面施文の範囲の縮小化の傾向と、あわせて表面の文様帯幅の狭小化が連動しているとすれば、大谷寺洞穴資料はより古相を呈すると考えられる。

口縁部と並行に長い押圧縄文が施文される資料としては、雨古瀬遺跡例（鈴木1976）（第３図中段）があげられる。口縁部は直線的に外反し角頭状を呈する。撚糸文を地文として押圧縄文が４条程度施され、この点では大谷寺洞穴に類似する。しかし押圧縄文は胴部まではおよばず、内面には施文されない。ただし図示しないが表裏縄文施文の土器も出土している。また、

石畑岩陰（第３図下段）では地文ＬＲ縄文上に押圧縄文が施されるが、その条数には１～３条と違いがみられる。２の口縁部は丸頭状でゆるく外反し３条の押圧縄文が施文され、１、４は短く外反する口縁の屈曲部に、１は２条、４は１条の押圧縄文がみられる。石畑例では押圧縄文の条数の減少にともない条線間の間隔も狭まり口縁部文様帯の施文幅の狭小化が進んでいる。これを石畑系列とする。また、これらとともに、内面の口縁部付近に縄文が施文される土器が出土しており、この下層（14層）からは内面の底部付近まで縄文施文のみられる土器が出土していることを考え合わせれば、石畑系列の文様帯狭小化の傾向は、小佐原・三枚原系列の内面施文範囲の縮小と同調したもので、両者の並行関係を示していると考えられる。

５．初源期の表裏縄文に関連する土器

口縁部付近に横位方向に並行する押圧縄文の初源は、現在のところ、仲道Ａ（渋谷1988）、鳥浜（網谷1979）に求めるのが最も妥当だろう。仲道Ａ（第４図上段）１は、口唇部に縄文を施文し口縁直下には縦位の短い押圧縄文、以下に押圧縄文を５条施している。さらに、この下に縄文を施文する。内面にも縄文が施文される。２は口縁部に押圧縄文を４条施し、口縁部の文様の下部に短い押圧縄文がみられ、以下に縄文が施文される。内面は自条自巻の圧痕が口縁部に施文され、この下に無文部を挟んで以下、縄文が施文される。外面の口縁部文様帯下部を短い押圧縄文で区画する手法は、鳥浜（第４図下段）２～４、７に通じるものである。仲道Ａの４は口唇上には縄文、口縁部には撚りの方向を違えた２本単位の押圧縄文を３条以上施す。３、５には横位の押圧縄文は施文されないが、３は縦位に撚紐を押圧し、５は縦位の自条自巻を並べて５段以上施文して、口縁部に幅の広い文様帯を形成する。鳥浜（第４図下段）では地文上に撚糸の先端圧痕と撚糸側面圧痕を施文するもの（１～３、11、12報告書では第１群Ａ類）、撚糸先端圧痕文を施文するもの（４、５、７同第１群Ｂ類）、刺突文を施すもの（９、10、13同Ｃ類）がある。また、６は表裏縄文で鳥浜では唯一の例、８は縄文のみが施文されるが口縁部には斜行する無節縄文、胴部には縦走するＬＲ縄文が施文される。この２点は報告書ではＥ類に分類されている。鳥浜貝塚の報告では「いわゆる草創期の多縄文土器系に属する土器」とされた第１群（鳥浜Ｉ式）は、口縁部文様をもつＡ～Ｄ類と持たないＥ類の間に先後関係を想定されている（網谷1979）。この土器群について土肥孝は「基本的には、口縁部文様帯の縮小化の傾向の過程をよく示している」として、Ａ・Ｂ・Ｃ類（口縁部文様帯の盛行）→Ｄ類（文様の口縁部端への集中）→Ｅ類（口縁端部上の縄文施文、表裏縄文の出現）という変遷関係を示した（土肥1982）。Ｄ類の特徴とされた口端部の撚糸先端圧痕はＡ～Ｃ類にも施され、Ｄ類は口縁部の文様が省略されたものとも考えられ、Ｅ類は本稿第４図下段８にあげたように口縁部と胴部の縄文施文方向を異にして口縁部の文様帯を表現した例もあり、同様な資料はＤ類にもみられる。鳥浜Ｉ式は全体として、少量の表裏縄文の存在が示すように室谷下層式直後の表

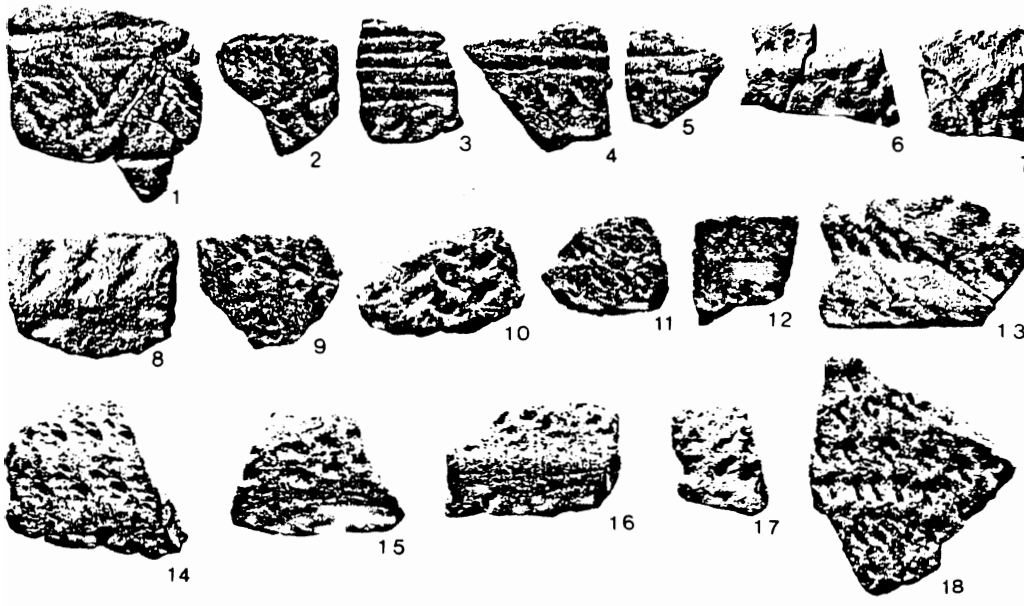


第４図　仲道Ａ・島浜貝塚出土土器

裏縄文出現期の様相を、仲道Ａとともに表していると考えられる。しかしながら土肥が想定した口縁部の文様帯を明瞭に表現する室谷下層式以降、井草式の段階までの変遷を「口縁部文様帯の縮小化の過程」と捉える分析視点については首肯できる。

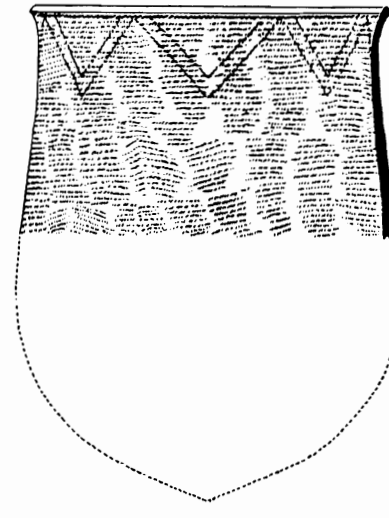
このような撚糸の押圧手法による施文が多用され、あわせて回転縄文がみられる資料は、関東地方では、水久保遺跡（小林ほか1979）、西谷遺跡（栗原ほか1961）、宮林遺跡（宮井1985）、橘立岩陰（芹沢ほか1967）、五目牛新田遺跡（萩谷2000）があげられる。また、細片のため判然としないが、第２図平根山（赤星ほか1958）の資料もこれに含められるかも知れない。水久保の資料（第５図上段）には撚糸側面圧痕を鋸歯状（１）、並行、羽状の押圧縄文（３～５、２、10、12）、撚糸先端圧痕（15～18）を施文したもの等があり、回転縄文の施文された資料も出土している。西谷例は多くの点で水久保に類似しており、並行、羽状の押圧縄文（３、１、４）、回転縄文（５、６、８）施文がみられる。６、７には内面まで押圧縄文が施文され、表裏縄文の初源期の例とすべきことでは衆目の一致する所である。また西谷では爪形文土器も出土している。

宮林遺跡第４号住居跡からは、爪形文の施されたもの、撚糸の側面圧痕、先端圧痕が施されたもの、回転縄文施文のもの等が出土している（第６図上段）。宮林の資料は1986年に開催された埼玉県考古学会主催の「縄文草創期－爪形文土器と多縄文土器をめぐる諸問題」（埼玉考古学会　1986・88）のきっかけともなったもので、これら土器群の「共伴」については評価が分かれるところである。第６図上段には、このうち撚糸側面圧痕が縦位方向の羽状に施文される資料をあげた。水久保の出土の第５図１に類似するとともに、向原東のモチーフに繋がるのではないかと考えられる。宮林の遺構外からは表裏施文の土器が出土している（第６図上段１～６）。４号住居跡からは表裏縄文は検出されておらず、住居跡出土土器群と遺構外の土器群との同時性についての評価にも重要な問題を投げかける資料である。５は表面に撚糸文、裏面に撚条痕を斜位に施す。他は表裏に縄文が施文される資料で、１、３は口縁部に幅の狭い無文部をもち、これに対応するように裏面には口縁部に限って縄文が施文される。２、４、６は裏面の胴部付近まで縄文が施されるようである。１、３は、上草柳例と対比することができ、２、４、６よりは新しい時期に位置づけられる。７～13は、撚糸側面圧痕が施文されるもので、11、12は撚りの方向を変えた２本単位の撚糸側面圧痕で鋸歯状のモチーフを描出し、自縄自巻を並べて施文する。鋸歯状のモチーフは４号住居跡の撚糸側面圧痕を施されたものとの繋がりをうかがわせる。13は表裏面に撚糸側面圧痕の施された資料で、表裏縄文土器と撚糸側面圧痕を施される土器が、あるいは一部同時に存在していた可能性を認める根拠となる。橘立岩陰（第６図下段）の資料から撚糸側面圧痕、絡縄体圧痕（１～10）、回転縄文（11、12）、表裏縄文（14、15）をあげた。羽状（２、４）、並行（10）の撚糸側面圧痕といった文様や直線的に外反する口縁など水久保、西谷に類似する。５、13は斜縄文の地文上に撚糸側面圧痕が斜位、横位に施文される。回転施文縄文と撚糸側面圧痕の併存をあらわしている。14、15の表裏縄文は宮林の表裏に撚糸側面圧痕の施された資料を重視すれば、他の土器と共伴するものと考えることができよう。



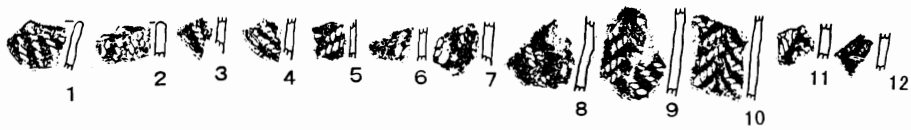
水久保

西谷(S=1/2)

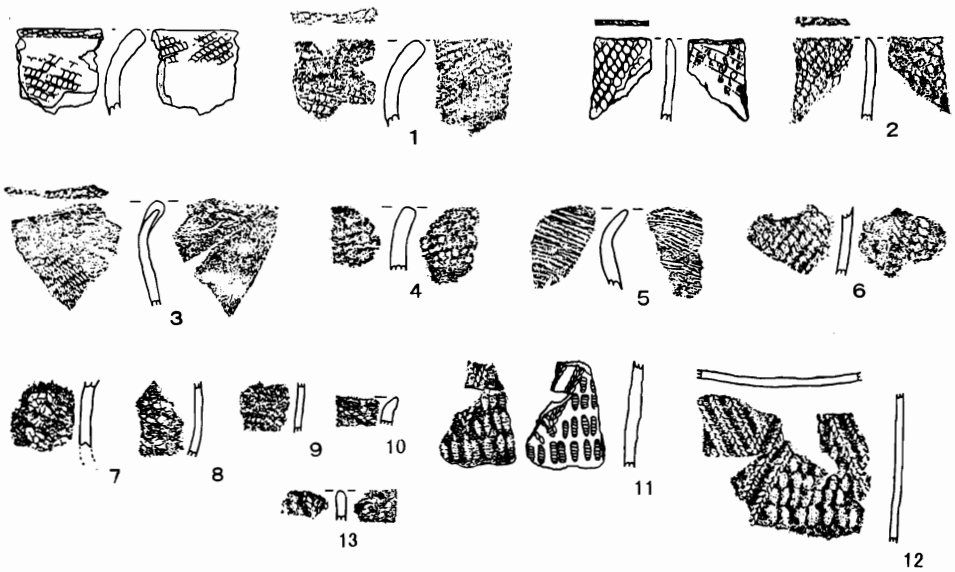


室谷上層

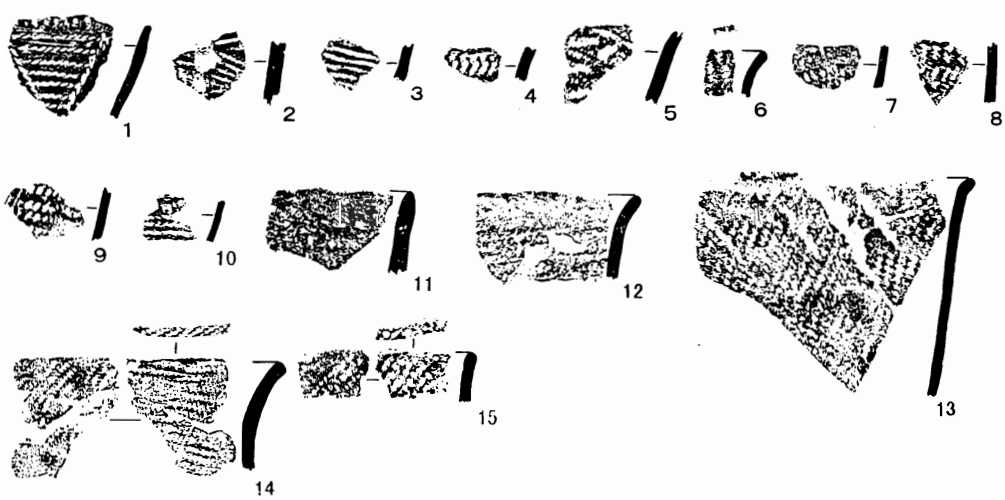
第５図　水久保・西谷・室谷洞窟遺跡出土土器



宮林４号住居跡(S=1/3)



宮林 ｸﾞﾘｯﾄﾞ(S=1/3)



橋立(S=1/3)

第６図　宮林・橋立岩陰遺跡出土土器

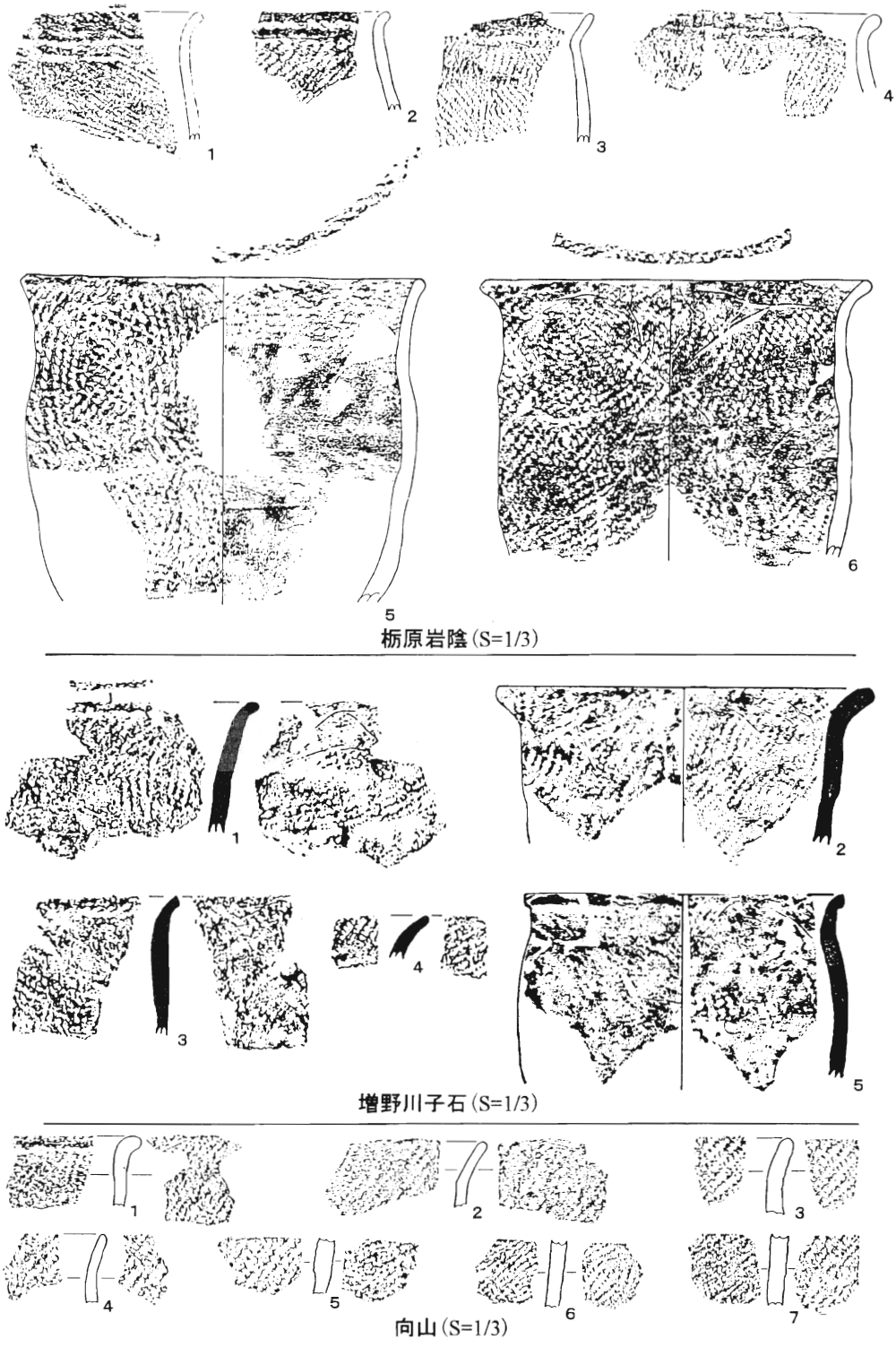
6．石畑系列の検証

表裏縄文土器の初源期を鳥浜、仲道Aの段階におき井草式の成立までの過程を推定する場合、器面内面の縄文施文の消失、口縁部文様帯の狭小化という変化の方向性が推定される。口縁部文様帯の狭小化の変遷を一遺跡で最も連続的に復元できるのが石畑岩陰であると考える。先に、石畑岩陰にみられる縄文地文上に横位の撚糸側面圧痕が押圧される土器群の変遷から石畑系列を設定し、圧痕の条数の減少に伴う口縁部文様帯幅の縮小を想定した。さらにこの傾向が、表裏縄文土器の内面に施文される縄文の口縁部への集中と並行していると推定したが、この仮説は実際の変遷と一致すると考えることは妥当だろうか。いくつかの資料によりこれを検証する。

第７図上段は栃原岩陰（西村1982）の資料である。１～４は地文に縄文が施文され、外反する口縁部の直下に１条ないし２条の撚糸側面圧痕が施される。内面には縄文は施文されない。１の並行する撚糸側面圧痕は室谷上層に類例を求められる。２～４の口縁部下の撚糸側面圧痕は、第５図下段、室谷上層の器形の復元された土器（第５図下段）の口縁に並行に巡る撚糸側面圧痕に対比でき、鋸歯状の文様を描出する２本単位の撚糸側面圧痕は、第７図上段１のそれと類似する。１～４は室谷上層式段階（井草Ⅰ式）におくことができよう。

戸田が三枚原の段階に設定した「山居型」（戸田1988）は石畑系列の新しい段階（第３図１、２）、向原東は幅の広い口縁部文様帯、胴部までおよぶ内面施文や口縁端に施文された撚糸側面圧痕が水久保、西谷のものに対比できることから古い段階（第３図５）に位置づけられる。また上草柳、上作延南、蔵屋敷は新段階、雨古瀬は古段階、大谷寺洞穴はこれと同じかやや古い段階に位置づけられる。これは、石畑系列の変遷と矛盾しない。

一方、増野川子石遺跡（酒井1988第７図中段）、向山遺跡（友野1988第７図下段）でも、地文に縄文を施文し口縁直下に撚糸側面圧痕を１条（第７図中段１、３、下段１）ないし２条（第７図中段４）施文する土器が出土している。これらの資料は、器面内面の胴部までも縄文が施される。増野川子石、向山例は栃原の資料とは口縁の形状や想定される器形が異なるが、増野川子石（中段４）は口縁部が丸頭状で外反し栃原（上段１）に類似する。また、向原（下段２）の内面に稜をもち短く外反する口縁は栃原（上段３）に近似するといえる。これらの資料からは、わずかな例ではあるが口縁部の形状や胴部上半部の器形は時期決定に有効ではないと考えられる。増野川子石遺跡（第７図中段）、向山遺跡の口縁直下に撚糸側面圧痕をもち、内面の胴部まで縄文が施文される例は、小佐原・三枚原系列と石畑系列の並行関係と一致しない。栃原の表裏縄文土器（第７図上段５、６）の存在を根拠に第７図に示した３遺跡をほぼ同時期に位置づけるべきであろうか。初源期の表裏縄文にみられる幅広の口縁部文様帯が撚糸文（井草Ⅰ式）には引き継がれないこと、そして内面施文も同様であることからすれば、増野川子石、向原の編年的位置を栃原（１～４）の段階までは下らせることはできない。そのように考えると増野川子石、向原と栃原の撚糸側面圧痕に、直接的な系統関係を推定することは困難なので



第７図　栃原岩陰・増野川子石・向山遺跡出土土器

はないだろうか。口縁部下の屈曲部に施される１～２条の撚糸側面圧痕は石畑系列の口縁部文様帯の狭小化の過程から生じたものと、これらより古い時期に独自に考案されたものがあると考えられる。

〝比較〟を基礎とした型式学において、あらかじめ類似した形態をもつ資料は系統関係にあることを仮定(ないし公理)することによって、これらを比較しその類似の程度もしくは共通する特徴の多寡により類縁関係の復元が可能であるとする方法を用いることに妥当性が認められることになる。このように考えれば、ここで検討した事例の示すところは、類似した形態が系統関係をかならずしも保証しないということであり、この方法論の適用自体が疑問視される。では、石畑系列の変遷および小佐原・三枚原系列との並行関係の仮説は成り立たないとすべきだろうか。前述したように初源期の表裏縄文土器に関連すると考えられる資料にみられる口縁部文様帯の盛行とその後の表裏縄文土器の口縁部文様帯の縮小化、および内面施文の消滅という変化の方向を認めるかぎり、先の仮説は否定し得ないと考えられる。

７．おわりに

異なる系譜から類似した形態が発生しうるとすると、形態比較による系譜関係の復元と歴史遡及的立場（山田2000）の基盤を危うくする。かつて、生物学者の丘英通は1931年「生物学概論」（丘1931）において「歴史的の類縁関係は似よりの程度による類縁関係とは全く別個のものであり、似よりの程度を基とした系統樹は事実上の歴史とはならない」とし、「歴史的の類縁関係」と「似よりの程度を基とした系統樹」を混同することを戒めている。そしてこの両者が区別されないものとして「生物発生の原則」（註4）をあげ、「一種の循環論法である」と断じている。大塚達朗（大塚1996）の心配－「文様帯系統論」は縄文土器の一系統性を証明する訳ではなく、堂々めぐりになる－は、山内清男が縄文土器研究の理論的な基盤を固めていた同時代（1930年代）に、生物学の分野ではすでに〝概論〟レベルであったとすべきだろうか。

向原東遺跡出土の表裏縄文をどのように理解するかを論じることを目的とした本稿の主旨からすれば些か論点を拡大しすぎたきらいがある。今後、多縄文系土器の変遷について比較形態学に基づく「循環論法」の適用範囲と限界について思慮しつつ分析を進めていくべきだと考えられる。

註

(1)本文中に記したように本資料は正式報告前の未発表資料であり、資料の掲載をご許可いただいた城山町土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査団に感謝したい。

(2)表裏縄文土器で木目状撚糸文の施文される資料は筆者の管見の限りでは類例を見出し得ない。この文様は「単軸絡状体　第１Ａ類３」（山内1979）の、軸の中央に孔があり撚紐を通して一方を右、他方を左に巻いた原体を回転したものにあたる。後述するが表裏縄文ではないが鋸歯状に撚糸側面圧痕を施す

例（水久保、宮林）があり、これらとの関連が考えられる。

(3)押圧、回転縄文をもつ草創期の土器を多縄文系と呼ぶが、林謙作は押圧縄文を前期多縄文土器とし表裏縄文土器、撚糸文土器を後期多縄文土器とする（林1993)。山形真理子も井草式を多縄文に含めている（山形1991)。筆者は多縄文系と撚糸文土器の系統が判然としない現状においては山形の提起にもかかわらず、井草式を多縄文に含めることには躊躇せざるをえない。

(4)「生物発生原則」と型式論の理論的な前提についての関係を（山田1994等）で論じた。参照願いたい。

引用・参考文献

赤星直忠・岡本勇・村越潔　1958「横須賀市平根山遺跡」『横須賀市立博物館研究報告（人文科学)』第２号

網谷克彦　1979『鳥浜貝塚』

漆原　稔・渋谷昌彦　1986『仲道A遺跡』

大塚達朗　1996「土器－山内型式論の再検討より－」『考古学雑誌』第82巻第２号

丘　英通　1931「生物学概論」『岩波講座　生物学Ⅰ通論』

栗原文蔵・小林達雄　1961「埼玉県西谷遺跡出土の土器群とその編年的位置」『考古学雑誌』第47巻第２号

小林達雄　1968「室谷第一群土器に関する覚書」『歴史教育』第16巻第４号

小林達雄・安岡路洋　1979「縄文時代草創期における回転施文縄文への一様相－埼玉県大里郡岡部町水久保遺跡－」『埼玉県史研究』第４号

小林義典　1992『蔵屋敷遺跡発掘調査報告書』

埼玉考古学会　1986『埼玉考古学会30周年記念　シンポジウム資料』

埼玉考古学会　1988「シンポジウム「縄文草創期－爪形文土器と多縄文土器をめぐる諸問題－」」『埼玉考古』第24号

酒井幸則　1988「増野川子石遺跡」『長野県史　考古資料編』全一巻（二）

渋谷昌彦　1988「仲道Ａ遺跡草創期土器の編年学的研究－小瀬が沢洞窟、室谷洞窟出土土器との比較を中心として－」『考古学叢考』下巻

鈴木道之助　1976「雨古瀬遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』

芹沢長介・吉田格・岡田淳子・金子浩昌　1967「埼玉県橋立岩陰遺跡」『石器時代』第８号

土肥　孝　1982「近畿地方」『縄文土器大成１早・前期』

土肥　孝　1986「神奈川県大和市上草柳第３地点東遺跡出土の土器－関東地方「井草式」以前の土器様相－」『大和市史研究』第12号

戸田哲也　1988「表裏縄文土器論」『大和のあけぼのⅡ』

戸田哲也　1994「表裏縄文土器研究の現状と課題」『縄文時代５』

友野良一　1988「向山遺跡」『長野県史　考古資料編』全一巻（二）

中島　宏　1991「表裏縄文土器群の研究」『埼玉考古学論集　設立10周年記念論文集』

中村喜代重　1984『一般国道246号（大和・厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告Ⅱ』

中村孝三郎　1964『室谷洞窟』

西村寿晃　1982「栃原岩陰遺跡」『長野県史　考古資料編』全一巻（二）

日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会　1967『日本の洞穴遺跡』

萩谷千明　2000『第30回利根川流域の縄文草創期』

塙　静夫　1976「大谷寺洞穴遺跡」『栃木県史』資料編・考古１

巾　隆之　1998「石畑岩陰遺跡」『群馬県史』資料編１
原　信之　1967『鎌倉市大船山居遺跡発掘調査報告書』
林　謙作　1993「縄紋土器の範囲」『日本考古学協会　1993年度新潟大会　シンポジウム１　環日本海における土器出現期の様相』
広瀬昭弘　1981「北信濃小佐原遺跡の表裏縄文土器について」『信濃』第33巻第４号
宮井栄一　1985『大林Ⅰ・Ⅱ　宮林　下南原』
宮崎朝雄・金子直行　1989「井草式土器及び周辺の土器群について」『研究紀要』第５号
宮崎朝雄・金子直行　1995「井草式土器及び周辺の土器群についてⅡ－井草式土器の成立を中心として－」『縄文時代』第６号
持田春吉　1986『上作延南原遺跡発掘調査報告書』
山形真理子　1991「多縄紋土器編年に関する一考察」『東京大学文学部考古学研究室紀要』第10号（下）
山田仁和　1994「山内の夢もしくは種の考古学」『唐沢考古』13
山田仁和　2001「山内清男の方法と「周圏論」－「サケ・マス論」の再検討を通じて－」『竹石健二先生・澤田大多郎先生還暦記念論文集』
山内清男　1969「縄文草創期の諸問題」『MUSEUM』第224号
山内清男　1971「序文」『高畠町史　別巻　考古資料編』
山内清男　1979『日本先史土器の縄紋』

相模川下流左岸域における弥生時代後期前半の様相

－倉見才戸遺跡調査成果の検討－

中　村　哲　也

1．はじめに
2．研究略史
（1）神崎遺跡発見以前
（2）神崎遺跡発見以後
3．倉見才戸遺跡の概要
4．倉見才戸遺跡出土の弥生後期土器群－神崎遺跡との比較
5．目久尻川・小出川下流域の弥生後期前半の集落遺跡
6．おわりに

1．はじめに

神奈川県寒川町倉見才戸遺跡の調査は1991年から1999年にわたって４回実施され、その結果東海系土器（東三河・西遠江系土器）を主体とする弥生時代後期の環濠集落が発見された（木村・田村1992、小林1999、中村2001）。

倉見才戸遺跡が所在する相模川下流左岸（東岸）域では、近年の調査事例の増加によって、東三河・西遠江系土器を主体とする弥生時代後期の遺跡が近接・集中している様相が明らかになってきており、とくに当該期集落遺跡の分布は、相模川水系の目久尻川・小出川下流域において顕著である（第１図）。

本稿では倉見才戸遺跡の調査成果を踏まえ、同じ目久尻川水系であり、約2.0kmの距離内に近接する綾瀬市神崎遺跡出土資料との比較・検討、及び周辺の当該期集落との検討を加えることにより、相模川下流左岸、とくに目久尻川・小出川下流域の弥生時代後期前半の様相について考察する。

2．研究略史

1989年、綾瀬市神崎遺跡の調査によって、多量の東海系土器を出土する弥生時代後期前半の環濠集落の存在が明らかになり、その内容はいち早く岡本勇によって紹介された（岡本ほか1990・神崎遺跡発掘調査団1990）。岡本は神崎遺跡出土土器と愛知県三河地方の土器群との類似性を指摘し、集落の成立に三河系集団が関与している可能性を想定された。

その後の報告で（小滝・村上他1992）、神崎遺跡は出土土器の90％以上が「外来系土器」（東海系土器＝東三河・西遠江系土器）によって構成される短期間の集落であることが明らかになり、改めて岡本は東三河・西遠江からの「人間集団の移動」を想定され、今後の課題とし

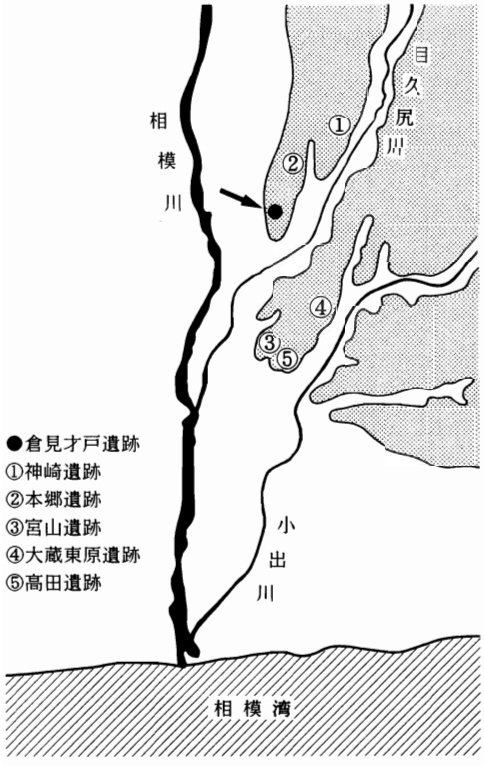
て、さらに掘り下げた土器論・集落論・地域論の必要性を主張された（岡本1992）。これによって、神崎遺跡の調査以前に報告されていた東海系土器の意義も再検討されるようになり、相模の東海系土器についての活発な論議が行われるようになった。

いずれにしても神崎遺跡の調査成果は、相模の弥生時代後期土器研究における大きな画期と考えることができる。ここでは神崎遺跡発見以前と発見以後に分けて、研究略史を概観する。

（1）神崎遺跡発見以前

相模湾沿岸地域の弥生時代後期の土器様相に、東海地方的な土器が存在していることは、古くから赤星直忠、古賀寿などにより指摘されている（赤星1955・古賀1959）。

神沢勇一は相模湾沿岸地域と東京湾沿岸地域との弥生時代後期の土器様相の差異に着目し、前者は東海地方的な土器が主体であることに言及して「相模湾北西部沿岸地域」という独自の土器文化圏を設定した。さらに「相模湾北西部沿岸地域」の東海地方的な土器は、駿河湾沿岸地域の土器とともに、伊勢湾周辺地域の「寄道式土器」、「伊場式土器」に比定しうる土器を多量に伴出するとし、これらに対して「海路による直接的な伝播」の可能性を示唆している　（神沢1966）。



第１図　目久尻川・小出川下流域の
弥生後期前半の集落遺跡（1/15万）

また、湯川悦夫・加納俊介は、南関東地方出土の東海系の弥生時代後期土器、および「古式土師器」を東海地方西部の編年観に準拠して分析し、欠山～元屋敷期の土器様相との類似性を指摘している（湯川・加納1972）。

さらに、岡本勇は弥生時代後期の畿内系櫛描文土器が東日本へ波及するルートの一つに、尾張－東海道－相模湾岸地域という流れを想定し、櫛描文土器を含む相模湾岸地域の弥生時代後期土器群は、東京湾沿岸地域よりも伊豆以西（東海地方）と親近性を持つとし、「相模湾岸型式」という土器分布圏を設定した。また、茅ヶ崎市篠山遺跡出土の外来系土器（高坏）に対して、遠江・三河地方に故地を求めている（岡本1976・1980・1981）。

その後、比田井克仁は南関東地方における弥生時代後期伊勢湾系（山中式・欠山式）土器について論じ、後期前半の山中式系土器を伴出する遺跡が相模湾岸・相模川中・下流域に主に分

布するとし、これを南関東における弥生時代後期の伊勢湾系土器の最初の到来と結論づけた。さらに山中式系土器が東遠江・駿河地域に波及しない点から、これらは「いきなり相模湾岸に到来」するとしている（比田井1987）。

これらは資料的蓄積に乏しい当時において、いずれも的確な論考として評価される。その後、前述の神崎遺跡の発見により相模の東海系土器についての、多種多様な論考が発表され現在に至るわけだが、それらが上記の先達の成果を礎に成り立っている点は言うまでもない。

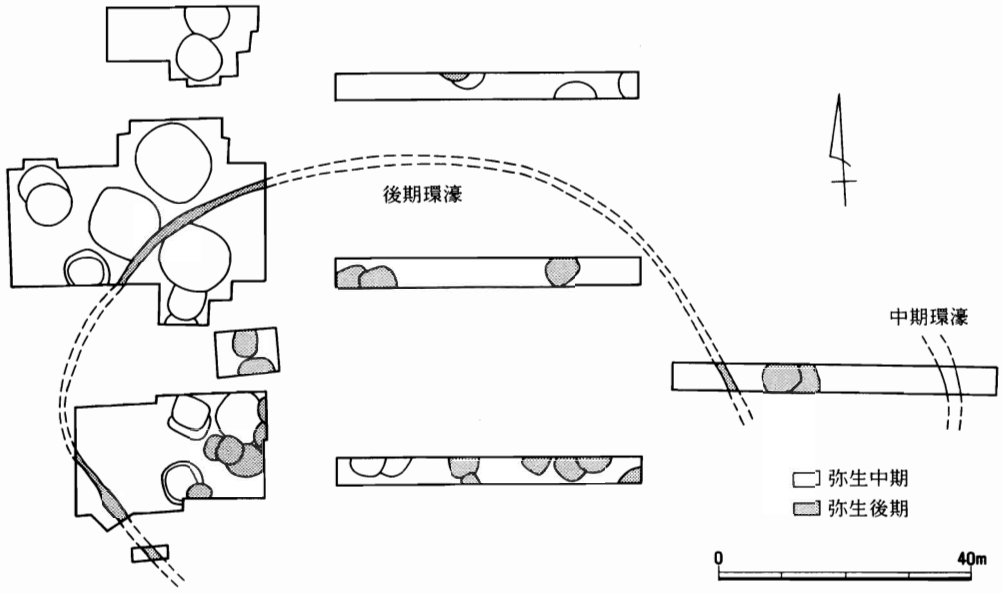
（２）神崎遺跡発見以後

神崎遺跡の発見と相前後して、1991年に東海埋蔵文化財研究会によって「東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器」と題したシンポジウムが行われ（東海埋蔵文化財研究会1991）、後期弥生土器の編年、あるいは土器移動の問題などについての討論がなされた（東海埋蔵文化財研究会1993）。相模地域については、立花実により相模川を挟んだ両地域（東岸域・西岸域）の東海系土器の受容について述べられている。その中で立花は、前述の神崎遺跡に代表される相模川流域の弥生後期東海系土器の様相を比較・検討し、相模川東岸域には三河・西遠江の山中式系土器が、相模川西岸域は東遠江の菊川式系土器が受容されることを指摘している。さらに、前者は弥生時代後期前半の後葉に「直接的な人の移動の結果」もたらされるのに対し、後者には後期後半の駿河地方を経由した波及を考え、「直接的な人の移動は想定できない」と結論付け、両地域（東岸域・西岸域）における東海系土器の受容の差異（故地、経路、時期）について述べられている（立花1993）。

その後、1990年代には海老名市本郷遺跡（合田・及川・池田1995）、寒川町大蔵東原遺跡（小林1993・1997）、寒川町宮山遺跡（秋山1998）、寒川町高田遺跡（中村・立花2000）、寒川町倉見才戸遺跡などの東海系土器（＝東三河・西遠江系土器）を主体とする弥生時代後期集落の報告がなされ、相模川下流左岸域の資料は次第に充実してきた。

さらに、2001年には西相模考古学研究会によって「弥生後期のヒトの移動～相模湾から広がる世界～」と題したシンポジウムが行われた（西相模考古学研究会2001）。このシンポジウム資料集は、論攷・掲載資料ともに非常に充実したもので、相模湾沿岸の弥生時代後期の研究についての、現段階における一つの到達点として、評価されるべきものである。相模川東岸域の様相については池田治によって土器と集落についての論考が発表され、目久尻川・小出川流域の弥生時代後期の様相は、土器組成そのものが東海系である集落が多く、集落成立時に「集団での移住」、あるいは「村ごとの移動」という状況があったとしている（池田2001）。

このように、神崎遺跡発見以後の各論考・報告により、相模川左岸の目久尻川・小出川流域では、集落の成立期と考えられる弥生時代後期前半に、東三河・西遠江の集団的関与（＝人の移動）があったことは、ほぼ一致した見解として認識されている。また近年では、故地の系統をさらに細分し（東三河系と西遠江系）、その差異による各集落の類型化（西川2001）といっ



第２図　倉見才戸遺跡弥生時代遺構配置図（1:1,200）

た、新たな試みもなされている。

３．倉見才戸遺跡の概要

最近筆者が調査した倉見才戸遺跡の概要について紹介する（中村2001）。遺跡は県央部の寒川町倉見に所在する。県内最大河川である相模川下流左岸域に属し、相模川の合流点に近い目久尻川右岸の低位丘陵上に立地する。標高は約15m前後、沖積面との比高差は約５ｍを測る（第１図）。

本遺跡の調査面積は2002年１月現在で約2,700㎡に及ぶが、いずれも断片的な調査であり、遺跡の全体像を把握するには至っていない（第２図）。

遺跡の主体時期は弥生時代中期後葉、および後期である。中期後葉宮ノ台式期では環濠集落（環濠１条、住居址24軒）が発見されている。環濠の幅は約3.1m、深度は約1.5mを測る。遺構の分布状態から、集落の規模は東西径で140m以上と考えられ、後期集落よりも広範囲にわたるものと推定される。各住居址出土の壺形土器に文様の簡素化（文様帯は頸部中心、文様構成は縄文主体）が看取されるため、時期的には宮ノ台式期の末葉に位置付けられるものと推定される(1)。後期では東三河・西遠江系土器を主体とする環濠集落（環濠１条、住居址23軒）のほぼ北半部（東西径約120m、南北径不明）が確認された。環濠の幅は約1.5～2.5m、深度は約１～1.5mを測る。環濠内面積は約10,000㎡前後と推定される。集落の中心となる時期は後期前半（山中式期）だが、後期後半（欠山式期）まで継続するものと推定され、客体的に東

京湾沿岸系土器が含まれる(2)。なお、前述の宮ノ台式期の集落とは時期的な空白が想定されている(3)。

4．倉見才戸遺跡出土の弥生後期土器群－神崎遺跡との比較

倉見才戸遺跡の弥生時代後期の集落の中で、最も内容的に充実している第４次調査17号住居址出土の土器群（第３図）をとりあげ、神崎遺跡の土器分類（第４図）（村上1992・小滝1996）に準拠して比較・検討する。17号住居址出土の土器群は、小破片類を含めてほぼ全てが東三河・西遠江系土器に属すものであり、神崎遺跡と極めて類似した土器様相を呈している。

１～４は複数の櫛描波状文・横線文により文様が描出される壺形土器で、４には扇状文がみられる。いずれも頸部は「く」の字状に強く屈曲し、外反しながら肥厚する単口縁へと続く。胴部はほぼ球胴形を呈する。神崎遺跡の分類では、壺Ｂ類に該当する。

５・６も櫛描波状文・横線文で文様が描出される壺形土器だが、１～４に比して頸部の屈曲が弱く、胴部は下膨れ状を呈する。５は胴部下位に稜を持つ。壺Ｅ類と推定される。

７は無文の壺形土器で、やや下膨れの球胴形を呈し、頸部は直線的である。壺Ｆ類に該当するものと推定される。

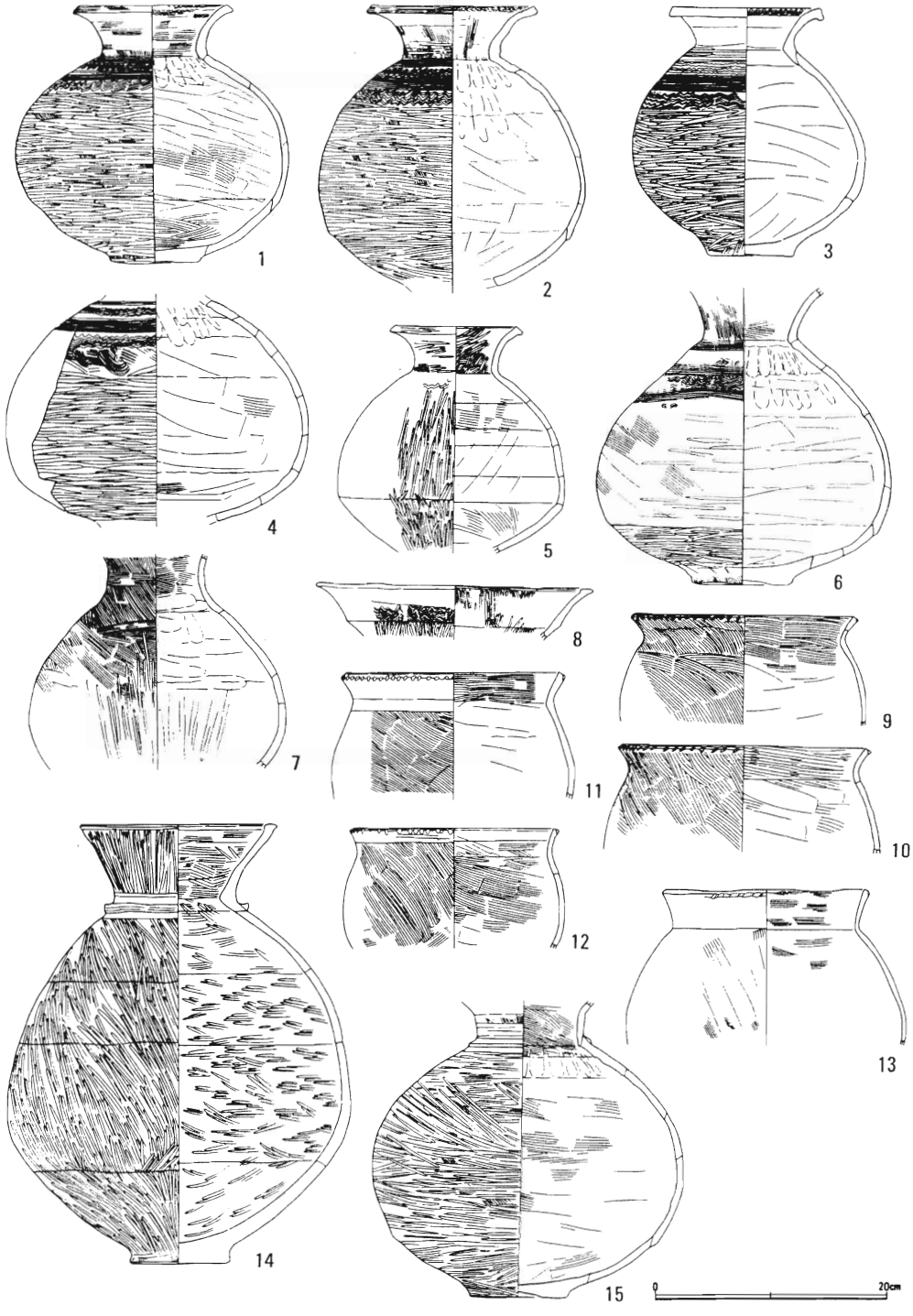
８は坏部の上半が外反する高坏で、櫛描波状文が施される。高坏Ｉ－Ａ1 類と推定される。

９～13は口縁部が「く」の字状に屈曲する台付甕である。９～12は胴部中位に最大径を有し、胴部の張りはやや弱い。また、ハケメ調整が顕著にみられる。13は口縁部が直立気味で、胴部が強く張る。９・10は口唇部面取り後にハケ状工具による斜方向からのキザミ、11・12は棒状工具による上方からのキザミ、13はヘラ状工具による斜方向からのキザミがそれぞれ施される。９～12は甕Ｂ類に該当する。13は類例はみられるが、類型化されていない。

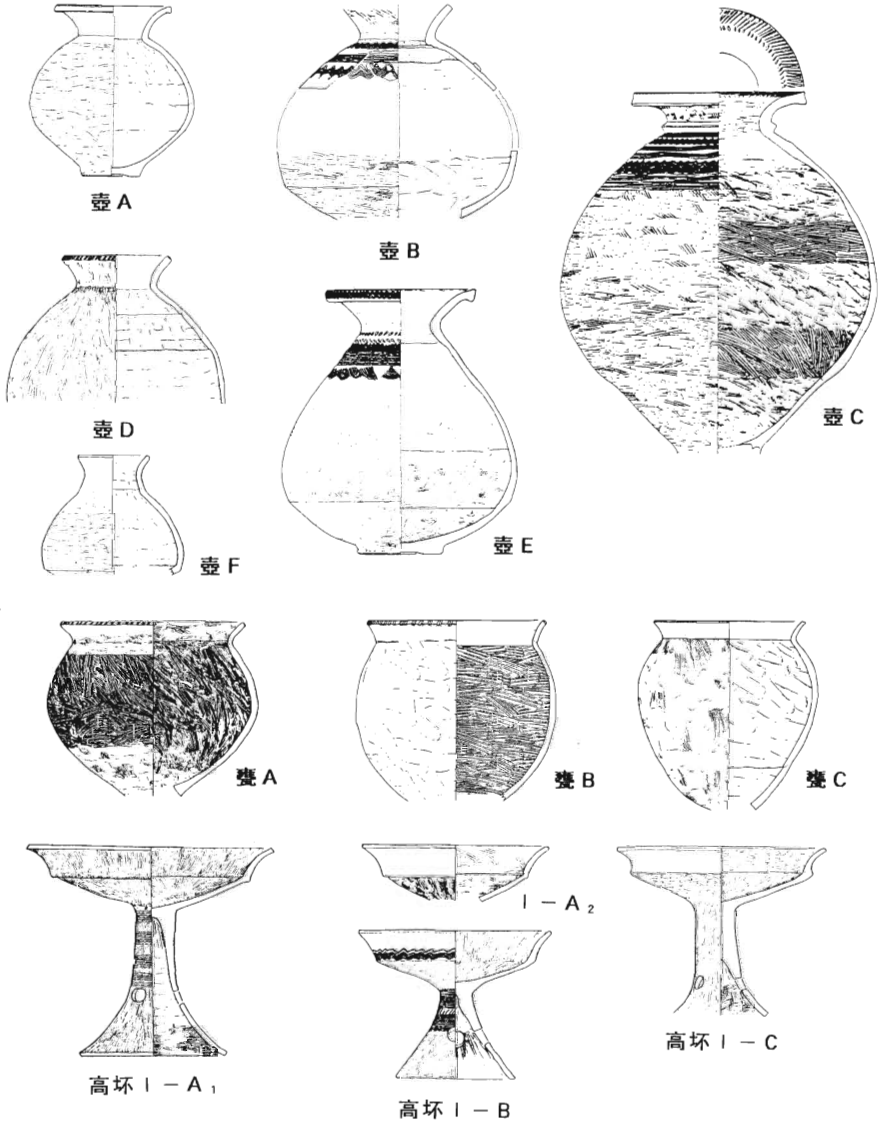
14・15は無文の壺形土器である。山中式に後続する後期後半欠山式に比定されるもので、前述の１～13よりも時期的にはやや下る資料である。14は口縁部がやや内傾する単口縁を呈し、頸部は屈曲し、断面三角形の突帯が巡る。胴部はやや下膨れの球胴形を呈する。15は直線的に立ち上がる頸部に断面三角形の突帯が巡り、胴部は球胴形を呈する。いずれも神崎遺跡では出土していない資料だが、後述する宮山遺跡、大蔵東原遺跡などで類例がみられる。

以上、倉見才戸遺跡の代表的な出土土器を概観したが、後期前半の資料については神崎遺跡出土土器との共通性が看取される。さらに、両集落出土の土器群と出自地域（東三河・西遠江地域）の土器群に形態的な変容は殆ど認められない。つまり両集落はほぼ同時期（弥生時代後期前半）に本地域に到来した同系統（東三河・西遠江系）集団によって形成された、近接（約２km）する環濠集落ということになる。上記の事象から、集落成立期における両集落の有機的な関連が想定されるとともに、同一集団からの分化という可能性も考えられよう。

また後期後半の資料（第３図－14・15）は、神崎、倉見才戸の両集落の存続期間の相違を考



第３図　倉見才戸遺跡４次調査17号住居址出土土器



第４図　綾瀬市神崎遺跡の土器分類

える上で注意を要するが、現段階ではその評価については慎重にならざるを得ない[4]。

５．目久尻川・小出川下流域の弥生後期前半の集落遺跡

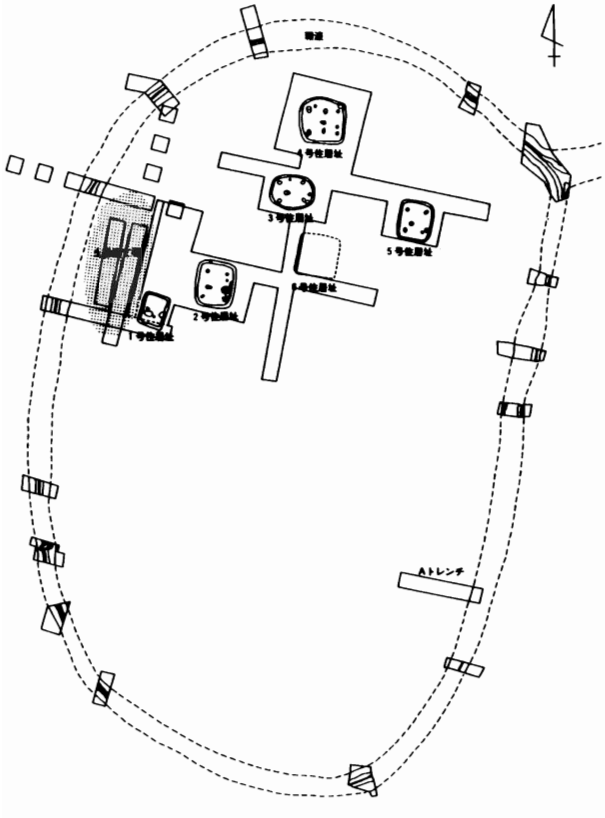
倉見才戸遺跡と神崎遺跡を包括する目久尻川・小出川下流域の、主な弥生時代後期前半の集落遺跡（墓域含む）について概観する[5]。各遺跡は径約４kmの範囲に近接・集中している（第１図）。なお、文中の遺跡番号は第１図に対応する。

①綾瀬市神崎遺跡（第５図）

目久尻川右岸の台地上に立地し、標高は約24mを測る。倉見才戸遺跡からは北東約2.0kmに位置する。後期前半の環濠集落（環濠１、住居址６、土器捨て場）で、環濠は南北径103m、東西径65m、総延長270mを測り、環濠内面積は約5000㎡と推定される。出土遺物の90%以上を東三河・西遠江系土器が占める（小滝・村上他1992）。

②海老名市本郷遺跡（第６図）

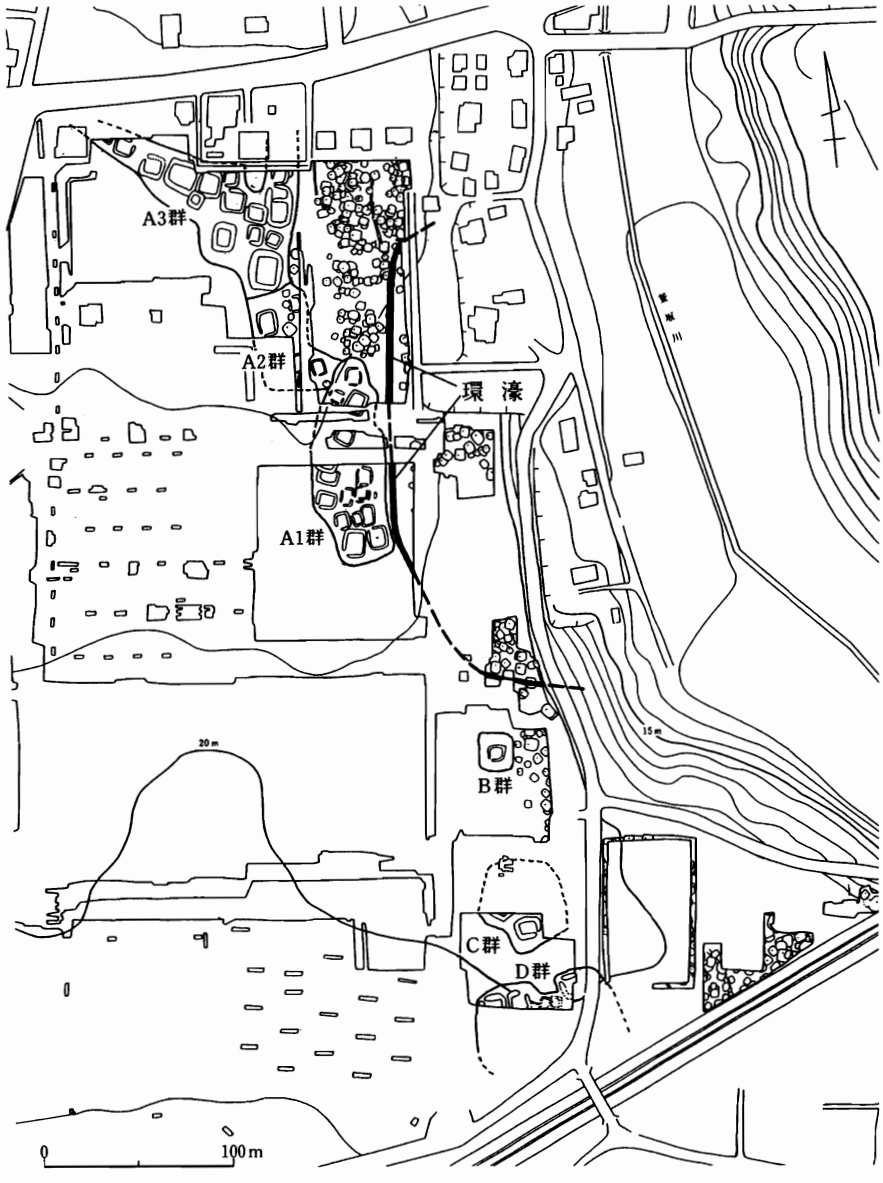
目久尻川右岸の台地上に立地し、標高は約22mを測る。倉見才戸遺跡からは北東約1.0km、神崎遺跡からは南西約1.0kmを測り、倉見才戸遺跡と神崎遺跡のほぼ中間地点に位置する。弥生時代後期前半から古墳時代前期まで継続する（弥生時代後期環濠２、弥生時代後期～古墳時代前期住居址約450、方形周溝墓53など）集落址で、集落成立時期は前述の神崎遺跡とほぼ同時期であり、環濠集落の形態を備えている。つまり、神崎・本郷・倉見才戸の同時期各集落は、同一河川右岸沿いにわずか１kmの距離をおいて分立していたことになる。出土遺物は東三河・西遠江系土器を主体とし、とくに西遠江系の要素が強い。また、東京湾沿岸系土器が客体的に含まれ、さらに東遠江系、北関東系、中部高地系土器なども散見される（合田・及川・池田1995）。集落の規模・豊富な遺物内容などから、人や情報の集積地・交流拠点となり得る大規模・長期間の集落であった可能性が考えられる（池田2001）。



第５図 綾瀬市神崎遺跡(1:1,000)

③寒川町宮山遺跡

目久尻川と小出川に挟まれた台地上の西端に立地し、標高は約17mを測る。倉見才戸遺跡からは南方約2.7kmに位置する。弥生時代後期前半から後半の方形周溝墓群（８基）で、東三河・西遠江系土器を主体

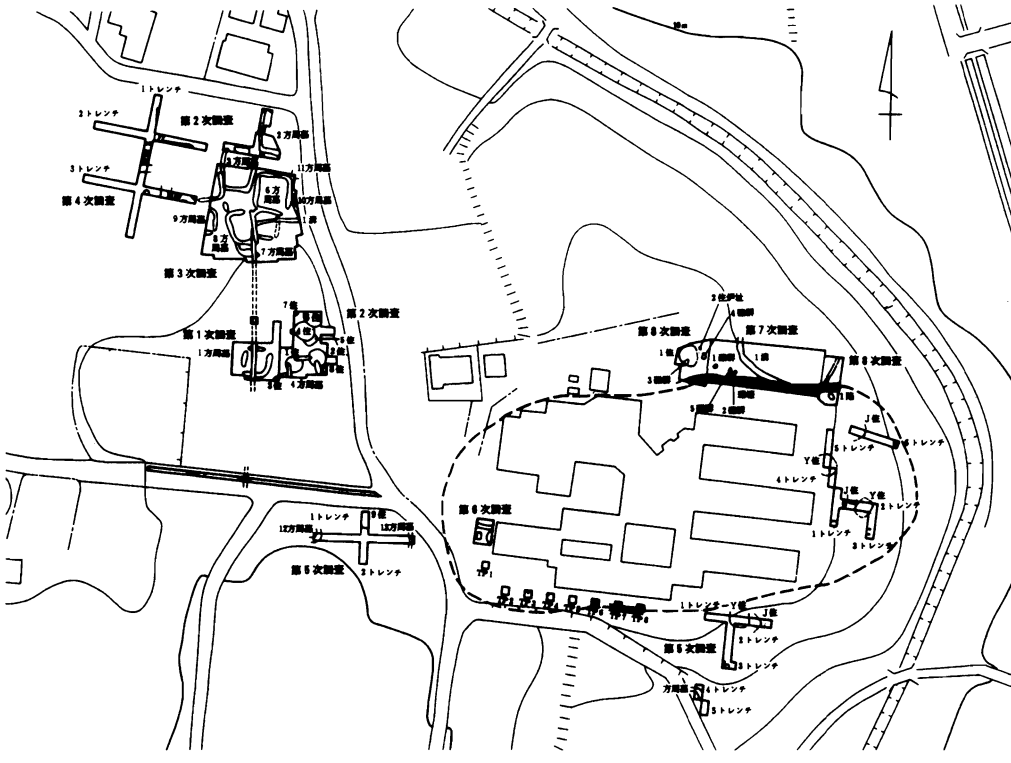


第６図　海老名市本郷遺跡(1:4,000)

とする（第８図）。報告では東海地方からの回数を重ねた交流もしくは波及の可能性が述べられ、さらに近接地に当該期集落の存在を想定している（秋山1998）。

④寒川町大蔵東原遺跡（第７図）

小出川右岸の台地上に立地し、標高は約19ｍを測る。倉見才戸遺跡からは南東約2.2kmに位置する。弥生時代後期前半～後半の住居址、方形周溝墓、環濠などが発見されている。東三河・西遠江系土器を主体とするが、後期前半は東三河系、後半は西遠江系の要素が強い。また後期後半には客体的に東京湾沿岸系土器などが含まれる（第８図）。後期前半には環濠の中層に多



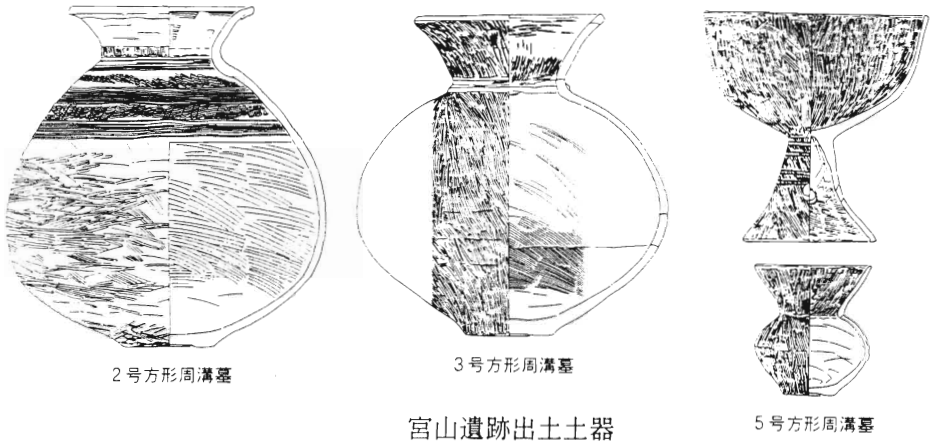
第７図　寒川町大蔵東原遺跡(1:2,000)

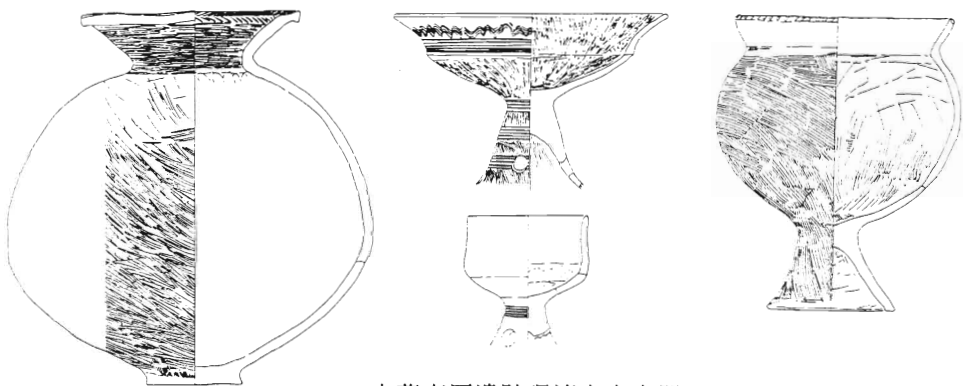
数の遺物が廃棄され、後半には環濠外にも集落が形成される（小林1993・1997)。

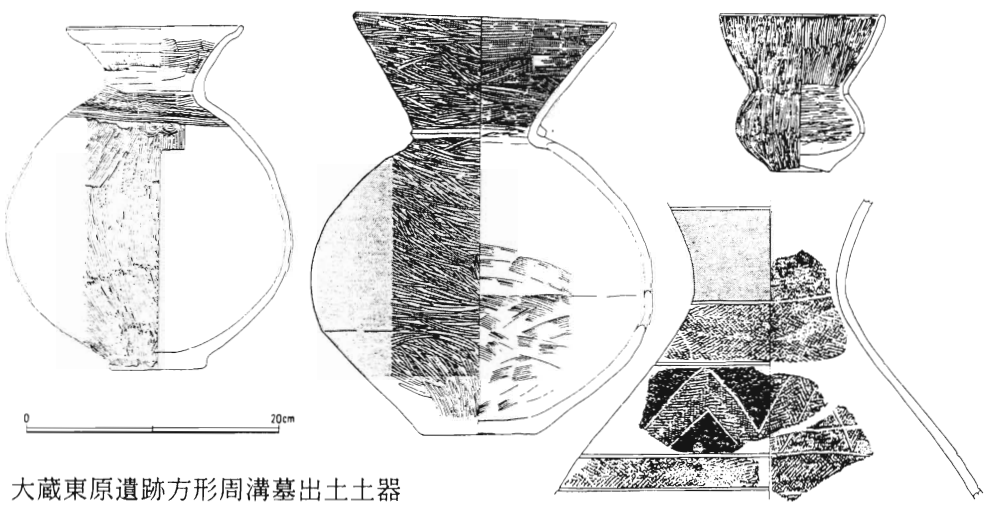
⑤寒川町高田遺跡

目久尻川と小出川に挟まれた台地上の南端に立地し、標高は約25ｍを測る。倉見才戸遺跡からは南東約2.8kmに位置する。弥生時代後期～古墳時代前期の住居址、方形周溝墓、環濠などが発見されている。部分的な報告のため、個別の遺構の時期は不明であるが、環濠からは後期前半の東三河系土器、方形周溝墓群は後期後半の西遠江系土器が主体的に出土し、後者には東遠江系、東京湾沿岸系土器などが伴うとされている。後期前半から後半にかけて東海地方との継続的な交流が行われる点から、前述の本郷遺跡に類似した拠点的集落である可能性が指摘されている（中村・立花2000)。

以上のように目久尻川・小出川下流域の弥生時代後期前半の集落遺跡は、いずれも東三河・西遠江系土器を主体とする内容であり、他系統土器を主体とする当該期集落は未発見である。換言すれば目久尻川・小出川下流域の弥生時代後期前半の様相は東三河・西遠江系の集落のみによって成立しているといっても過言ではない。







第８図　宮山遺跡・大蔵東原遺跡出土土器群

6．おわりに

以上、目久尻川・小出川下流域の弥生時代後期前半の地域的様相について述べてきた。倉見才戸遺跡と神崎遺跡の出土土器群の比較では、両者は東三河・西遠江地域を出自とする櫛描文系壺・高坏、あるいは「く」の字状口縁甕を主体とする同時期・同系統の集落であることが明らかになった。また、目久尻川・小出川下流域の弥生後期前半の集落遺跡の検討では、現段階で５遺跡を数える当該期集落の全てが、東三河・西遠江系の環濠集落であり、さらに集落間約１～2.8kmの距離で、径４kmの範囲に分立しているという状況が確認された。これらは目久尻川・小出川下流域を中心とした地域的なまとまりとして把握されよう。

上記の事象から、弥生時代後期前半という限られた時期に、相当数の東三河・西遠江系の集団が、連続的・継続的に相模川河口に到来し、最初の支流にあたる目久尻川・小出川の下流域の台地縁辺部に、短時日のうちに近接する複数の環濠集落を形成していたということになる。これらは時間的あるいは空間的な在り方から、ある一定期間は同時併存していた可能性が考えられる。

また、環濠の防備施設的な性格を重視するならば、相模地域からみれば外来系となる東三河・西遠江系の集団は、集落形成当初は新天地における在地系集団などとの緊張関係を意識していたという状況が想定される。この緊張感はいち早い集落の分散を促した一つの要因と考えられよう。さらに、近距離に分立した各環濠集落が有機的な関連を持っていたことはほぼ確実であり、集落間に相互の補完関係が存在していたものと推定されよう。

その後、環濠に象徴される集落成立段階の緊張感は、集落の継続とともに徐々に弛緩し(6)、後期後半までには環濠の機能は概ね失われるものと考えられる。

最後に小稿をまとめるにあたって、戸田哲也先生・河合英夫氏には御指導、御教示賜った。記して感謝する次第である。

註

(1)宍戸編年（宍戸1992）ではⅤ期、安藤編年（安藤1996）ではⅥ期に位置付けられる。

(2)筆者は倉見才戸遺跡第４次調査報告書（中村2001）で、後期集落の時期について「後期中葉」と位置付けたが、本論にて「後期前半から後期後半の集落」と訂正させて頂く。また、時間的な制約もあり、後期土器の比率を数値化することは不可能であったが、主体（東三河・西遠江系）：客体（東京湾沿岸系）という関係についてはご理解頂きたい。

(3)倉見才戸遺跡は中期後葉宮ノ台式集落と後期前半東三河・西遠江系集落が同一地を占地している数少ない事例である。

(4)神崎遺跡・倉見才戸遺跡ともに集落全体の一部の調査に過ぎないため、集落の継続期間を限定することは現時点では慎重にならざるを得ない。

(5)茅ヶ崎市篠山遺跡（岡本1980・1981・1990）、同市北稜高校東方遺跡（岡本1980）、藤沢市№208遺跡（寺田1997）などについては、集落址と判断できないため除外している。

(6)本郷遺跡の多種多様な遺物様相、あるいは大蔵東原遺跡の環濠内遺物出土状況・住居址分布状況などはその最たる例といえよう。

引用・参考文献

赤星直忠　1955　「各地域の弥生土器　南関東」『日本考古学講座４　弥生文化』河出書房
秋山重美　1998　『宮山遺跡発掘調査報告書』宮山遺跡発掘調査団
安藤弘道　1996　「南関東地方（中期後半・後期）」『ＹＡＹ！（やいっ！）』弥生土器を語る会
池田　治　1996　「相模の『く』字状口縁甕」『西相模考古』５　西相模考古学研究会
池田　治　1997　「海老名本郷遺跡の集落変遷について」『西相模考古』６　西相模考古学研究会
池田　治　2001　「相模川東岸地域の後期の様相」『弥生後期のヒトの移動～相模湾から広がる世界～』（資料集）西相模考古学研究会
伊丹　徹・池田　治　2000　「神奈川県における弥生後期の土器編年」『東日本弥生時代後期の土器編年』東日本埋蔵文化財研究会
岡本　勇　1976　「第３章第二節　弥生農耕の発展」『神奈川県史　通史編１　原始・古代・中世』神奈川県
岡本　勇　1980　「考古学的にみた茅ヶ崎」『茅ヶ崎市史３　考古・民俗編』茅ヶ崎市
岡本　勇　1981　「考古　第２章　農耕の開始と発展」『茅ヶ崎市史４　通史編』茅ヶ崎市
岡本　勇　1990　「篠山遺跡の弥生土器のもつ意味」『茅ヶ崎市埋蔵文化財調査10周年記念集』10周年記念集編集委員会
岡本　勇　1992　「神崎遺跡の意義」『神崎遺跡発掘調査報告書』綾瀬市埋蔵文化財調査報告２　綾瀬市教育委員会・神崎遺跡発掘調査団
岡本　勇ほか　1990　「座談会・大和市の原始・古代を考える」『大和市史研究』16　大和市
神崎遺跡発掘調査団　1990　「弥生時代の環濠集落址を掘る」『市史だより』７　綾瀬市
神沢勇一　1966　「弥生文化の発展と地域性　関東」『日本の考古学Ⅲ　弥生時代』河出書房新社
木村　勇・田村良照　1992　「寒川町倉見日本鉱業（株）ひかり社宅内遺跡」『第16回神奈川県遺跡調査・研究発表会要旨』神奈川県考古学会
合田芳正・及川良彦・池田治　1995　『海老名本郷（Ｘ）』富士ゼロックス株式会社・本郷遺跡調査団
古賀　寿　1959　「相模野の櫛目文土器」『西郊文化』18　西郊文化研究会
小滝　勉・村上吉正ほか　1992　『神崎遺跡発掘調査報告書』綾瀬市埋蔵文化財調査報告２　綾瀬市教育委員会・神崎遺跡発掘調査団
小滝　勉　1996　「第４章　弥生時代」『綾瀬市史９別編　考古』綾瀬市
小林秀満　1999　『倉見才戸遺跡発掘調査報告書－第３次調査－』倉見才戸遺跡発掘調査団
小林義典　1993　『大蔵東原遺跡発掘調査報告書』大蔵東原遺跡発掘調査団
小林義典　1997　『大蔵東原遺跡第７・８次発掘調査報告書』大蔵東原遺跡発掘調査団
小宮恒雄・中村勉　1998　「第５章　弥生時代」『海老名市史１資料編　原始・古代』海老名市
宍戸信悟　1992　「南関東における宮ノ台期弥生文化の発展」『神奈川考古』28　神奈川考古同人会
鈴木敏則　1997　「三河・西遠江から見た後期弥生土器・前編」『西相模考古』６　西相模考古学研究会
鈴木敏則　1998　「三河・西遠江から見た後期弥生土器・前編　つづき」『西相模考古』７　西相模考古学研究会
鈴木敏則　2001　「三河・遠江系土器の移動とその背景」『弥生後期のヒトの移動～相模湾から広がる世界～』（資料集）西相模考古学研究会
鈴木保彦　1998　「第四章　弥生時代」『寒川町史６通史編　原始・古代・中世・近世』寒川町
鈴木保彦　1996　「第四章　弥生時代」『寒川町史８別編　考古』寒川町
立花　実　1991　「相模における後期弥生土器編年と東海系土器」『東海系土器の移動からみた東日本の後期弥生土器』東海埋蔵文化財研究会
立花　実　1993　「相模における東海系土器の受容」『転機』４
立花　実　1997　「土器の移動からみた弥生時代後期の社会」『かながわの弥生時代の社会』神奈川県考古学会

立花　実　2001　「相模の後期弥生土器～時間的変遷過程と地域差の意味～」『弥生後期のヒトの移動～相模湾から広がる世界～』（資料集）西相模考古学研究会

田村良照　1997　「東相模の弥生時代後期の社会」『かながわの弥生時代の社会』神奈川県考古学会

寺田兼方　1997　「No.208遺跡」『藤沢市文化財調査報告書』第32集　藤沢市教育委員会

中村喜代重・立花実　2000　「寒川町高田遺跡」『第24回神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨』神奈川県考古学会

中村哲也　2001　『倉見才戸遺跡第４次調査発掘調査報告書』倉見才戸遺跡発掘調査団

西川修一　1998　「第Ⅱ編第４章第１節　弥生時代」『御屋敷添遺跡第３地点（No.１）第４地点（No.２）第５地点（No.44）高森・一の崎遺跡（No.37）高森窪谷遺跡（No.３）』かながわ考古学財団調査報告33　かながわ考古学財団

西川修一　2001　「東海から相模へ～御屋敷添遺跡その後～」『弥生後期のヒトの移動～相模湾から広がる世界～』（資料集）西相模考古学研究会

比田井克仁　1987　「伊勢湾系土器の系譜と動向－南関東地方について－」『欠山式土器とその前後』研究・報告編　第３回東海埋蔵文化財研究会

松本　完　1993　「東海系土器群の受容と変容」『転機』４

村上吉正　1992　「第７章第２節　土器」『神崎遺跡発掘調査報告書』綾瀬市埋蔵文化財調査報告２綾瀬市教育委員会・神崎遺跡発掘調査団

湯川悦夫・加納俊介　1972　「南関東出土の東海系土器とその問題」『小田原考古学研究会会報』５小田原考古学研究会

長柄・桜山第１・２号墳覚書

伊　丹　　徹

緒　言
はじめに
A．関東各地における古墳出現期の状況
B．弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の人とモノの移動
C．長柄・桜山第１・２号墳の成立基盤
D．長柄・桜山第１・２号墳の特徴
E．東海道と東山道
結　論
補　論
おわりに
補記・文献

緒　言

長柄・桜山第１号墳は1999年3月に逗子市と葉山町の行政界をまたいで発見された。近隣に住んでおられる東家洋之助氏が埴輪片を採集したのが契機となり、横須賀市人文博物館の大塚真弘・稲村繁両氏が埴輪を確認された。その直後に県教育委員会によって周囲の分布調査が行なわれ、500m西の相模湾を望む丘陵端でも古墳らしき高まりが確認された。田村良照氏も同時期にこの高まりを古墳らしいと見極めている。しかし立ち木が繁茂していることと墳裾が明瞭でなかったため県教育委員会がトレンチを２本入れたところ葺石と埴輪が出土し第２号墳と命名されるに至った。その後、県教育委員会による第１号墳の測量調査、かながわ考古学財団による第２号墳の測量と両古墳の墳形を確認するための発掘調査が行なわれ、この結果については既に報告書が刊行されている（柏木・依田2000）。発見から時を置かずしてこの古墳の重要性に鑑み、識者によって講演会やシンポジウムなどで触れられることが少なくなかった。また県・市・町は協力して両古墳が国の指定史跡になるべく努力しており、地権者のご理解や逗子市議会議員・葉山町議会議員の有志で結成された逗葉議員懇談会および古墳をまもる会など住民の支援も頂戴している。はまかぜ新聞には関連記事を連載していただき、市・町では小さな展示会（町：2001年12月～2002年1月、市：2002年1月）や講座（市：2001年11～12月、町：2002年2月）を開き、広報紙等でも存在をアピールしているところである。

ここではその現状での評価について述べてみたい。「長柄・桜山第１・２号墳　～概要および現段階での評価」と題するレポートの素案（本稿「はじめに」から「結論」までの部分）については桝渕規彰・佐藤仁彦両氏とともに検討し、堀江道子・鈴木次郎・加部美智子・穐元芳男・鈴木和雄の諸氏の校閲を受けたこと、桝渕・工藤一路・永田寛夫・佐藤・行谷正茂の諸氏と行なった簡易測量調査から知見を得たこと、大塚初重先生の講演や稲村繁・岡村道雄・臼杵勲・禰冝田佳男の諸氏から教示を得たことを明記し、試堀・発掘・測量に関わった県教育委員会・かながわ考古学財団の諸氏にもお礼申し上げます。なお補論の一部は三浦半島文化財保護連絡協議会（葉山町にて2001年12月21日に開催）で口頭発表したものである。

逗子市・葉山町
1 長柄・桜山第１号墳
2 長柄・桜山第２号墳
逗子市
3 披露山
4 池子桟敷戸
5 池子
6 持田
7 地蔵山
8 台山稲荷下
9 沼間台
10 菅ヶ台地
11 沼間ポンプ場裏
葉山町
12 No. 2
13 三ヶ岡
14 御用邸内
15 間門

■ 弥生後期
▲ 弥生後期・古墳前期
● 古墳前期

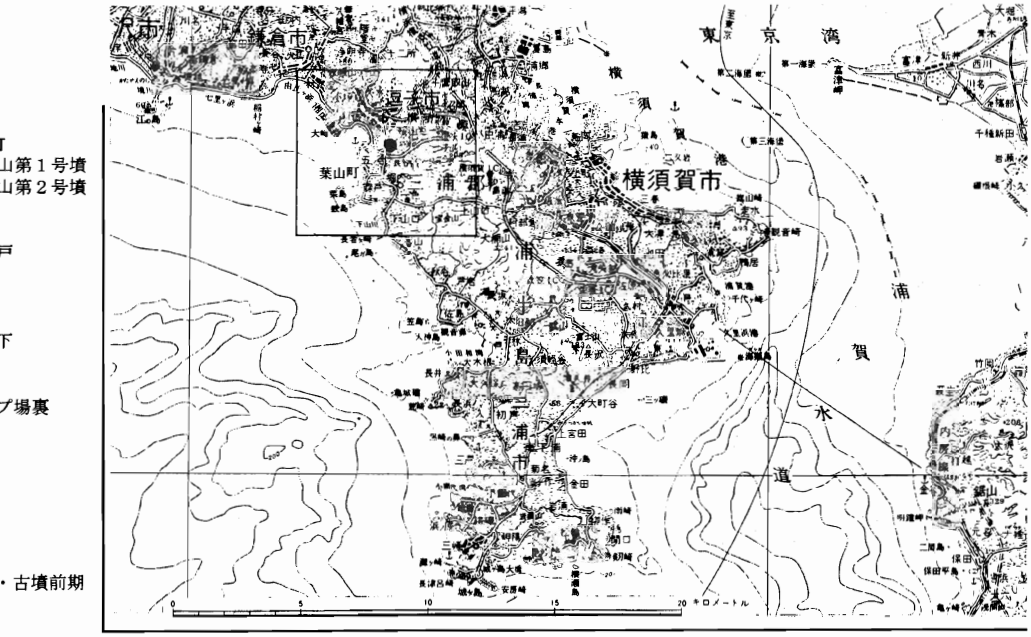


図１　長柄・桜山第１・２号墳位置図　上［1/30,000］　下［1/5,000］

はじめに

この古墳で重要と考えられることを列記すれば次のようになる。

○ 両古墳ともほぼ完存しており、未盗掘の可能性もある（特に第１号墳）。

○ これまで古墳分布空白地帯での常識を翻す新発見である。

○ 両古墳とも大形の前方後円墳である。第１号墳は全長90m、第２号墳は88mを測り、県内で現存する古墳では最も大きい。

○ 両古墳から埴輪が出土し、その年代は共に４世紀中頃から後半のものである。

○ 第１号墳の埴輪は壺形埴輪と円筒埴輪（もしくは朝顔形埴輪）、第２号墳は壺形埴輪を主体として一部に円筒埴輪（もしくは朝顔形埴輪）および土師器壺形土器を伴なう。

○ 第２号墳は墳丘に葺石が認められ、関東の前期古墳としては稀有な例である。

○ 両古墳とも三浦半島の基部、逗子市・葉山町の境をなす丘陵上に約500ｍを隔てた近接した場所に築造されており、それぞれ東京湾・相模湾を眺望する位置にある。

ではこれはどのような評価につながるのであろうか。要旨を箇条書きでまとめてみた。

Ａ．関東各地における古墳出現期の状況から、長柄・桜山は東海道筋の古墳の動向と軌を一にして出現すること。

Ｂ．弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の人とモノの移動から、広汎な物流があり、その中で長柄・桜山の成立を考えるべきであること。

Ｃ．長柄・桜山第１・２号墳の成立基盤は交通の要衝に立地すること。

Ｄ．長柄・桜山第１・２号墳の特徴は畿内の定型化した古墳に近似するということ。

Ｅ．ヤマト政権の東国経営の根幹である東海道ルート上に位置する長柄・桜山第１・２号墳は、ヤマト政権に直結する象徴として築かれたと考えられること。

古墳時代の始まりについては長らく議論の対象とされてきており、最古の古墳に対する見解も様々である。なお以下の記述は古墳時代は箸墓古墳など定型化した前方後円墳の出現によって始まるという見解に従う。よって発生期古墳・出現期古墳という用語は使用せず、布留式より前の墳丘を有する墳墓は「墳丘墓」と呼ぶ。つまり前期古墳が最古の古墳であるという前提である。古墳出現期といった場合、それは前期の初頭を意味する。弥生・古墳時代の近畿と南関東の土器様式については次の図式を用いる。

弥生時代後期　前　半：第Ⅴ様式前半／久ヶ原式
　　後　半：第Ⅴ様式後半／弥生町式・古
　　終末期：第Ⅵ様式＝庄内式（纏向式の一部）／弥生町式・新
古墳時代前期　布留式／土師器

また庄内式は西暦250～300年頃の3世紀後半、古墳時代前期・布留式は300年前後以降と考えておきたい。ではＡから順次その内容を補足してみたい。

A．関東各地における古墳出現期の状況

常陸では４世紀後半から古墳の本格的築造が始まり、前方後方墳の勅使塚が認められるものの、主体となる墳形は大場天神山・鏡塚・長辺寺山など前方後円墳である。

下野の造墓活動は４世紀前半からで、大半が茂原大日塚・愛宕塚・権現山、三王山南塚（1・2号）、駒形大塚・吉田温泉神社・那須八幡塚、浅間山・亀の子塚・上根二子塚（1・2号）などの前方後方墳であり、４世紀中頃から後半も上・下侍塚、藤本観音山、山王寺大桝塚などの大形前方後方墳が主体となり、大形前方後円墳・円墳は５世紀まで築造されない。

上野では４世紀前半から中頃に元島名将軍塚・前橋八幡山・寺山などの前方後方墳が築かれたのち、前橋天神山・大鶴巻・太田八幡山・朝子塚・本矢場薬師塚といった前方後円墳に転換する。

北武蔵では４世紀後半に塩（1・2号）・鷲山・諏訪山（29号）・山の根（1号）などの前方後方墳が造られ始め、５世紀に至って長坂聖天塚・金鑽神社などの円墳および高坂諏訪山・天神山・野本将軍塚などの前方後円墳に変わる。その中で稲荷山古墳群が形成されるようになる。この地域では埴輪は５世紀にならないと出現しないようである。

南武蔵では芝丸山の例があるが、多摩川下流域に前方後円墳が群をなして築造され始めるのが４世紀後半で、右岸に白山・観音松、左岸に亀甲山・蓬莱山と100m前後のものが対峙する。これらの古墳から埴輪は発見されていない。これらよりやや上流では、左岸に砧中学７号、右岸に稲荷前6・16号が続く。

相模では３世紀後半から相模川中流域左岸に秋葉山古墳群（前方後円形を呈した４基で一部は弥生墳丘墓）、やや遅れて４世紀中頃から後半にかけて右岸に真土大塚山（墳形不明）、小金塚（円墳、ただし前方後円墳の可能性もある）、愛甲大塚・ホウダイ山（前方後円墳）が陸続と造られる。

下総では３世紀に上る前方後方形墳丘墓（北ノ作2号、飯合作1・2号）は認められるものの、大形前方後円墳の出現は５世紀の三之分目古墳まで待たねばならない。

上総では東京湾側と太平洋側で若干様相が異なる。太平洋側では４世紀後半の柏熊古墳群のしゃくし塚や能満寺古墳といった大形前方後円墳以降、円墳と前方後円墳が造られ続ける。東京湾岸はやや複雑で、纏向型墳丘墓である神門３～５号墳や、後方部が横長の前方後方墳形墳丘墓である高部32・30号墳など３世紀に遡るものから、５世紀の大形前方後円墳である内裏塚・銚子塚・二子塚の間に造られたものには前方後円墳（手古塚・飯籠塚・天神山・今富塚山・大厩・釈迦山）・前方後方墳（鳥越・道祖神裏・新皇塚）・円墳（浅間様）と様々な墳形が見られる（石野編1995）。

こうしてみると、関東の大部分は遅くとも４世紀の後半には前方後円墳もしくは前方後方墳の造営が開始され、地域によって最初の墳形は様々であるが５世紀には首長墓は前方後円墳に

収斂するといえる。ただし、関東における古墳出現期の様相を、地域的な観点から大まかに捉えると、東山道においては前方後方墳が優勢であり、東海道においては前方後円墳が優勢であるという対照的な関係にあることが指摘されよう。

B．弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の人とモノの移動

弥生時代後期、東遠江・菊川式土器や駿河・登呂式土器が花水川や荒川を遡上し、三河・西遠江の山中式土器は相模川を上る。他地域の土器が多量に関東に流入する時期に三浦半島は西上総とともに弥生町式土器を守る。しかし古墳時代前期になると三浦半島にも多種多量のＳ字状口縁台付甕が認められるようになる。この産地は愛知・静岡だけでなく、石田川式土器との関係を指摘するものもある。鉄器や青銅器も後期からさかんに東国に流入してくる。弥生時代中期には特定の石器（太型蛤刃石斧）の流入が顕著であるものの遺物として捉えられるものは少なく、後期に至って流通ともいえるほど物流が盛んになり、古墳時代前期には全国的なネットワークさえ窺われるようになる。このような中で長柄・桜山第１・２号墳は出現する。このネットワークを支えた路は陸路・海路ともにあり、それを知悉した者たちの手で滞りない物流が実現されていたことは想像に難くない。

このなかで古墳の分布が希薄な地域も散見され、代表的な箇所として北武蔵の稲荷山古墳群周辺地域をあげることができる。ここは５世紀末以降になってから殷賑を極める地域である。三浦半島も状況をやや異とするが空白地帯であり、その意味からも注目されてよい地域であった。三浦半島は後の相模国域に属しつつも、南武蔵や相模川流域とは地理的にやや隔たりがあり、一地域として画することができる。古墳時代前期の墓制としては方形周溝墓が知られるのみで、高塚古墳の出現は５世紀中頃の長沢１号墳からと考えられてきた。東京湾対岸の西上総や南武蔵および相模中央部の状況、特に三浦半島の北側にあたる柏尾川流域で東野台古墳群（４世紀末・前方後方墳および方墳）が認められることを勘案すると、交通の要衝でありながら分布の空白を招いていた。しかしこれは後背地に低地が少なく生産性の低い地域であるということで、これまでは深く考慮されることなく説明されてきたきらいがある。

そこで、長柄・桜山第１・２号墳が従前の空白地帯に発見されたことは、肥沃な後背地をもたずとも、先に述べた物流ネットワークを支えた陸路・海路双方にわたる交通の要衝にあるということに、一つの歴史的意義を求めることができる。

C．長柄・桜山第１・２号墳の成立基盤

長柄・桜山第１・２号墳北側の逗子市域、田越川流域には弥生時代後期に至り遺跡が急増する。左岸（古墳寄りの南側）では持田遺跡・台山稲荷下遺跡・沼間台遺跡・地蔵山遺跡、右岸では披露山遺跡・池子遺跡群など豊富な遺物を有する遺跡が点々と発見され、ほとんどの遺跡

は古墳時代前期に継続する。

一方、古墳南側の葉山町域の森戸川流域や下山川流域では今のところ弥生時代に遡る遺物の出土は僅少である。堀内（No.2）遺跡・三ヶ岡遺跡・間門遺跡の主体は古墳時代前期になってからといえる。いずれにしても肥沃な低地は極めて少なく、陸路には峻険な山地が浜に迫った地区である。

持田遺跡出土の石釧、池子遺跡群の内行花文鏡（破鏡）・銅鏃・鉄鏃といった搬入された遺物からは貧弱な地域であるという考えには至らないが、大形前方後円墳を築造できるだけの後背地であるかというと疑問を残さざるを得ない。

ここで参考になるのは日本海岸で最大の規模（107.5m）を有する前方後方墳である富山県氷見市柳田布尾山古墳の存在である。この古墳は田畑等からの生産物ではなく、富山湾の漁業権を主要な基盤として築かれたものではないかと考えられている。ちなみにこの古墳は近年国指定史跡となった。

また長野県飯田市天竜川右岸の事例も多くの示唆を与えてくれる。弥生時代後期に墳丘墓が盛んに造られた地域ながら、前期古墳はほとんど見られない。にもかかわらず5世紀中頃からは座光寺原地区では新井原12号墳、竜丘地区では兼清塚・鏡塚・鎧塚・塚原二子塚・大塚・権現堂1号などの古墳から、鏡や甲冑を始めとする優れた副葬品が多量に発見されている。これはこの時期に伊那谷でも下伊那が東山道ルートの拠点になったことを示すものである。上伊那では松島王墓しか造営されなかったことと比べれば大きな違いである。

これらの事例を顧みるまでもなく、交通の要衝である逗子・葉山に大形の前期古墳が発見されても不思議なことは何もなく、それを具現化したのが長柄・桜山第１・２号墳なのである。この発見により、太平洋岸の海上交通や古東海道を考察・論及する上では、今後避けて通れない事例を提示することになった。

D．長柄・桜山第１・２号墳の特徴

埴輪　円筒埴輪は土留め・墓域を画す役割をもつもの、壺形埴輪は底部が焼成前穿孔で葬送儀礼に関わるものとされている。ここの壺形埴輪は長胴で、口縁部は信濃や常陸のものに類似し、４世紀中頃から後半のもの可能性が高い。普通円筒埴輪と壺形埴輪が共伴する例は今のところ南関東でこの古墳だけである。

葺石　葺石は第２号墳にあり、地山の土丹のほかに海岸から運んだ円礫も認められる。白っぽい円礫は海に面した前方部前面に顕著で、相模湾からは白く光って見えたであろう。

眺望　第１号墳からは東京湾を隔てて房総半島が一覧できる。また第２号墳に至っては、伊豆半島や富士山を遠くに望み、眼下には江ノ島を浮かべる相模湾が大きく広がる。箱根から丹沢の山並には大山が一段と高く映える。神戸市五色塚に比肩する眺望がこの古墳の売りである。

墳形　墳形は前方後円墳である。この地域の最初の古墳が前方後円墳であるということは重要である。先に見たように東国で最初に出現する50m以上の古墳はほとんどが前方後方墳である。その中には鑑鏡や石製腕飾類・玉類および畿内系・東海系土器が出土したものもある。そして４世紀中頃から後半になると墳形は前方後円墳に移り変わる。これはヤマト政権の圧力・影響で同じ形のものが採用されたと考えるのが至当である。第１号墳の墳形については後述する。

近隣の古墳　長柄・桜山第1・2号墳の北東約4kmといった至近距離に相模と武蔵の国境がある。武蔵方面の動向には敏感に反応しなければならない立地と考えてよい。南武蔵の核となるのは多摩川下流域の多摩川台古墳群であるが、長柄・桜山第1・2号墳とは35kmほど隔たり、相模の核となる真土大塚山古墳から秋葉山古墳群にかけては22～26km離れている。多摩川台古墳群との間には、小規模ながら東野台や殿ヶ谷に墳丘墓群が成立しており、その距離は14kmほどしかない。長柄・桜山第1・2号墳に継続する古墳であれば、大形の前方後円墳こそが相応しい。しかし近隣はおろか武蔵の最南部にも後続候補は見当たらない。

長柄・桜山第1・2号墳は最初から埴輪や葺石を伴なう前方後円墳であり、畿内の直轄地であるとか、直結した人の墓であることも射程に考えられる。このようなことから長柄・桜山に副葬されたであろう品々は、当時のヤマト政権で至高とされたものである蓋然性は極めて高いのである。４世紀中頃まで遡れば、倣製でなく舶載の三角縁神獣鏡が伴なうことも夢物語ではない。日本武尊が走水から渡航する際の弟橘媛の物語は、このようなルートにあったからこそともいえよう。

E．東海道と東山道

五畿七道でいう東海道諸国は伊賀・伊勢・志摩・尾張・三河・遠江・駿河・伊豆・甲斐・相模・上総・下総・安房・常陸の14国であり、東山道は近江・美濃・飛騨・信濃・武蔵・上野・下野・陸奥・出羽の10国である。弥生時代後期以降の活発な全国的な交流によって成立した幹線ルートがその元になったことは想像に難くない。東海道は「海」の字が示すように太平洋沿いの諸国であり、海路でしか繋がっていない箇所として相模から上総ルートがある。松阪市宝塚１号墳の船形埴輪の出土を待つまでもなく、大量の物資の往来には陸路より海路の方が適していることは明白である。東海道と東山道では弥生時代後期の墳丘墓や前期古墳の形状が対照的である。前者には前方後円の形が、後者には前方後方の形が強く対応している。ただし、尾張周辺地域の三河・遠江・伊勢や東山道の美濃では前方後方墳から始るところが多いこと、近畿地方に極めて近い伊賀や近江では前方後円墳から始るところが多いことは注意すべきことであろう。しかしながら、ヤマト政権による東国経営の根幹は当初では東海道ルートを基礎においていることは明瞭である。

そして５世紀になると様相は一変する。東海道では上総を除き、巨大古墳の造営が芳しくな

くなるのである。一方東山道では上野が突出し、北武蔵や下野も盛んに造墓活動を行う。上総に比べると下総はやや低調である。これはヤマト政権の東国戦略が東海道から東山道に方向転換した結果と見られる。つまり、「まつろわぬ国」＝東山道、特に上野に対するヤマト政権の姿勢が反映されていると見るべきである。

以上のようなヤマト政権の東国への勢力伸長・経略の流れの中で、長柄・桜山第１・２号墳の造営と、その後の相模・南武蔵における大形古墳の消長を考えることができよう。すなわち、４世紀に入りヤマト政権による関東への勢力扶植が東海道ルートを基軸に本格的に推し進められた結果、いち早く「まつろう」ことになった、或いは相模から上総への陸海の交通・物流の要衝である地域として掌握された三浦半島の付け根に、その象徴として長柄・桜山第１・２号墳が築かれたのであろう。そして、５世紀にはいると、ヤマト政権の経略の重点が北関東へ移り、その実績、すなわち「まつろった」結果として、北関東での大形前方後円墳の造営が本格化するようになったのではなかろうか。

また、相模・南武蔵で大形古墳が築かれなくなることは、在地勢力の減退をそのまま意味することではなく、前述のようにヤマト政権による経略の重点が北関東へ移った結果とも考えられる。とはいえ、５世紀の東国諸地域における大形古墳のあり方の跛行性の原因の一端は、近畿地方中枢部の王権の移動にあったとも考えられる。すなわち大和・柳本古墳群→佐紀盾列古墳群→馬見古墳群といった奈良盆地から、河内の古市古墳群や和泉の百舌鳥古墳群への政治主体勢力の移動である。このことが東海道・東山道において古墳群の消長が一律でないことと連動しているの可能性があり得る。長柄・桜山に眠っている遺物は、この複雑な状況を解き明かす鍵の一つとなることは間違いない。

結　論

縷々述べてきたように、長柄・桜山第１・２号墳は古墳時代の東日本における政治・経済情勢を探る上で欠かすことのできない存在である。換言すれば、ヤマト政権の勢力伸長のバロメーターであり、古代国家成立時における物流の重要さを指し示す証しなのである。

こうした意義を有する古墳が今まで分布の知られていなかった地域で、突然それも完全に近い形で発見されたことは、相模や神奈川県の古墳時代を考える上で極めて重要である。それ以上に、古代国家の成立・統一過程に論及する場合、長柄・桜山第１・２号墳は必要不可欠な存在となるのである。

補　論

以上のレポートに若干の付け足しを行ないたい。

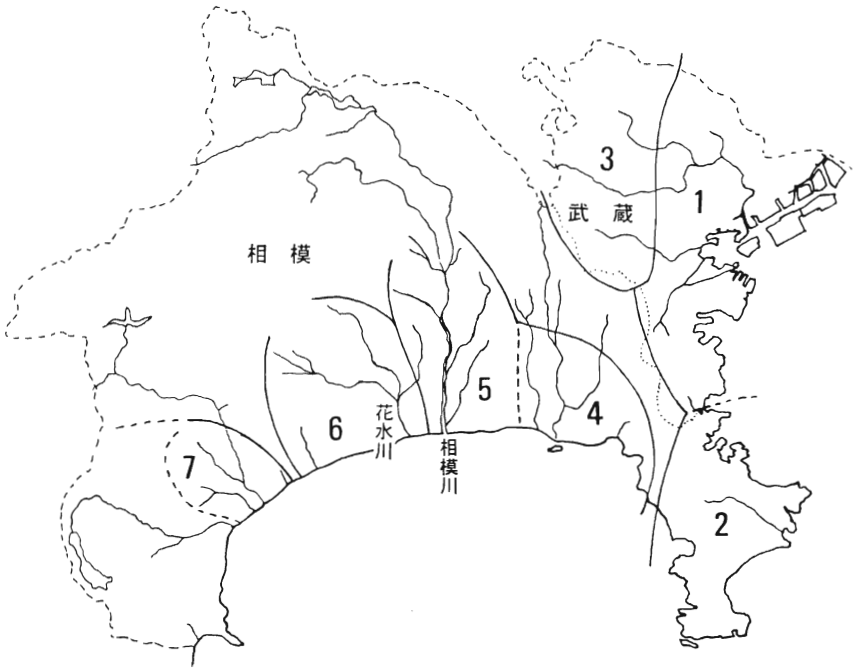


図２　弥生時代後期土器の小地域分布圏

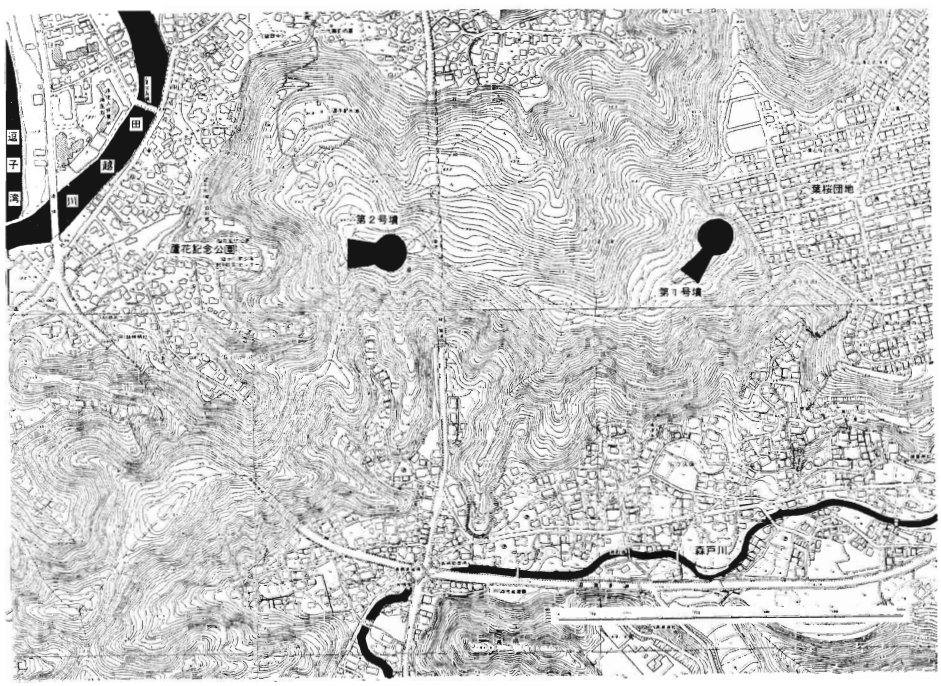


図３　古墳周辺の地形

埴輪　相模では土器の地域差が顕在化してくるのは弥生時代後期からである。図２の１・２は東京湾沿岸のもの、３は朝光寺原式、５は山中式の影響の強い地域、４は１・２と５の土器が

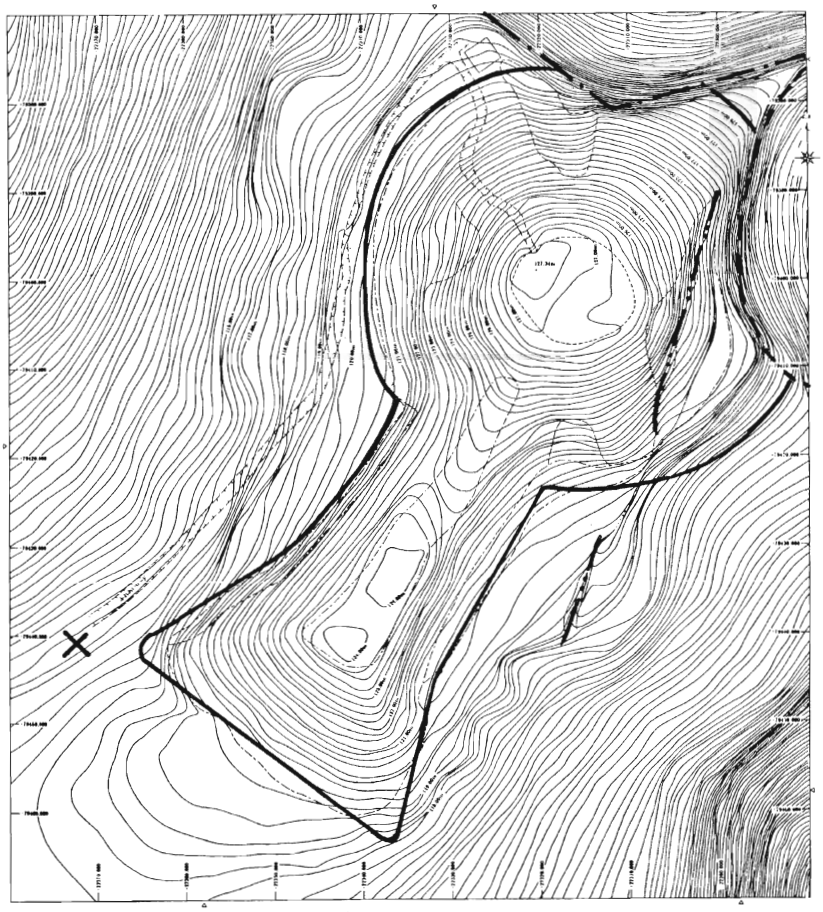


図４　第１号墳［1/800］

混淆する地域、６は菊川式が多く見られる地域、７は駿河湾と通じる地域である。２の三浦半島の弥生後期から古墳前期の甕はナデ調整のものが主であるが、葉山町北部を西流する森戸川流域のNo. ２遺跡や三ヶ岡遺跡ではハケ調整、南部で相模湾に注ぐ下山川の南側、横須賀市に近い間門遺跡のものはナデ調整が顕著である。

雨上がりの翌日、特に１号墳では埴輪が細片で採取できる。両墳から出土した埴輪には細かいハケがよく残り、器壁は薄く剥がれやすいものが少なからず認められる。粉っぽいものや、細砂が多量に混入しているものもあり、ハケ調整台付甕と見まごうものもある。現在までに出土した埴輪には大きく分けて次の三種類のものがある。

①　軟質で表面のスリップが剥離しやすいもの　　②　軟質で粉っぽいもの

③　硬質でハケ調整を明瞭に残すもの

これらが器種の違いに起因するものかまでは、全形が伺えるものが少ないこともあり詳らかではない。しかしこの胎土の違いはそのまま奈良・平安時代の土師器杯・甕にまで受け継がれている。

第１号墳について　第１号墳は後円部東端の一部は宅地造成によって削られ(図４のＶ字を呈す一点鎖線)、東南部は地滑りを起こしている(図４の二点鎖線は地滑り、破線は崩落)。しかし前方部の残りは良好で、発見時の観察によって先端が撥状を呈するものと考えた。しかしトレンチを入れた範囲確認調査では、くびれ部付近は表面観察よりもやや広がることが判明した。だが、箸墓古墳と比較する誘惑には抗いきれない。なお、この比はほぼ１：３である(図５)。トレンチでは墳裾が明瞭に確認できず、前方部が撥状に開く可能性も高いことは図４の×印に立つと確かめられる。東南側の墳裾から急に落ちていくにも関わらず、くびれ部から前方部にかけてのラインが東南・北東ともに同じような形で痩せていることも、この見込を裏付ける。第２号墳が墳裾から急な崖になっていることから前方部端が崩落しているか、築造時に制約を受けているように見えるのとは対照的である。

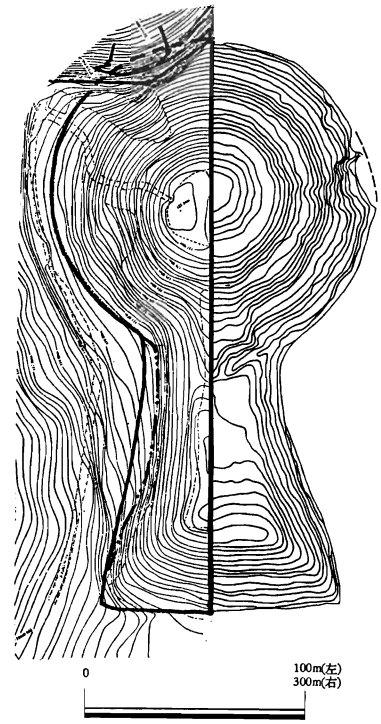


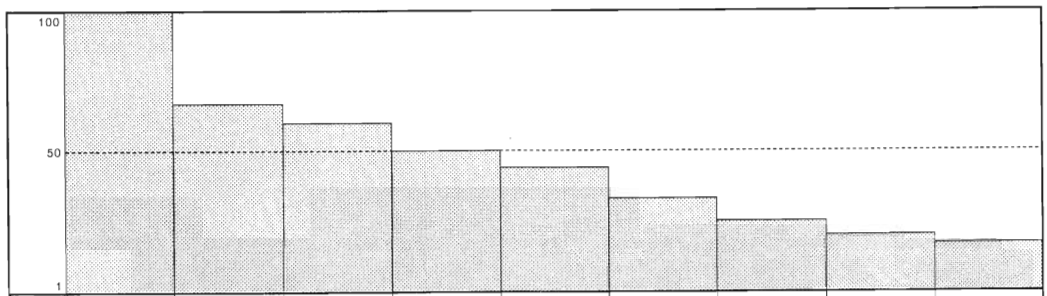
図５　第１号墳(左)［1/1,000］と箸墓(右)［1/3,000］

箸墓ともう少し比べてみたい。北條芳隆氏は前方部が撥形に開く古墳について前方後円墳だけでなく前方後方墳にまで範囲を広げて比較を行なった。奈良県箸墓古墳の墳丘規模を１としたとき、1/2となるものに岡山県浦間茶臼山古墳、1/3となるものに京都府五塚原古墳・元稲荷古墳・兵庫県丁瓢塚古墳、1/6となるものに岡山県湯迫車塚古墳・片山古墳・七つ坑1号墳・大坑古墳・兵庫県権現山51号墳・香川県爺ヶ松古墳を掲げる(北條1986)。また岸本直文氏も築造企画の系列について追求し（岸本1992ほか)、澤田秀実氏は箸墓系列として相似に近い墳形をまとめ、箸墓類型を抽出した(澤田1999ほか)。これらの成果に若干の事例を追加してみた（表１)。この表から読み取れることが幾つかあるが、一番重要なことは、古墳はやはり政治的産物ということを裏付けることである。石材は原産地から遠く離れるほど小さくなるのが原則だが、それとは全く違う大きさと距離の関係が見て取れる。それも東海道筋では天竜川以東では東へ行くほど大きいということである。ただこの大きさについては平地に造られたか、尾根筋に造られたかという立地にかなり制約されることは言を俟たない。

図４にもう一度戻っていただきたい。前方部端は測量図では割と平坦な尾根筋のように見えるが、現地ではかなり急に落ちており、丘尾切断による築造が伺える。

また、後円部の墳頂は近年若干削平を受けて平坦である。ここに白色粘土が散っているのを確認できる。主軸と直交する方向に３～４ｍほど認められ、粘土槨の存在が推定される。墳形・規模といい、粘土槨の存在といい、白山古墳との比較検討が今後重要になるものと考えられる。

表１　箸墓系列箸墓類型墳



	100 1/1	67 2/3	60 3/5	50 1/2	44 4/9	33 1/3	25 1/4	20 1/5	17 1/6
福　島								杵ヶ森	
茨　城			梵天山						
千　葉					姉ヶ崎天神山 飯籠塚？				
神奈川						白山 長柄・桜山１			
静　岡								神明山１	
群　馬					朝子塚				
滋　賀							雪野山		
京　都		椿井大塚山				五塚原 元稲荷			
奈　良	箸墓								
大　阪					弁天山Ａ１ 築野車塚 森１				
兵　庫					西求女塚	丁瓢塚			権現山51
岡　山				浦間茶臼山		植月寺山 宮内狐塚？	宍甘山王山	美野中塚	湯迫車塚 片山 七つ抜 大抜
香　川									鎌ヶ松
福　岡					石塚山				

第２号墳について　後円部の頂上の塚（図６の二点鎖線）は墳丘に伴うものか、周囲を削って塚を盛ったものかは不明である。ただし塚の頂部は後円部の中心からずれており、墳丘に伴うものと考えた場合、主体部が良好に残存している可能性はほとんどない。小径を開削するためにわざわざこの部分を残して削平するのも不自然であり、後世の塚と考えた方が無難である。その場合、主体部の痕跡は充分検出可能となる。第１号墳にも言えることだが、発見時には樹木・下草が繁茂して見通しが利かず、古墳と即断するには躊躇いがあった。特にこちらは墳裾が明瞭でなかった。下草を伐開してわかったが、第２号墳は南側の急斜面に少なからず崩落している。前方部端は特にそれが著しい。前方部前面中央や後円部の一部も崩落が認められ（図６の破線）、前方部端北側の平坦面（図６の点線　後世の削平による）の処置を含め、今後の整備にあたっては何らかの手当てが必要になろう。

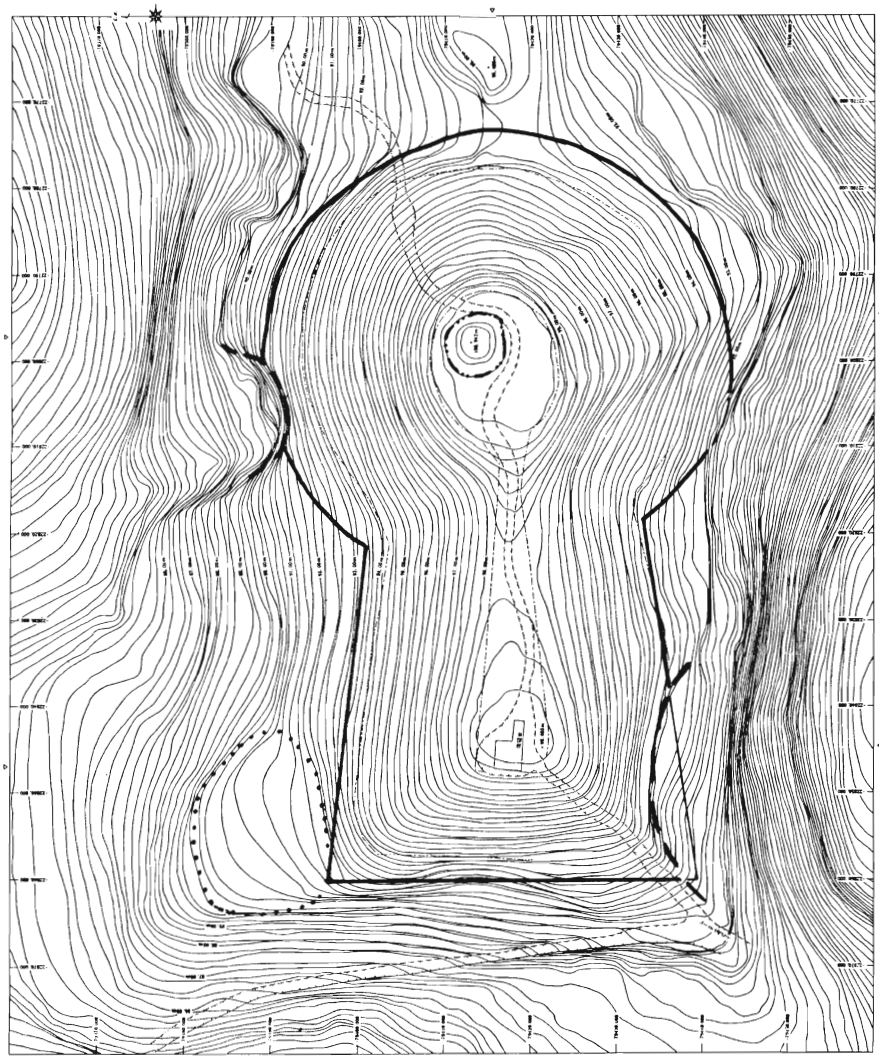


図６　第２号墳［1/800］

おわりに

はなはだ粗く拙い素描であるが、一年間この古墳と身近に付き合ってきたことを綴らさせていただいた。1998年2月に開催された本会主催の「考古学入門講座　神奈川の古墳」や2001年8月の平塚市博物館「相武国の古墳」展に併せたシンポジウムを大いに参考にさせていただき、望月幹夫・宍戸信悟・西川修一・大島慎一・池田治・北條芳隆・立花実・植山英史・柏木善治をはじめとする多くの方々から様々な教示を頂きながらほとんど活かすことはできなかった。不明をお詫びする。また編集の労をとられ、第２号墳の発見にも尽力された田村良照氏には終始励ましの言葉をいただいた。併せて感謝申し上げます。

補　記

『長柄・桜山第１・２号墳　測量調査・範囲確認調査報告書』３頁に記載された葉山町の基準点No. 103のＸ座標は-79162. 604の誤記である。また第１号墳の座標値が西に10mずれている（第１号墳後円部墳頂の標高127. 34mとあるものは葉山町基準点No. 106で、この座標値はＸ座標が-79399. 052、Ｙ座標が-22330. 465である）。

文　献

調査報告

桝渕規彰・柏木善治　2000『長柄・桜山第１・２号墳　新発見の大形前方後円墳の概要』神奈川県教育委員会・財団法人かながわ考古学財団

桝渕規彰・植山英史・伊丹　徹　2000「逗子市・葉山町長柄・桜山第２号墳の試掘調査」『神奈川県埋蔵文化財調査報告42』神奈川県教育委員会

柏木善治・依田亮一　2001『長柄・桜山第１・２号墳　測量調査・範囲確認調査報告書』神奈川教育委員会・財団法人かながわ考古学財団

全般（個々の古墳についての報告については割愛させていただいた）

稲村　繁　1993～　「三浦半島の古墳Ⅰ～」『横須賀市博物館研究報告(人文科学)』38～

稲村　繁　1996～　「神奈川県の埴輪Ⅰ～」『横須賀市博物館研究報告(人文科学)』41～

神奈川県考古学会　1998『考古学入門講座　神奈川の古墳』

神奈川県考古学会　2000『考古学入門講座　神奈川の古墳　討論会成果集』

浜田晋介　1996・97『加瀬台古墳群の研究Ⅰ・Ⅱ』川崎市市民ミュージアム考古学叢書２・３

浜田晋介　2001「前方後円墳と円墳」『川崎市市民ミュージアム紀要』13

平塚市博物館　2001『相武国の古墳』

望月幹夫　1986「古墳時代における地域社会の一様相」『東京国立博物館紀要』22Ⅰ

はじめに～結論

石野博信編　1995『全国古墳編年集成』雄山閣

補　論

伊丹　徹　2001「神崎遺跡から考える」『神奈川考古』37

岸本直文　1992「前方後円墳築造規格の系列」『考古学研究』39-2

岸本直文　1995「『陵墓』古墳研究の現状」『「陵墓」からみた日本史』青木書店

岸本直文　1996「前方後円墳の築造規格」『考古学による日本歴史５政治』雄山閣

澤田秀実　1991「墳丘形態からみた権現山51・50号墳」『権現山51号墳』

澤田秀実　1999「前方後円墳築造企画の形式学的研究」『第４回東北・関東前方後円墳研究会』

澤田秀実　2000「墳丘形態からみた美作諸古墳の位置づけ」『美作の首長墓』

篠原和大・石橋直也ほか　2001「清水市神明山１号墳発掘調査報告」『静岡県の前方後円墳　個別報告編』静岡県文化財調査報告書55

立花　実　2002「相模　Ｖ様式」『弥生土器の様式と編年　東海編』木耳社

西相模考古学研究会　2001『シンポジウム　弥生後期のヒトの移動』

北條芳隆　1986「墳丘に表示された前方後円墳の定式とその評価」『考古学研究』32-4

宮川　渉　2000「築造企画の伝播からみた大王墳と地域の王墳」『古代学研究』150

和田晴吾　1981「日向市五塚原古墳の測量より」『王陵の比較研究』京都大学考古学研究室

南武蔵南部の横穴墓

—横浜・川崎地域—

田　村　良　照

はじめに
1．研究略史
2．分類
3．系譜と時期
4．分布
5．副葬品
6．被葬者像
7．横穴墓と火葬墓
おわりに

はじめに

筆者はかつて、川崎市内に所在する横穴墓群を調査したことを契機として、全国的にみても屈指の横穴墓分布地域である鶴見川から多摩川下流域にかけての横穴墓を対象として私見を披瀝したことがある（田村1986）。

当時は、東海地方最大の須恵器生産地である湖西古窯跡群の土器編年（後藤1989）が未確立であったことから、必然的に陶邑編年などに依拠せざるをえなくなり、研究の基礎をなす横穴墓の造営年代を明確にし得なかったことが思い出される。その意味では、湖西編年の確立が東国の横穴墓研究のみならず、七・八世紀の考古学研究に寄与した貢献度は多大なものがある。

このように湖西編年に加えて南関東各地の土器編年が整備されるにいたったことで、現在では横穴墓の造営年代がかなり明確におさえられるようになった。加えて、ここ10年で全国各地の横穴墓研究が活況を呈し、地域ごとに作成された資料集を参考にすることで、南武蔵の横穴墓の系譜をある程度色分けすることが出来るようになったと考える。

そこで、南武蔵における横穴墓研究の歩みと到達点をひろく県内外の研究者に認識していただくことを目的として本稿を起した次第である。

1．研究略史

南武蔵の横穴墓研究は明治20年、山崎直方が「橘樹郡大曽根太尾二村の横穴」すなわち現在の横浜市鶴見区大曽根町に所在する太尾神社横穴墓群を学会に紹介したことを嚆矢とする。ちょうど坪井正五郎が北武蔵の著名な吉見百穴を調査したのと同年のことであり、まさに日本の横穴墓研究の幕開けであった。

揺籃期の明治・大正年間には鶴見川下流域の岩瀬横穴墓群などが注目を集め、昭和になると同中流域の市ケ尾・小黒谷横穴墓群が石野瑛などによって調査研究された。

戦中・戦後は時勢を反映して活動は下火となるが、昭和28年に近森正によって川崎市金堀横穴墓群の調査報告書が刊行され、その４年後には横穴墓研究に市民権をあたえるきっかけとなった著名な市ケ尾横穴墓群の調査成果が甘粕健によってまとめられた。しかし忘れてならないのは、昭和30・31年に古江亮二を中心とした川崎市井田伊勢宮前横穴墓群・同金堀横穴墓群の発掘調査であろう。古江の指導のもとに郷土の歴史愛好家や教員そして高校生によってなされた発掘調査の成果は、ガリ版刷りの報告書２冊に集録され、今に伝えられている。その報告書には横穴墓や出土遺物の実測図が掲載されているが、時代背景を考慮すれば実に味わい深く、それまで学者に掌握されていた横穴墓研究が文字どおり市民権を得た記念すべき実績と、筆者は評価している。また同時期に川崎市の郷土史家・考古学研究者を会員とする高津図書館友の会によって、津田山丘陵に多数分布する横穴墓群の実態調査の成果が『たちばな18号』に報告され、南武蔵最大の密集地の一端が明らかにされた。

昭和40年代は高度成長の追い風を受け、東京のベッドタウン化を図る大規模開発がさかんに行われた。横浜市北部の港北区で、ニュータウン開発に伴う埋蔵文化財の調査が始まったのもこの時期である。

昭和50年代・60年代は調査件数・規模ともにピークに達し、横穴墓群全体を発掘した報告書が次々と刊行された。横浜市下根・天ケ谷横穴墓群、同市熊ヶ谷横穴墓群などが、その代表的なものである。また東原信行による鶴見川上流域に分布する横穴墓群の実態調査は、学問的にも、またその後の文化財保護という見地からも見逃すことは出来ない功績である。

この頃、大阪府陶邑古窯址群の報告書が刊行されたり、県内では在地土器の研究が活況を呈したことで、横穴墓の造営時期が推測できるようになったことから、横穴墓の消長をテーマにした論考がみられるようになる（池上1984、田村1986）。その後、南武蔵・相模地域で出土する大半の須恵器の供給地である静岡県の湖西古窯跡群における編年案（後藤1989）が提示されたことで、横穴墓の実年代が一層確固たるものとなり、この分野に清新な風を吹き込むことになった。さらに横穴墓の地域性に目を向けた論考が見られ出すのもこの時期からである。

平成年間になると経済の冷え込みから大規模開発は次第に下火となるが、そのなかで川崎市の久本横穴墓群や同市西前田横穴墓群から良好な土器資料が出土し、また後者の玄室棺座上より豊富な副葬品を伴った木棺が検出され衆目を集めた。

研究分野では、上田薫を中心にまとめられた『茨城県考古学協会シンポジュウム資料』が、県内の横穴墓のあり方を多角的に検討した最初の刊行物として評価される。また長年、川崎市で行政指導をするかたわら研究活動を続けてきた村田文夫は、古墳・横穴墓・火葬墓・古代寺院などを重層的に考究した『古代の南武蔵』を執筆し、それまでに累積された考古学的成果を総括するとともに、その後の研究方針を示唆された。火葬墓と横穴墓の関係については、長谷川厚と村田文夫の小論争が大変興味深い。さらに横穴墓内に描かれた線刻壁画や壁面に打ち込まれた吊金具に着目した村田文夫の一連の研究も見逃せない（村田1995・1996）。

2．分　類

横穴墓は五世紀後半に竪穴系横口式石室の影響を受けて成立したとされるが、後述するように、この墓制が南武蔵に本格的に導入されるのは六世紀後半、九州北部で発生してから約百年後のことである。この間に、横穴墓自体の変容と、横穴式石室からの波状的な影響を受けて多様な構造変化をとげていく。導入期に南武蔵でもいくつかの系統が見られるのは、このような背景によるのであろう。そして定着後にも変容は止むことなく続き、ついにはここで紹介するような本地域独自の構造も出現するのである。

〔単室構造〕

A類－玄室平面形が正方形あるいは長方形を呈し、初期のものはドーム天井であるが、時期が若干降ると前壁をもつアーチ天井のものも見られるようになる。本類には狭長な羨道の付くのが一般的である。また奥壁側に低棺座を敷設するものと無棺座のものがあり、中には造付石棺をもつＩ類や組合式石棺を内蔵するＬ類といった特殊な構造のものも存在する。

B類－玄室平面形が逆台形で、アーチ天井の構造。古式タイプには前壁をもつアーチ天井や狭長な羨道がみられるが、次第に形骸化していく。遺体安置施設はA類と同様。

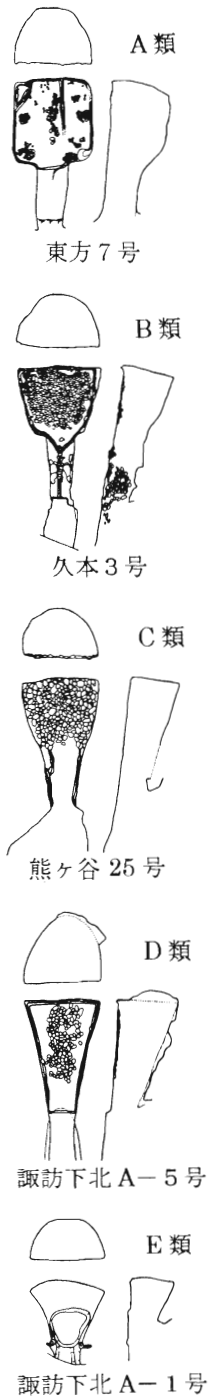
C類－前壁が退化したB類と考えてよいだろう。アーチ天井も玄室の羨道の区別がなくなり、せいぜい屈曲する程度に退化する。遺体安置施設は基本的にA・B類と同様であるが、組合式石棺は見られなくなり（注１）、造付石棺は形骸化が進行して本類の中でＪ類の高棺座に変容する。

D類－玄室と羨道の区別がなくなって両者が一体化した構造。一般的に「撥形」、「半裁徳利形」あるいは「フラスコ形」と呼称されている。無棺座のものと棺座を備えたものの二形態が存在し、後者には１ｍ前後の高棺座を付設したＫ類もある。

E類－奥行きのない小規模なD類と考えてよいだろう。遺体安置施設はD類と同様。

〔複室構造〕

F類－玄室は平面方形・ドーム天井の構造で、その前面に小規模な前室と狭長な羨道が設けられている。構造的にみて横穴式石室の影響のもとに成立したと考えられており、市ヶ尾Ｂ－16号墓以外に



第１図Ａ～Ｅ類

類例はない。

G類－撥形タイプのD類を三分割して玄室（奥室）・前室・羨道としたような構造であり、天井はアーチ状を呈する。区画部分には床面段差と框石設置溝が設けられている。南武蔵では中之橋２号墓・日向（ひなた）３号墓・早野横穴墓と図示した市ヶ尾A－６号墓の４例が確認されている。

H類－床面段差や框石設置溝が認められるなど、G類の退化形態と見てまちがいない。F・G類にくらべて類例は多く、またD類と親縁性の強い構造でもある。

〔造付石棺と高棺座〕

I類－A類横穴墓の奥壁にそって造付石棺が設けられている。「河内型」と呼ばれる南河内地方に特有な横穴墓の系譜を引くと考えられるが、天井構造などに若干の違いが認められる。

J類－C類横穴墓の奥壁側に有縁の高棺座が設けられている。天井はアーチ状を呈する。相模では数例確認されているが、南武蔵では新吉田四ッ家７号墓・真福寺２区２号墓と図示した中里１号墓の３例だけしか確認されていない（注２）。

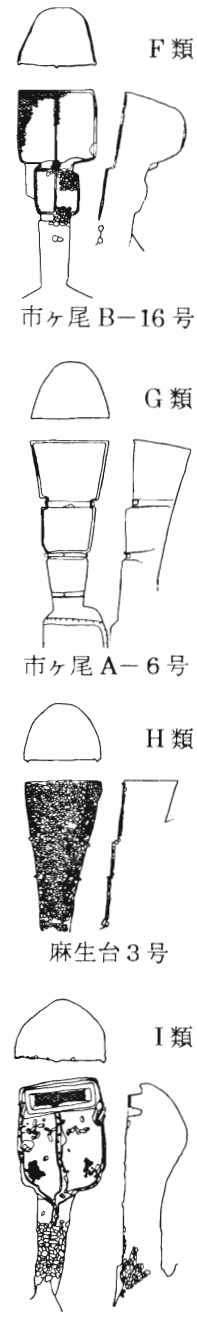
K類－「撥形」を呈する横穴墓の奥壁側に高さ１m内外の「高棺座」が設けられている。相模国鎌倉郡を中心として分布圏を形成することが解明されている（田村2000）。

〔特殊な横穴墓〕

L類－隅丸長方形平面・ドーム天井の玄室内に組合式石棺が置かれている。組合式石棺を内蔵する例は、南武蔵では図示した平瀬川隧道西際横穴墓の存在する川崎市の津田山丘陵にだけ分布し、現在までに浄元寺裏１号墓・平瀬川隧道際４号墓・同７号墓・同西横穴墓の４基が確認されている。

M類－方形平面・ドーム天井の玄室内に、側壁にそって２棺座が設けられている。このような構造の横穴墓は、図示した久地西前田２次３号墓が南武蔵では唯一の例である。

N類－玄室が長方形平面・家形天井を呈する構造を本類とした。その中で図示した荏子田（えこだ）横穴墓は、壁面に棟木や垂木・梁桁・側柱などが浮彫りに表現された希少例である。



第２図　F～I類

O類－逆台形平面で低平な家形天井を呈する玄室から、羨道そして墓道へと連絡する。最大の特徴は羨道床面よりも玄室床面が一段低くつくられている点にある。このような構造の横

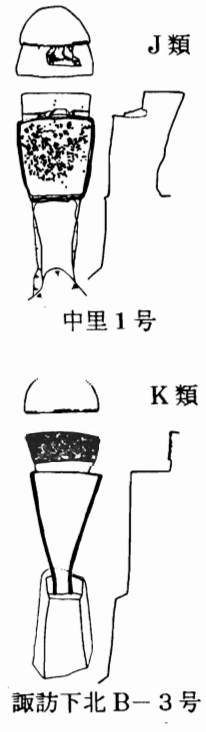
穴墓は図示した上谷本Ｂ１号墓と同２号墓以外に南武蔵はおろか南関東にもいっさい見当たらない。

類例は北九州の竹並横穴墓群中に見出すことができ、時期的にはTK47～MT15型式期に位置づけられている。したがって、上谷本Ｂ横穴墓群はこれまでとりたてて評価されることはなかったが、東国への横穴墓の伝播を考える上できわめて重要である。

Ｐ類－撥形平面・アーチ天井の玄室奥壁側に棺室がつくられている。棺室構造の横穴墓は相模国鎌倉郡を中心に多数分布することから、鎌倉郡内で成立した特有な構造と考えられる。南武蔵では、図示した矢上上ノ町Ｂ１号墓と夢見ヶ崎横穴墓の２例確認されているだけである。

Ｑ類－細長いトンネル状の構造。図示した久地西前田１次１号墓以外に１例存在するだけである。

以上、南武蔵に普遍的な単室構造と、複室構造、造付石棺から高棺座へ変化するタイプ、さらには南武蔵できわめて希少な横穴墓を選び出して紹介してみた。



第３図　Ｊ～Ｍ類

３．系譜と時期

横穴墓の形態は多種多様であり、分類することはたいへん難しい。あえて本稿ではＡ～Ｑ類にわけてみたが、必ずしも十分とは言い難いことは筆者自身が感じているところである。ここでは先の分類の中で、近年の研究成果から系譜のたどれるものに焦点をあて、その造営時期を示しておきたい。

〔南関東最古の横穴墓〕

横浜市上谷本第２地区Ａ・Ｂ横穴墓群を構成する４基は、南関東地方ではまったく類例を見出せない特異な構造の横穴墓である。報告書はすでに30年以上も前に刊行されていたにもかかわらず、一般的な認識の範疇外にある構造であったことに加えて、遺物が何等出土しなかったため等閑視されたまま現在にいたった。

構造的特徴は、第一に羨道床面が玄室床面よりも高いこと、第二に家形天井で側壁との境に軒状凸起が表現されていること、第三に通有の横穴墓に見られる敷石がいずれにも存在しないこと、などが挙げられる。

結論を急ぐならば、このような構造は、北九州豊前地域の竹並横穴墓群中の六世紀前葉（Ｔ

K47～MT15型式）に位置づけられる竹並A－3号墓・同A－10号墓などにたいへんよく似ている。今後見識者による検討を要するが、かりに筆者の見解が的中しているとすれば、北九州を発生地として東漸し、六世紀後半にいたって南関東へ導入されたとする従来の横穴墓伝播論に一石を投ずることになろう。

〔河内型横穴墓〕

玄室内に造付石棺を付設したⅠ類がこの系譜と考えられる。南武蔵・相模に見られる造付石棺内蔵の古式タイプは、天井や羨道の構造が必ずしも「河内型」と符合するわけではないが、消去法で検討するとやはりこの系譜に連なる横穴墓と判断せざるを得ない。管見では、南武蔵の西前田1次3号墓が安福寺南群18号墓に比較的よく似た構造のように思われる。

なお相模においては、造付石棺が変容して相模に特有の高棺座の出現することが論証されている（上田1989、田村2000）。資料は少ないが、南武蔵でもⅠ類→J類→K類という流れでその過程を追うことができる。

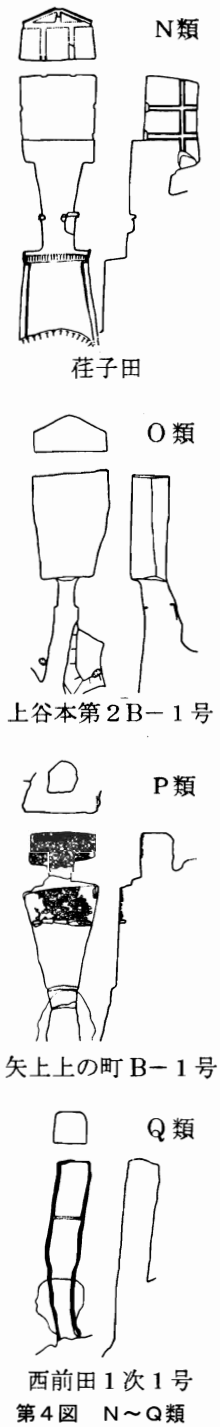
久本7号墓からこの類型としては最古の土器であるTK43～TK209型式の須恵器が出土している。したがって、畿内での盛行期（TK10型式）を過ぎたころに導入されたため故地の構造と若干異なると解釈すればとくに矛盾はないように思える。

〔組合式石棺〕

川崎市の津田山丘陵に4基確認されているだけである。系譜的には、遠江地方の菊川流域に分布するこの種の横穴墓と強い親縁性をもつと考えられている。南武蔵では造付石棺内蔵の横穴墓とほぼ同時期の六世紀後葉に出現する。

〔棺室構造〕

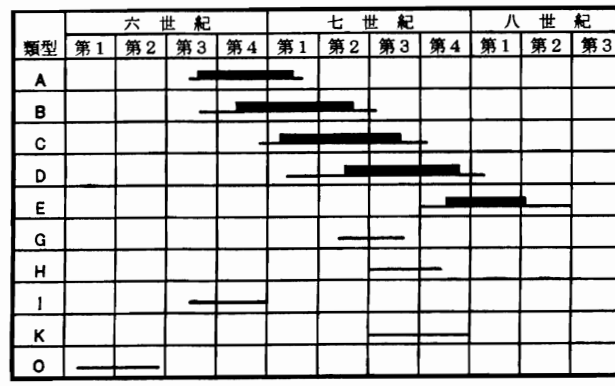
玄室奥壁に龕状の小室を設けた構造で、鎌倉郡北東部を中心として分布圏を形成している。他地域にほとんど類例を見出すことができないことから、七世紀第3四半期ごろに鎌倉郡内で考案された蓋然性が高いものと考える。なおこの構造の横穴墓は、敷石をもつ例が少なく、人骨の出土することも稀である。また規模的にも成人を伸展葬にて安置するだけの面積をもつ例はそれほど多くない。加えて、盛行する時期が七世紀後半～八世紀前葉であると見られることから、火葬骨収納を目的とした施設の可能性もある、という点も視野に入れて今後資料検討する必要があろう。



第4図　N～Q類

〔一般的構造〕

A類は玄室平面形が方形を基調とするといっても、方形あるいは縦・横長の長方形といったバラエティーをもつが、いずれも畿内・北九州に系譜をたどることができる。A類の形態が多様であるということは、裏返せば導入期にあたるためと考えてよい。それらはおおむね六世紀後葉～七世紀初頭（TK43～TK209型式）に位置づけられる。



第５図　各類型の造営時期

B類とした逆台形平面の横穴墓は従来A類の退化形と考えられていたが、西前田２次２号墓が六世紀後葉（TK43～TK209型式前半）に位置づけられることからすれば、予想以上に早く出現し、しかも定型化したかたちで他地域より導入された可能性も出てきた。

C・D・E類についてはB類の退化形と考えてよかろう。

４．分布状況

南武蔵の横穴墓分布を概観すると、きわめて偏在性のあることに気付く。この地域で現在までに、何らかのかたちで資料の残されている横穴墓群は100箇所余りに上るが、その約９割が北部の鶴見川流域から多摩川右岸に集中している。例外的に南端部の柏尾川水系の狛（いたち）川流域に濃密な分布圏が形成されているものの、この地域は古代の鎌倉郡の領域と考えられるので、分布図からも除外した次第である。

冒頭で述べたように、筆者はかつて川崎市間際根（まぎわね）・蟹ヶ谷・上作延横穴墓群を調査し報告書を作成した際に、はやくから先学諸兄によって指摘されていたこうした分布傾向について論及したことがあるが（田村1986）、その後の資料の蓄積はあってもこの傾向に大きな変化は認められない。しかし、鶴見川流域を中心に漠然と分布しているようにみえる横穴墓群も実は、濃密なところ、希薄なところ、さらには分布の確認されないところなど、ある程度の地域性、つまり第６図に示したような分布圏を形成しているのである。

①多摩川右岸地域

多摩川に注ぐ平瀬川北岸の通称長尾丘陵とその先端部の津田山丘陵に、一つの分布圏を認めることができる。とくに津田山丘陵はたかだか東西約1.5km、南北約500mの独立丘陵にもかかわらず、その山腹には18箇所の横穴墓群がところ狭しと群集し、分布密度では南武蔵随一をほこる。

この地域において現在までに検出された横穴墓は100基余りであるが、そのうち形態のわかるものは89基を数える。それらは必ずしも先の分類に符合するものばかりではないが、あえて近い類型にあてはめた場合、A類31基、B類27基、C類15基、D類５基、複室構造のG類２基、造付石棺内蔵のＩ類３基、組合式石棺内蔵のＬ類４基（１基は家形のＮ類にも該当する）、南武蔵で唯一の両側壁に棺座を設けたＰ類１基、Q類１基という内容である。

南武蔵にかぎらず相模でもＡ・Ｂ類は数が少なく、Ｃ・Ｄ類が過半数を占めるのが普遍的なあり方であるが、本地域は古式のＡ・Ｂ類が圧倒的に多い。つまり、六世紀後葉～七世紀前葉の出現期から定着期にかけて盛んに造墓されるが、一般的な盛行期である七世紀中葉～後葉には下火となるのである。また、遠江や河内さらには九州北部に故地の求められるＩ・Ｌ・Ｍ類が比較的多く見られるのも、本地域が初現期における中心地であったことを物語っているのであろう。

②矢上川上流域

川崎市中央部を東流したのち、南下して鶴見川本流へと合流する矢上川上流域に小分布圏が形成されている。ちなみに、この地域には橘樹郡の郡寺と目されている古刹影向寺（ようごうじ）が存在し、その近郷に郡衙の存在が有力視されている。

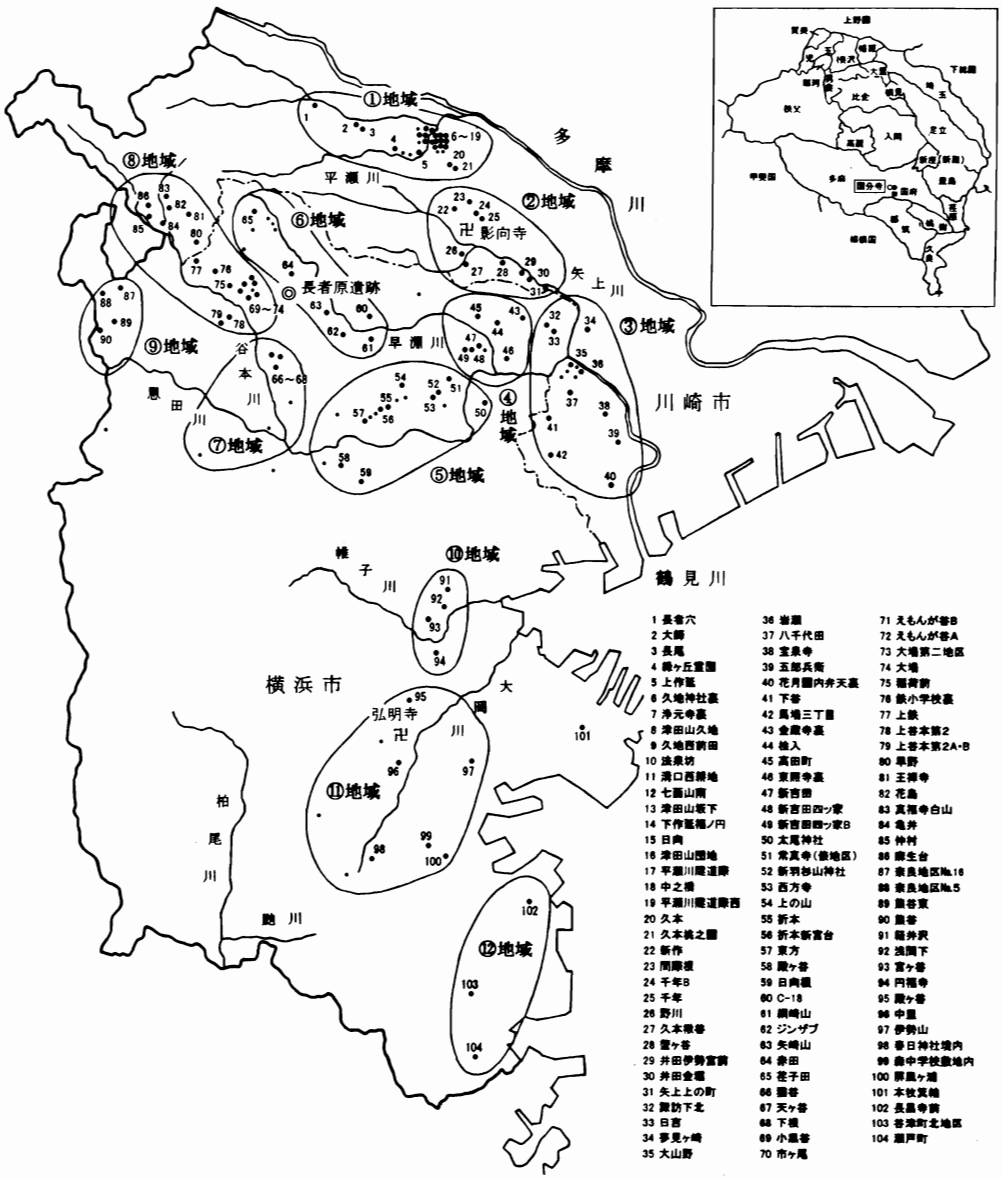
現在までに10横穴墓群が確認されており、そのうち間際根（まぎわね）・蟹ヶ谷・楸谷（ひさぎだに）・千年（ちとせ）Ｂ・伊勢宮・金堀・矢上上ノ町横穴墓群が調査報告されている。構造のわかる23基を分類すると、Ａ類９基、Ｂ類５基、Ｃ類３基、Ｄ類５基、Ｅ類１基という内訳となり、Ａ・Ｂ類といった古式のタイプが多く、①地域と似たような傾向を示している。しかし、①地域では新しいタイプのＣ・Ｄ類はほとんど認められなかったのに対し、本地域では一定の割合で存在し、かつ最終末の形態であるＥ類も１基存在するなど、①地域に比べれば新しい様相がうかがえる。

③矢上川下流域

矢上川と鶴見川本流との合流点付近に15箇所の分布が知られており、そのうち諏訪下北・夢見ヶ崎・八千代田・馬場三丁目横穴墓群が報告されている。形態のわかるものは16基あり、Ａ類１基、Ｂ類１基、Ｄ類５基、Ｅ類１基と、高棺座の付設されたＫ類７基、棺室のあるＰ類１基という内容で、七世紀後半以降の横穴墓が大半を占め、①・②地域とはだいぶ様相が異なる。また高棺座や棺室をもつ横穴墓が本地域にきわだって分布している点は興味深く、この種の横穴墓の故地である相模国鎌倉郡との人的交流が想定される。

④早淵川下流域

早淵川が鶴見川（谷本川）と合流する附近に６箇所の分布が確認されている。その中で、高田町・新吉田四ッ家・新吉田四ッ家Ｂ横穴墓群が報告され、合計10基の構造が判明している。その内訳はＡ類４基、Ｃ類２基、Ｄ類２基、退化した複室構造のＨ類１基、高棺座のＪ類１基というもので、古式のものから比較的新しい時期のものまでほぼ均一に認められる。その中で新吉田四ッ家７号横穴墓は、構造的にＪ類でも最古のものと考えられる。



第６図　横穴墓分布図

⑤鶴見川中流域

鶴見川が大きく北に蛇行する折本から新羽にかけての地域に15箇所の分布が知られている。その中で調査・報告されている常真寺・上の山・折本新宮台・東方（ひがしかた）横穴墓群などで18基の構造が把握されている。その内訳はＡ類７基、Ｂ類７基、Ｃ類４基、Ｅ類１基というもので、六世紀後葉～七世紀前葉にかけての古式の横穴墓が過半数を占めているのが特徴である。

⑥早淵川上中流域

11箇所の横穴墓群が知られている。その中で報告されているのは荏子田（えこだ）横穴墓とC-18横穴墓群だけであるが、すでに発掘調査が実施され大規模に展開することの判明している矢崎・綱崎山・赤田横穴墓群の報告書刊行に期待がかかる。現状では８基の構造が明らかで、Ｂ類１基、Ｃ類３基、Ｄ類２基、Ｅ類１基と家形のＮ類１基という内容であり、Ａ類が見られない上に最終末期のＥ類が存在するなど、比較的新しい時期の横穴墓が多い地域と言えそうだ。

⑦谷本川（鶴見川本流）と恩田川の合流点付近

７箇所の横穴墓群によって小分布圏が形成されている。その中で⑧地域に寄ったところに位置する天ヶ谷・下根横穴墓群の発掘調査で11基の構造があきらかになっており、Ｂ類１基、Ｃ類２基、Ｅ類1基、退化した複室構造のＨ類６基、古式高棺座のＪ類１基という内訳である。この２横穴墓群に限ってのことかもしれないが、Ｄ類がまったく見られず、かわってＤ類と時期・構造において親縁性の強いＨ類がきわだっている。全体としてはＡ類が欠如する一方、Ｅ類が存在するなど、比較的新しい時期の横穴墓が目立つ地域といえよう。

⑧谷本川中・下流域

谷本川下流の市ケ尾周辺から町田市境にかけての範囲に19箇所の横穴墓群が分布している。加えて中流域では対岸の町田市側にも４箇所分布することが知られており、南武蔵では①地区に次ぐ大分布圏が形成されている。この地域には著名な市ケ尾横穴墓群や稲荷前古墳群が存在することから、学会においてはやくから注目されていたことも幸いし、下流域では市ケ尾・小黒谷・大場・稲荷前・上谷本第２・上谷本第２Ａ・Ｂなど６横穴墓群、中流域では早野・麻生台の２横穴墓群の発掘調査が実施され、報告書も刊行されている。さらに王禅寺・花島・真福寺白山・亀井・仲村の５横穴墓群は実態調査がなされ、ある程度の様相が判明している。

構造的には、Ａ類３基、Ｂ類10基、Ｃ類20基、Ｄ類10基、Ｅ類１基、複室構造のＦ類２基、Ｇ類４基、Ｈ類２基、古式高棺座のＪ類１基、家形天井で羨道床面が玄室のそれよりも一段高い構造のＯ類２基、さらにトンネル状を呈するＱ類１基という内容で、実に多種多様である。すでに述べたように、南関東最古の可能性が高いＯ類や複室構造のＦ類の存在は光彩を放っており、また古式高棺座のＪ類の存在も看過できない。

一般的構造ではＢ類・Ｃ類が多いことから、六世紀末～七世紀中葉にかけて盛行した地域であることがわかる。

⑨恩田川中流域

左岸に、奈良地区№５・同№16・熊ヶ谷東・熊ヶ谷の４横穴墓群が分布し、いずれも発掘調査後すみやかに報告書が刊行されている。

25基の構造が判明しており、Ａ類１基、Ｂ類１基、Ｃ類11基、Ｄ類12基という内容から七世紀中葉～後半にかけて盛行期があるようだ。

⑩～⑫横浜市南部

帷子（かたびら）川流域に４箇所、大岡川流域に９箇所、海岸部に４箇所の計17横穴墓群が周知されているが、発掘調査の実施されたのは浅間下・中里・長昌寺前・谷津町北地区・瀬戸町の５横穴墓群だけである。14基の構造が明らかで、Ａ類３基、Ｂ類３基、Ｃ類５基、Ｄ類２基、古式高棺座Ｊ類１基という内容であり、七世紀前半～中葉に盛期を迎える様相がうかがえる。またＪ類が見られるのは鎌倉郡に近いという地理的要因によろう。

〔郡衙と横穴墓分布〕

第６図右上に南武蔵六郡の想定図を貼付した（注３）。本稿で対象とした南武蔵南部（都筑・橘樹・久良）について横穴墓分布図と対比すれば、まず国境は帷子川・大岡川と柏尾川の分水嶺にそった位置に定められており、横浜市側にだいぶ食い込んでいることがわかる。したがって柏尾川水系の独（いたち）川流域に濃密に分布する横穴墓群は相模国鎌倉郡に帰属することになる。この点は構造や分布のあり方を検討した拙稿によって実証ずみである（田村2000）。また都筑郡と橘樹郡の郡境はほぼ④地域と⑤地域の間に想定されている。

南武蔵南部では横穴墓の造営期にあたる七世紀に都筑・橘樹・久良の３郡が設けられていたとされるが、都筑郡衙跡と想定される長者原遺跡の発見、橘樹郡の郡寺と目される影向寺の総合調査と周辺での郡衙関連遺跡の発見、さらには神奈川県考古学会の企画による「かながわの古代寺院」の検討（岡本・伊丹2001）をへて郡衙・郡寺の実相が一層鮮明になってきた。
そこで横穴墓分布図に長者原遺跡と影向寺、および久良郡衙との関連が指摘される弘明寺（ぐみょうじ）を印してみた。

以上の点を踏まえると、南武蔵の横穴墓群は各郡衙を中心に分布圏を形成しているように見受けられる。そして３郡を比較すれば、都筑・橘樹郡は横穴墓の造営が盛んであったが、久良郡は積極的であったとは言い難い状況が看取できる。ちなみに南接する鎌倉郡や三浦郡は相模でも卓越した横穴墓分布域であることを勘案すると、こうした横穴墓造営のさかんな地域に囲まれて、一人希薄な状況のうかがえる久良郡の存在に歴史的背景の複雑さを思料させられる。

５．副葬品

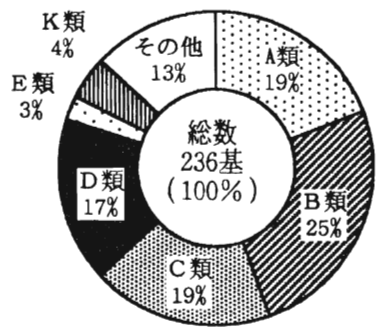
南武蔵の横穴墓の中には、同時期の中小古墳と同等の副葬品をもつ例が少なからず存在する。例えば、玉類・耳環・釧などの装身具、直刀・鏃などの武器類、そして須恵器・土師器などの供献土器といったものがその代表的なものであり、なかには頭椎太刀（平瀬川隧道際西横穴墓）、銀象嵌太刀（久本３号墓）、銅鋺（浄元寺裏１号墓・日向３号墓）、埴輪（津田山久地西５号墓・井田金堀２号墓）などの出土例も報告されている。

第６図は南武蔵の横穴墓から出土した副葬品のあり方を具体的にする意味で集成を試みたものである。対象とした横穴墓は基本的に構造がある程度把握できるもの、すなわち形態分類可

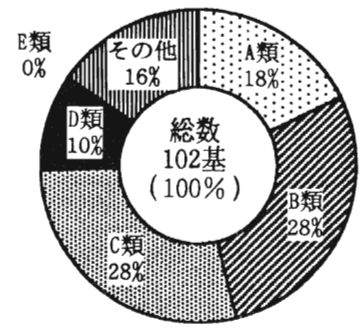
能なものに限ったが、横穴墓が未開口か否かという点に関しては拘泥していない。したがってなかには盗掘後に長期間開口していて、主要な副葬品が持ち去られたと思われるような横穴墓も含まれている。

品目別に見ると、須恵器・土師器・直刀・鉄鏃・刀子・玉類・耳環などが全体（102基）の３～５割の横穴墓から出土しており、主要品目といえる。その他には石製紡錘車４点、砥石と埴輪が各２点、銅鋺と銅釧が各１点という内容である（注４）。客体的な副葬品の中では、例えばA類や造付石棺内蔵のⅠ類といった六世紀後葉～七世紀初頭の古式横穴墓に限って石製紡錘車が出土しているなど、時期ごとの副葬傾向を垣間見ることができる。

南武蔵では236基の横穴墓が先の形態分類にあてはまり、そのうち102基に副葬品が伴う。すなわち約44%（102基÷236基）が副葬品をもっており、これが全体の保有率ということになる。それではこの全体保有率を基準として各類型のあり方を比較してみよう。一般的構造のA～E



形態比率



副葬品保有率

類型	横穴(全体)	横穴(副葬品)	須恵器	土師器	直刀	鉄鏃	刀子	玉類	耳環	紡錘車	砥石	埴輪	銅釧	銅鋺
A	45 (19%)	18 (18%)	3	7	12	10	3	5	0	1		2		
B	60 (25%)	29 (28%)	11	11	14	12	7	9	15		2		1	
C	44 (19%)	29 (28%)	11	6	7	6	7	9	10					
D	40 (17%)	10 (10%)	4	2	2	7	4	2	2					
E	6 (2.5%)	0												
F	2	0												
G	3	4	1	1	2	3	3	3	2					1
H	6 (2.5%)	2		1	1	1	1	1	1					
I	4	4	2	1	3	3	2	1	2	3				
J	2	0												
K	10 (4%)	1	1					1						
L	2	4			3	3		1	1					
M	1	1			1	1	1	1	1					
N	4	0												
O	2	0												
P	2	0												
Q	3	0												
計	236 (100%)	102 (100%)	33	29	45	46	28	32	34	4	2	2	1	1

単位：基

第７図　形態比率と副葬品集計

類では、A・B類が40%代でほぼ基準に近い値を示すが、C類は65%、D類は25%、E類は0%という結果である。これを単純に受け止めれば、七世紀前半～中葉の横穴墓が最も多くの副葬品を保有し、七世紀後葉になるにつれて次第に減少傾向を示し、八世紀前半の造営が想定されるE類にいたってはまったく認められなくなると理解できる。より詳細にみるならば、D類の盛行する七世紀第4四半期になると副葬品はほとんど認められなくなるようだ。要約すれば、南武蔵では七世紀中葉に副葬習慣転換の兆しが見え出し、第3四半期の中で次第に浸透し、第4四半期には横穴墓に副葬品を納める習慣がほぼ途絶えるということを示していると考えられる。

南関東地方の横穴墓から出土する副葬品の変化に着目した研究者の一人に鈴木敏弘がいる。氏の見解によれば、七世紀第3・4四半期の境頃に急速に副葬習慣が衰退し、その背景に中央からの規制（政策）があったとされる（鈴木1995）。中央からの規制の有無にまでは言及しえないが、南武蔵でも確かに七世紀第3四半期を中心とした時期に副葬習慣の画期を想定できそうだ。ちなみに筆者が検討した相模では、七世紀前半の中で変化が生じ、同中葉にいたって顕在化する。そして主要な副葬品の一つである玉類は、未開口の横穴墓でさえも首飾りや腕飾りにするだけの数が七世紀第3四半期になると出土しなくなり、実用的なものから象徴的なものへと変質する過程がうかがえる。したがって副葬習慣衰退の背景には、政治的規制とともに葬送観念自体の変化も視野に入れておく必要があるだろう。

畿内では耳環や須恵器の副葬は七世紀中葉まで続く（広瀬2000）とされるから、後期古墳文化を象徴する副葬習慣の変化は七世紀第3四半期ごろに列島規模で顕在化する現象であることは疑いない。

6．被葬者像

〔研究史〕

横穴墓研究の先進地の一つである南武蔵・相模地域では、戦後の復興期を経て考古学研究が再びさかんになる昭和30年ごろから、この課題に取り組んだ論考が見られるようになる。ここではそれらを逐一とりあげることはできないので、昭和60年ごろまでに集積された考古資料や有力な論考から被葬者像を絞り込んだ竹石健二の見解（竹石1986）を参考にすると、横穴墓にはつぎのような人々が葬られたと考えられる。

a．古墳の被葬者より低い階層とする見解
b．家父長制的世帯共同体の構成員とする見解
c．郡司・里長・戸長などとする見解
d．族長または具体的氏族の構成員とする見解
e．特殊技術者集団の構成員とする見解

これらの説はとくに有力に支持するものがない一方、否定もできない。ということは裏返せば、横穴墓の被葬者は古墳被葬者よりは下位であるが一般庶民ではない、つまり一定の階層を構成し、しかも多様な系統・職掌にあった人々であったことを物語っていると考えられる。したがって今後の研究の進展をみたとしても、被葬者像を逐一つまびらかにすることは困難であろう。それでも近年、横穴墓の地域性すなわち系譜が次第に明らかになってきたことで、この方面から被葬者像の一端を想定することができるようになった。その好例がつぎに述べる「河内型」とその被葬者である。

〔河内型横穴墓とその被葬者〕

近時、横穴墓研究が全国的な規模でなされるようになったことにより、各地に特有の横穴墓のあることが広く知られるようになった。たとえば、九州の「肥後型」、山陰の「意宇(おう)型」あるいは畿内の「河内型」などがその代表的なものである。こうした情報を念頭において南武蔵・相模地方の横穴墓を見てゆくと、他地域に故地の求められる構造の横穴墓が少なからず分布することがわかる。本稿でもすでにそのいくつかを紹介したが、それらは出現期の六世紀後半に確認され、大半は定着することなく短期間で姿を消すなかで、「河内型」だけは同時多発的に出現し、その後も存続し独自の発展をとげるのである。

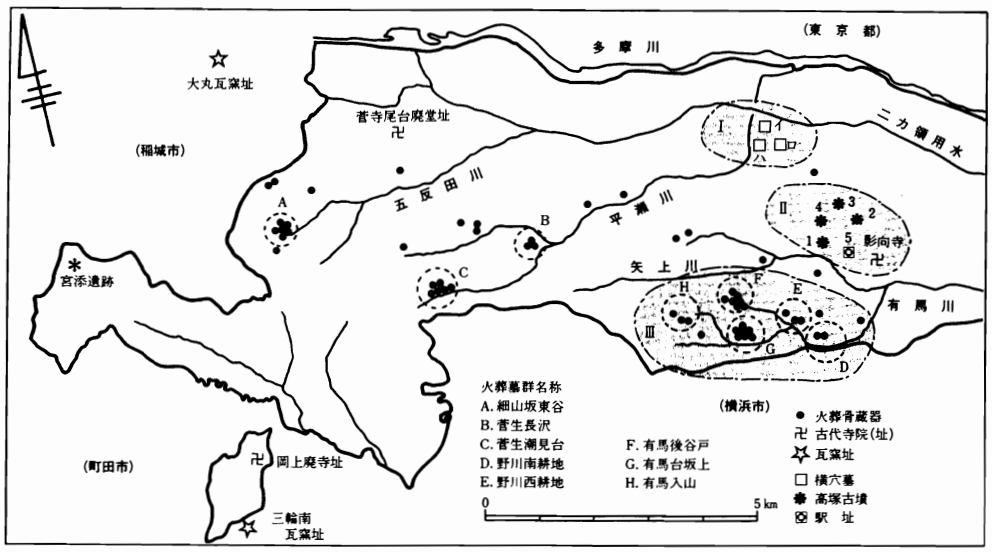
「河内型」横穴墓は矩形玄室内に造付石棺を内蔵することを最大の特徴とするもので、六世紀ごろ河内に居住していた渡来系氏族の墓域として高井田横穴墓群や安福寺横穴墓群が形成されるが、それらの中で主体的につくられた構造の横穴墓であった。このタイプは東海地方や南関東地方などに散見され、なかでも南関東の南武蔵・相模・上総地域に多数分布することが知られている。つまり考古学的成果から、南関東各地に河内出身あるいはその一族とみられる渡来系氏族の入植したことをある程度想定することができるのである。

文献史学の方面において、『続日本紀』神護景雲二年（768）の条から河内国安宿(あすか)郡出身と考えられる飛鳥部吉志五百国という人物が武蔵国橘樹郡に居住していたことが知られていたが、加えて近年、茅ヶ崎市居村Ｂ遺跡出土の木簡によって相模川西岸にも飛鳥部吉志や春日（春日部）氏のいたことが明らかになった。それらの文字資料はどちらも八世紀のものであるが、六・七世紀にさかのぼって河内出身の渡来系氏族が南関東に移入した公算は大きく、彼らの奥津城が河内型横穴墓であったとする須藤智夫氏の見解（須藤1995）はかなり信憑性が高いと筆者は考えるのである（注５）。

このように考古学と文献史学の両分野から得られた資料を結びつけることで、南関東でも横穴墓の被葬者像の一端がかなり鮮明になってきたように思える。

７．横穴墓と火葬墓

南武蔵では終末期古墳の資料が不足がちであるため、畿内の高安山墳墓群に見られるような



イ．久地浄元寺横穴墓（銅椀） ロ．下作延日向横穴墓（銅椀 ハ．平瀬川ずい道際横穴墓（頭椎太刀）
1．馬絹古墳　2．西福寺古墳 3．法界塚　4．宮崎大塚　5．推定小高駅址

第８図　火葬骨蔵器・寺院址・横穴墓・高塚古墳等等関連図（村田・増子1990より転載）

古墳からか火葬墓へと段階的に移行する好例は挙げられない（注６）。したがって必然的に横穴墓と火葬墓との関係に関心が集まるのだが、幸いなことに南武蔵の中で現在の川崎市にあたる橘樹郡には、古代の火葬墓が多数分布することで早くから注目されていた。一方、この地域に横穴墓が濃密に分布することはこれまで見てきたとおりである。

このような歴史的環境はいかに生じたのか、つまり両墓制の関係についてはじめて本格的に論じたのが村田文夫・増子章二であった。両氏は農作業中に突発的に発見され、そのまま収蔵庫に眠っていた資料を整理検討し、この地域の火葬墓研究に先鞭をつけた（村田・増子1980）。

その成果を踏まえて、古墳・横穴墓と火葬墓の関係について論及したのが長谷川厚であった。氏はこの地域の横穴墓に銅鋺の見られる点に着目し、被葬者の中には中央政権が支配層と認知するほどの階層が含まれていたと主張した。さらに、横穴墓と火葬墓という二つの異なった墓制が八世紀前葉でリンクすると考え、それらの要素をもって横穴墓被葬者の一部の階層が初期火葬墓の被葬者になったと論じた（長谷川1987）。

これに対して村田・増子は、先の資料を研究者のすべてが共有できるようにつぶさに紹介した上で、総合的考察を試みた。その論旨は第８図に示されたように、橘樹郡内における古墳（Ⅱ地域）・横穴墓（Ⅰ地域）・火葬墓（Ⅲ地域）の分布域は決して重なっていない点を強調し、長谷川の見解には無理があるというものであった。また影向寺（推定．橘樹寺）を建立したのはⅡ地域を分布圏とする主要古墳の被葬者の後裔であって、火葬墓の被葬者やその一族ではないとしている（村田・増子1990）。

第６図と第８図を比較すると、確かに火葬墓はそれまで古墳・横穴墓の空白地であった矢上

川と有馬川に挟まれたところを選んで造営されたように見受けられる。しかし、それでは古墳・横穴墓の被葬者の後裔は八世紀以降にどんな墓をつくったのかという素朴な疑問が生じてくる。筆者は確たる自説を持たないので暗に疑義を提示するだけであるが、この論争が続き、近い将来に光明の射すことを期待したい。

その後の研究の動向は、神奈川県考古学会の企画による講座「かながわの古代寺院址」の成果から、南武蔵・相模では七世紀第４四半期～八世紀第１四半期に、郡を単位とする範囲に古代寺院の創建されることがわかってきた。また相模では、大磯町後谷原(あとやはら)横穴墓群や藤沢市森久(もりきゅう)横穴墓群の資料から、八世紀中葉までに横穴墓の機能が完全に停止することが明らかになった。さらには、六～八世紀をとおして渡来系氏族が常に見え隠れしている点も注意を引く。

このように、村田・長谷川の論争以降も徐々にではあるが、両墓制の関係を解明するヒントが出てきており、今後の研究の進展に興味が持たれる。

おわりに

六世紀前半に起こったとされる武蔵国造の争乱後、大和政権は本格的に東国経営にのり出し、その一施策として南武蔵に屯倉を設置し、管掌者・技術者として渡来系氏族を移住させ、その結果横穴墓という新来の墓制が将来されたと、森田悌をはじめとする古代史家の多くは考えている（森田1992)。しかし集積された考古学資料を分析すると、古代史家の学説には考古学的成果を十分に理解していない節が見受けられる。こう言ってしまうと、古代史家が自説を優位に導くために資料を牽強付会しているという図式に写ってしまうが、実はそうではなく、考古学研究者側からの正確な情報発信が不十分なため、古代史家に誤解を与えてしまっているというのが真実であろう。

こうした思い入れが深層にあって本稿を起こしたわけであるが、なにぶん浅学故、抱いていたほどの内容とはなり得なかったが、17年ぶりに南武蔵の横穴墓について研究の到達点を私見を交えて紹介した次第である。なお、明治20年に始まる南武蔵の横穴墓研究の足跡を本稿末尾に集成してみた。見落としもあろうとは思うが、研究活動の一助になれば望外の喜びである。

最後に、本稿を執筆するにあたり滝澤亮氏には大変お世話になり、また妹尾周三氏からは有益な御教示をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。

注

1．組合式石棺内蔵の浄元寺裏１号墓はＣ・Ｄ類の可能性もあるが、形状がはっきりしないので除外して考えた。なおこの横穴墓からは銅鋺が出土している。
2．新吉田四ッ家７号墓はＡ類に高棺座の付設された構造で、高棺座をもつタイプとしては南武蔵最古に位置付けられる。
3．村田文夫　1993『古代の南武蔵』の155頁の図を転載させていただきました。

4．銅鋺出土の浄元寺裏１号墓は横穴前半部を失い形状がはっきりしない。また銅鏡出土の軽井沢横穴墓も筆者自身が実態を把握し得なかった。したがって、この２横穴墓は副葬品集計表に掲載してない。

5．居村Ｂ遺跡に近い寒川町越の山横穴墓群には、六世紀後葉に遡る造付石棺内蔵の横穴墓が検出されている。またこの地域には七世紀後半の建立が想定される下寺尾廃寺が存在し、さらに郡の役所の存在も想定されている（岡本2001）。

6．高安山墳墓群ではまず七世紀後半～末に磚槨を埋葬施設とする方墳が築かれる。ついで奈良時代前半には墓誌や皇朝十二銭を納めた方形区画の土坑墓がつくられ、そしてついには火葬墓にかわり、その後十世紀まで蜒々と続けられる。被葬者については官僚層のような人物と考えられている（河上1996）。

引用・参考文献

甘粕　健　1957　「横浜市市ケ尾遺跡群調査の概況」『私たちの考古学』12　考古学研究会
荒井秀規　1990　「古代相模の渡来人と帰化人」『三浦古文化』第48号　三浦古文化研究会他
池上　悟　1980　「横穴墓」『考古学ライブラリー』６　ニュー・サイエンス社
池上　悟　2000　「日本の横穴墓」『考古学選書』　雄山閣
上田　薫　1989　「高棺座について」『神奈川考古』第25号
大分県考古学会　1991　「特集　日本の考古学」『おおいた考古』第４集
神奈川県考古学会　2001　「かながわの古代寺院」『考古学講座』
河上邦彦　1996　「飛鳥の古墳」『飛鳥学総論』　人文書院
神澤勇一　1989　「大磯丘陵横穴墳墓群(1)」神奈川県立博物館　第18号
九州古墳文化研究会　2001　『九州の横穴墓と地下式横穴墓』
後藤健一　1989　「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡』　湖西市教育委員会
杉山晋作　2000　「古代東国における渡来系集団」『考古学ジャーナル』№459　ニュー・サイエンス社
鈴木敏弘　1995　「東国古墳の終焉と横穴墓」『和考研究』第３集
須藤智夫　1995　「古墳時代相模における在地社会の一様相」『考古学の世界』第10号　学習院考古会
竹石健二　1986　「横穴墓の被葬者」『季刊考古学』第16号　雄山閣出版
田村良照　2000･2001　「相模の横穴墓（1）（2）（3）」『湘南考古学同好会会報』第80号、第83号、第84号
戸田和美　2001　『東海の横穴墓』　静岡県考古学シンポジウム2000
寺田兼方　1996　『藤沢市川名森久地区埋蔵文化財発掘調査書』
富永富士夫　1989　『居村「放生木簡」シンポジュウムの記録』神奈川地域史研究会
長谷川　厚　1983・1987　「歴史時代墳墓の成立と展開（1）（2）」『古代』第75・76合弁号、84号　早稲田大学考古学会
花田勝広　1990　「河内の横穴墓」『考古学論集』第３集　考古学を学ぶ会
広瀬和夫　2000　「特集　副葬を通してみた社会の変化」『季刊　考古学』第70号　雄山閣
古川一明　1996　「北辺に分布する横穴墓について」『考古学と遺跡の保護』甘粕健退官記念論集刊行会
水野正好　1989　「河内飛鳥と漢・韓人の墳墓」『古代を考える　河内飛鳥』　吉川弘文館
村田文夫・増子章二　1989・1990　「南武蔵における古代火葬骨蔵器の基礎的研究(上)･(下)」『川崎市民ミュージアム紀要』第２・３集
村田文夫　1995　「横穴式石室・横穴墓内を垂下する布帛」『みちのく発掘』菅原文也先生還暦記念論集
森田　悌　1992　『古代東国と大和政権』　新人物往来者
山尾幸久　1989　「河内飛鳥と渡来氏族」『古代を考える　河内飛鳥』　吉川弘文館

南武蔵の横穴墓関連資料

1	山崎直方	1887	「武蔵橘樹郡大曽根太尾二村の横穴」	東京人類学会雑誌　第21号
2	阿部正功	1894	「武蔵ニ於ケル貝塚・横穴・其他遺跡地名表」	東京人類学会雑誌　第96号
3	八木奘三郎	1900	「雑録（154）」	東京人類学会雑誌　第170号
4	大野延太郎	1908	「武蔵国駒岡新発見の横穴」	考古界　第７編第８号
5	和田千吉	1909	「武蔵国駒岡の古墳発掘」	考古界　第８編第６号
6	小松真一	1922	「武蔵国南部の横穴群に就いて」	人類学雑誌　第37巻第６号
7	石野　瑛	1924	『武相の古代文化』	
8	石野　瑛	1926	「横浜及び付近の古墳と横穴」	考古学雑誌　第16巻第２号
9	大野延太郎	1926	「武蔵国駒岡の横穴に就いて」	武蔵野　第８巻１号
10	八幡一郎	1926	「鶴見花月園内に発見された横穴」	武蔵野　第８巻３号
11	谷川磐雄	1927	「家形彫刻を有する横穴」	考古学雑誌　第17巻第１号
12	高橋光蔵	1928	「神奈川県都筑郡山内村石川の家形彫刻を有する横穴」	史蹟名勝天然記念物　第３巻第７号
13	白井光太郎	1932	「武蔵国久良郡石川中村穴居記」	ドルメン　６（９月号）
14	石野　瑛	1933	「武蔵国都筑郡中里村市ヶ尾横穴群調査報告」	考古学雑誌　第23巻第７号
15	江坂輝弥	1942	「旧神奈川県山内村荏田・小黒谷横穴古墳群調査略報」	民族文化　第４巻第２号
16	近森　正	1953	「金掘山横穴古墳発掘報告」	Archaeology　18号
17	古江亮二ほか	1955	『川崎市井田伊勢宮前横穴群調査記』	川崎市教育委員会、市立川崎・橘高校
18	佐藤善一	1956	「横浜市元石川下谷横穴古墳」	国大考古学会会報　43号
19	古江亮二ほか	1956	『川崎市井田伊勢宮金掘横穴群第７号穴調査書』	川崎市教育委員会・市立橘高校
20	甘粕　健	1957	「横浜市市ヶ尾遺跡群調査の概況」	私たちの考古学　第３巻第４号
21	高津図書館友の会	1957	「津田山久地横穴古墳群清掃調査」	たちばな　第18号
22	岡田清子	1957	「古代東国の一村落－横浜市港北区市ヶ尾遺跡の発掘」	歴史地理教育　23号
23	石野　瑛	1957	「横浜市折本横穴墓群」	日本考古学年報　第５号
24	坂詰秀一	1957	「横浜市港北区東方の横穴」	立正考古　11・12号
25	甘粕　健	1958	『横浜市史』　第１巻	
26	石野　瑛	1958	「横浜市磯子区森町（離山）蛇山横穴群	日本考古学年報　第７号
27	二戸芳雄	1960	「川崎市・新作の横穴古墳」	立正考古　15号
28	石野　瑛	1961	「横浜市元石川町荏子田かんかん穴横穴」	日本考古学年報　第９号
29	石野　瑛	1961	「横浜市港北区市ヶ尾横穴Ｃ群」	日本考古学年報　第９号
30	後藤守一	1961	「多摩丘陵地域における古墳及び横穴の調査」	東京都文化財調査報告書　10号
31	二戸芳雄	1961	「横浜市港北区元石川の横穴」	立正考古　17号
32	和島誠一	1961	「神奈川県横浜市港北区市ヶ尾遺跡群」	日本考古学年報　第９号
33	石野　瑛	1962	「神奈川県横浜市浅間神社境内横穴群」	日本考古学年報　第11号
34	二戸芳雄	1962	「川崎市新作に於ける横穴」	立正考古　20号
35	村田文夫	1962	「横浜市港北区元石川の横穴古墳群」	立正考古　21号
36	新井　清	1962	「川崎市下作延中之橋横穴群発掘調査報告」	
37	新井　清	1963	「川崎市下作延津田山附近に於ける石棺を伴う横穴の発見について」	たちばな　第27号
38	宮島　操	1964	「川崎市下作延津田山坂下横穴古墳群発掘調査報告」	高津郷土資料集　第２篇
39	清水潤三	1966	「神奈川県横浜市日吉横穴」	日本考古学年報　第14号
40	高津図書館友の会	1966	「川崎市津田山横穴群概要」	考古たちばな第５・６合弁号

41 伊東秀吉 1966 「川崎市下作延日向高横穴古墳調査報告」 川崎市文化財集録 第２集

42 岡本・小宮 1968 「稲荷前古墳群の発掘調査概要」 昭和42年度横浜市域北部埋蔵文化財調査報告書

43 岡本 勇ほか 1968 「朝光寺原Ａ地区遺跡第１次発掘調査略報」 横浜市北部埋蔵文化財調査委員会

44 赤星直忠 1970 「神奈川県における横穴古墳の線刻壁画」 考古学ジャーナル48号

45 伊東秀吉 1970 「川崎市生田・長者穴横穴古墳調査報告」 川崎市文化財集録 第５集

46 釜口・佐藤 1971 『上谷本第２地区（横穴古墳群）調査報告書』 横浜市埋蔵文化財調査委員会

47 合田芳正ほか 1971 『上谷本第２遺跡Ａ地区・Ｂ地区発掘調査概報』 中央大学考古学研究会

48 佐藤・井上 1971 「横浜市港北区高田町遺跡調査報告」 昭和45年度横浜市埋蔵文化財調査報告書（２）

49 井上義弘 1971 「横浜市金沢区富岡町長昌寺前横穴群発掘調査報告」 横浜市埋蔵文化財調査報告Ⅲ

50 神沢勇一 1971 「森中学校敷地内横穴墓」 神奈川県立博物館発掘調査報告５

51 井上義弘 1972 「横浜市鶴見区駒岡遺跡群（八千代田横穴群）報告」 昭和46年度横浜市埋蔵文化財調査報告

52 高山・佐々木 1972 『桧入横穴古墳発掘概報（事業報告）』

53 池上 悟ほか 1973 『横浜市緑区荏田町小黒谷遺跡発掘調査概報』 中央大学考古学研究会

54 上野・島田 1973 『小黒谷遺跡発掘調査概報』 中央大学考古学研究会

55 樋口・金子 1974 「川崎市多摩区早野横穴古墳発掘調査報告」 川崎市文化財集録 第９集

56 樋口・金子 1974 「神奈川県早野横穴の調査」 考古学ジャーナル 第91号

57 坂本 彰 1977 「横浜市矢崎山の調査」 第１回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨

58 榊原・米沢 1977 「殿ヶ谷横穴古墳」 日本考古学年報 第28号

59 東原信行 1978 『川崎市多摩区麻生台横穴古墳発掘調査概報』 日本住宅公団

60 青木健二 1979 「市ヶ尾・川和地区内遺跡群」（下根・天ヶ谷横穴群） 日本窯業史研究所報告 第８冊

61 村田・増子 1980 「南武蔵における古代火葬骨蔵器の一様相」 川崎市文化財調査集録 第15集

62 東原信行 1980 「川崎市高津区下作延福ノ円横穴発掘調査報告」 川崎市文化財調査集録 第15集

63 池上 悟 1980 『横穴墓』 ニュー・サイエンス社

64 岡本孝之 1981 「中屋敷横穴墓調査報告」 神奈川県埋蔵文化財調査報告 21

65 東原信行 1981 「川崎市夢見ヶ崎横穴墓発掘調査報告」 川崎市文化財集録 第17集

66 佐藤安平 1982 『横浜市西区浅間下横穴群調査概報』 同調査団

67 甘粕 健ほか 1982 『横浜市史』 資料編21

68 竹石健二 1982 「津田山丘陵の横穴墓について」 日本大学人文科学研究所 研究紀要26号

69 東原信行 1983 「川崎市西北部谷本川流域の横穴古墳群」 川崎市文化財調査集録 第20集

70 長谷川 厚 1983 「歴史時代墳墓の成立と展開（１）」 古代 第75・76号弁号

71 池上・遠藤 1984 『神奈川県横浜市緑区奈良町・熊ヶ谷東遺跡発掘調査概報』 同調査団

72 池上・遠藤 1984 『武蔵・熊ヶ谷東遺跡－発掘調査概要－』 同調査団

73 池上・遠藤 1984 『神奈川県横浜市緑区奈良町 奈良地区発掘調査報告Ⅱ』 同調査団

74 鈴木重信 1984 『横浜市港北区矢上上ノ町横穴墓Ｂ支群発掘調査概報』 横浜市教育委員会

75 呉地英夫ほか 1985 『横浜市緑区東方横穴墓群発掘調査報告』 玉川文化財研究所

76 伊東秀吉 1986 「川崎市高津区久末秋谷横穴古墳発掘調査報告」 川崎市文化財調査集録 第22集

77 鹿島保宏ほか 1986 『横浜市神奈川区菅田町 日向根横穴墓発掘調査報告』 横浜市教育委員会

78 呉地英夫ほか 1986 『横浜市緑区東方横穴墓群第２次発掘調査報告書』 玉川文化財研究所

79 田村良照 1986 『川崎市内における横穴墓の調査』 玉川文化財研究所

80 須山幸雄 1987 「日向根横穴墓」 昭和61年度横浜市文化財年報

81 長谷川 厚 1987 「歴史時代墳墓の成立と展開（２）」 古代 第84号

82　横浜市教育委員会　1988　「赤田横穴墓群」　昭和62年度横浜市文化財年報
83　長谷川　厚　1988　『新吉田町四ッ家横穴墓群』　神奈川県立埋蔵文化財センター
84　江坂輝弥ほか　1988　『川崎市史』　資料編１
85　滝沢・林原　1988　『川崎市高津区千年Ｂ区域横穴墓群』　同調査団
86　佐藤安平　1988　『本牧箕輪横穴墓群調査報告書』　同調査団
87　滝沢　亮ほか　1989　『新吉田町四ッ家横穴墓Ｂ群』　同調査団
88　村田・増子　1989　「南武蔵における古代火葬骨蔵器の基本的研究(上)　川崎市民ミュージアム紀要　第２集
89　田村良照　1990　『横浜市港北区　諏訪下北遺跡発掘調査報告書』　同調査団
90　滝澤　亮　1990　『新吉田町四ッ家横穴墓群』　同調査団
91　坂本・倉沢　1990　「矢崎山横穴墓群」　港北ニュータウン埋蔵文化財調査報告Ｘ
92　上田　薫ほか　1991　「神奈川県内の横穴墓群」　茨城県考古学協会シンポ関東横穴墓遺跡検討会資料
93　伊東・高橋　1992　「川崎市多摩区東生田横穴墓発掘調査報告書」　川崎市文化財調査集録　第28集
94　林原利明　1992　『神奈川県横浜市港北区　新吉田町俵地区横穴墓』　同調査団
95　小宮・倉沢　1992　『上ノ山遺跡』　港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告ＸⅢ
96　村田・増子　1990　「南武蔵における古代火葬骨蔵器の基本的研究(下)　川崎市民ミュージアム紀要　第３集
97　鹿島・鈴木　1993　「綱崎山横穴墓群」　平成４年度横浜市文化財年報
98　鹿島・鈴木　1993　「横浜市綱崎山横穴墓群の調査」　第17回神奈川県遺跡調査・研究発表会
99　鹿島・鈴木　1992　『平成３年度　神奈川県指定史跡　市ヶ尾横穴古墳群（Ｂ)』　横浜市教育委員会
100　田村良照　1993　「中里横穴墓」　平成4年度横浜市文化財年報
101　村田文夫　1993　『古代の南武蔵』　有隣新書
102　吉田好孝ほか　1994　「横浜市大場横穴墓群Ｆ・Ｇ・Ｈ横穴墓群の調査」　第18回神奈川県遺跡調査・研究発表会
103　田村良照　1994　『横浜市南区中里横穴墓発掘調査報告書』　同調査団
104　小宮・坂上　1995　「ジンザブ横穴墓群」　平成６年度横浜市文化財年報
105　鈴木・武井　1996　『Ｃ18横穴・矢崎山古墳』　港北ニュータウン地域内埋蔵文化財報告XX
106　後藤喜八郎　1996　『川崎市高津区　久本横穴墓群発掘調査報告書』　同調査団
107　村田文夫　1996　「遺跡は地中の語り部」　川崎市史研究　第７号
108　大川・青木　1997　『横浜市鶴見区　馬場３丁目横穴墓群』　日本窯業史研究所報告　第49冊
109　竹石・澤田　1997　「川崎市久地西前田横穴墓群（第2次)」　第21回神奈川県遺跡調査・研究発表会
110　小池　聡　1997　『川崎市高津区久本桃之園横穴墓群』　同調査団
111　河合・田尾　1997　「遺物から見た律令国家と蝦夷（神奈川県)」　第６回　東日本埋蔵文化財研究会
112　鹿島・山田　1998　『市ヶ尾第二地区18街区横穴墓群発掘調査報告書』　横浜市埋蔵文化財センター
113　須山・廣瀬　1998　「金剛寺横穴墓発掘調査報告」　平成８年度横浜市文化財年報
114　竹石健二ほか　1998　『久地西前田横穴墓群－第１・２次調査－』　同調査団
115　長谷川　厚　1999　『新宮台横穴墓』　かながわ考古学財団調査報告82
116　長谷川　厚　2000　「谷津町北地区横穴墓」　平成10年度横浜市文化財年報
117　野中和夫ほか　2000　『溝口西耕地横穴墓群発掘調査略報』　同調査団
118　長谷川　厚　2000　「瀬戸町横穴墓」　かながわ考古学財団調査報告86
119　岡本・伊丹　2001　『かながわの古代寺院（研究の成果と課題)』　神奈川県考古学会　考古学講座
120　平野・柳沼　2001　『横浜の古墳と副葬品』　横浜市歴史博物館・同市ふるさと財団

石鉢とは何か

小　池　　聡

1．はじめに
2．具体的資料の検討
3．出土遺構と出土遺跡
4．製作工程の推定
5．石鉢とは何か－年代観と機能
6．おわりに

1．はじめに

「ひと」と「石」との関わりの歴史は、人類の歴史そのものと言っても過言ではないだろう。人類史の多くの時間にあたる旧石器時代以来「ひと」は「石」と対峙し、石器として道具としてきたのである。主要な利器として石器を獲得した旧・新石器時代以来「ひと」はより多くの道具を獲得してきた。特に「金属」が「石」に代わり、主たる利器が石器から金属器と変換を迎える弥生時代以降も「石」の道具は、素材が「石」である特性が卓越するもののみではあるが、なおも希薄な関係ながら「ひと」と関わり続けてきたのである。

しかし、遺跡から出土する我々が石製品と呼んでいる砥石・石臼・火打石・石鉢等の古代以降に使用されていたこれらの「石」の道具類は、広く遺跡内から一定量が出土しているにもかかわらず等閑視され、必ずしも研究の俎上に上がっているとは言えないのが現状であろう。

さて、本稿では「ひと」と「石」との関わりが希薄ながらも続く中世から近世を射程として、神奈川県内遺跡出土の石鉢・捏ね鉢またはヒデ鉢などと呼称されている鉢状を呈する石製容器を集成し分析を試みたい。

ここで取り上げる石鉢ほかについての論攷は、管見の限りでは清水菜穂氏による鎌倉市今小路西遺跡出土の戦国土坑一括資料の資料紹介(清水　1993)で、形状の概観と年代観について触れられているのみである。

2．具体的資料の検討

神奈川県内の資料にあたるが、資料収集は神奈川県立埋蔵文化財センターの近世研究プロジェクトチームによる神奈川県内近世遺跡一覧(近世研究プロジェクトチーム　1995)をもとにして出土資料を抽出した。また、1995年以降の報告書は2001年3月までに出版されたものに可

第１表　神奈川県内石製容器集成表

	遺跡名	遺構名	形状	口径・器高・器厚	形態	石材	年代	備考
1	小田原市御組長屋遺跡第Ⅰ地点	２号玉石水路	約1/4片	口径－、器高７cm、器厚４cm	C	凝灰岩質砂岩	18後半～19	被熱赤化、内面煤付着
2		３号玉石水路	約1/4片	口径－、器高13cm、器厚5.5cm	C	凝灰岩質砂岩	16初頭～17前半	4足付き、漆継ぎか
3		ピット群２	略完形	口径15cm、器高20cm、器厚２cm	B	輝石安山岩	15後半～16前半	被熱ヒビ、内面炭化物
4		２号井戸址	約1/2片	口径（43）cm、器高20cm、器厚13cm	A	輝石安山岩	18後半～19前半	未製品
5		包含層	約1/2片	口径（33）cm、器高（15）cm、器厚５cm	A	輝石安山岩	15～16	未製品
6		包含層	約1/2片	口径（34）cm、器高13cm、器厚７cm	A	輝石安山岩	15～16	未製品
7		包含層	口縁部一部欠損	口径22.5cm、器高11.5cm、3.2cm	A	輝石安山岩	15～16	未製品
8		包含層	約1/4片	口径（34.5）cm、器高15.5cm、器厚５cm	A	輝石安山岩	15～16	未製品
9		包含層	約1/6片	口径－、器高19cm、器厚６cm	A	輝石安山岩	15～16	未製品
10		包含層	約1/6片	口径－、器高10.5cm、器厚3.2cm	B	輝石安山岩	15～16	未製品
11		包含層	片口片	口径－、器高－、器厚５cm	A	輝石安山岩	15～16	非常に強い被熱
12		包含層	約1/2片	口径30cm、器高９cm、器厚－	B	輝石安山岩	15～16	未製品
13		包含層	完形	口径30cm、器高15cm、器厚－	A	輝石安山岩	15～16	未製品
14	小田原市御組長屋遺跡第Ⅱ地点	３号地下式坑	約1/2片	口径34cm、器高19.5cm、器厚2.6cm	A	輝石安山岩	15～16前半	未製品
15		包含層	約1/4片	口径－、器高12cm、器厚５cm	B	輝石安山岩	15～16	未製品
16		包含層	底部3/4片	口径－、底径24.5cm、器高－、器厚３cm	D	輝石安山岩	15～16	
17	大磯町祇園塚遺跡F地点	８号溝状遺構	1足部小片	口径－、器高－、器厚2.6cm	A	輝石安山岩	16中	
18	平塚市御所ヶ谷遺跡	遺構外	約1/6片	口径－、器高－、器厚５cm	A	輝石安山岩	14～15か	内面摩滅痕、黒斑
19	平塚市豊田本郷遺跡	27号井戸址	完形	口径30cm、器高16.5cm、器厚4.8cm	A	輝石安山岩	中世後半～近世前半	
20	茅ヶ崎市上ノ町遺跡Ⅳ区	12号井戸址	足付底部片	口径－、器高－、器厚3.6cm	A	輝石安山岩	13末～15	
21		２号井戸址	片口部口縁～底部片	口径（26.6）cm、器高12cm、器厚３cm	A	輝石安山岩	13中～14中	
22		17号井戸址	口縁部～足部片	口径（32）cm、器高15cm、器厚2.6cm	A	輝石安山岩	中世	
23		33号井戸址	片口部口縁～足部片	口径31.6cm、器高12.1cm、器厚2.6cm	A	輝石安山岩	13中～15	
24	茅ヶ崎市宮ノ腰遺跡	１号集石	口縁部小片	口径－、器高－、器厚2.3cm	A	輝石安山岩	15後半～16前半	内面摩滅
25		遺構外	口縁部～足部片	口径（30）cm、器高15.7cm、器厚3.5cm	A	輝石安山岩	15後半～16前半	
26	鎌倉市今小路西遺跡北B区	北区土坑９	片口部欠損	口径34cm、器高16.8cm、器厚３cm	A	多孔質安山岩	15末～16初頭	
27	鎌倉市巨福山建長寺境内遺跡	遺構外	口縁部片	口径－、器高－、器厚2.8cm	A	多孔質安山岩	15末～16	断面に被熱
28		遺構外	口縁部片	口径（35）cm、器高－、器厚3.4cm	A	多孔質安山岩	15～16	
29	鎌倉市円覚寺統燈廊	地下式坑	１足部片	口径－、器高－、器厚3.6cm	A	花崗岩	14後半～15前半	内面・足部下面摩滅
30	逗子市池子遺跡群1-D地点	９号井戸址	把手部口縁小片	口径－、器高－、器厚2.3cm	A	輝石安山岩	13後半～16後半	
31	伊勢原市殿村遺跡	２号地下式坑	把手部口縁1/5片	口径（30）cm、器高13cm、器厚3.9cm	A	輝石安山岩	15後半～16前半	内面摩滅
32	海老名市尼寺北方遺跡第８次調査	１号地下式坑	約1/5片	口径（37.4）cm、器高20cm、器厚５cm	A	輝石安山岩	14以降か	
33		１号地下式坑	把手部口縁小片	口径－、器高－、器厚５cm	A	輝石安山岩	14以降か	33と別個体か
34	大和市神明若宮地区内遺跡C地区	３号井戸址	完形	口径30cm、器高9.3cm、器厚2.8cm	A	輝石安山岩	15後半～16前半	内面摩滅、５点接合、被熱・黒変
35		３号地下式坑	口縁部小片	口径－、器高－、器厚3.1cm	A	輝石安山岩	15後半～16前半	内面摩滅
36	宮ケ瀬遺跡群表の屋敷（No.８）遺跡	堀	約1/4片	口径（32）cm、器高15.5cm、器厚4.5cm	A	火山礫凝灰岩	13後半～近代	被熱、15後半～18前半主体
37	宮ケ瀬遺跡群馬場（No.６）遺跡	北側包含層	約1/4片	口径（28.2）cm、器高10.2cm、器厚4.6cm	B	粗粒凝灰岩（七沢石）	16末～19	内面煤付着
38		北側包含層	約1/2片	口径（36）cm、器高15.5cm、器厚５cm	B	粗粒凝灰岩（伊奈石）	16末～19	
39		北側包含層	完形	口径34.3cm、器高14.5cm、器厚4.5cm	B	粗粒凝灰岩（伊奈石）	16末～19	内面煤付着
40	宮ケ瀬遺跡群馬場（No.７）遺跡	Ｋ８号竪穴状遺構	約1/4片	口径（34.2）cm、器高15.6cm、器厚４cm	B	粗粒凝灰岩（七沢石）	18～20前半	内面煤付着
41		遺構外	把手部口縁片	口径（25.8）cm、器高（7.8）cm、器厚4.5cm	A	粗粒凝灰岩（七沢石）	17中～20前半	被熱

能な限りあたっている。神奈川県内の鉢状を呈する石製容器が出土した遺跡は、小田原市御組長屋遺跡（都市計画道路小田原早川線改良工事遺跡発掘調査団　2001）、大磯町祇園塚遺跡Ｆ地点[1]（大磯町教育委員会　1994）、平塚市御所ケ谷遺跡（日本窯業史研究所　1989）、豊田本郷遺跡（豊田本郷遺跡発掘調査団　1985）、茅ヶ崎市上ノ町遺跡（新湘南国道埋蔵文化財調査会　1985）、宮ノ腰遺跡（茅ヶ崎市教育委員会　1987）、鎌倉市今小路西遺跡（今小路西遺跡発掘調査団　1990）、巨福山建長寺境内遺跡（建長寺境内遺跡発掘調査団　1991）、円覚寺続燈庵（続燈庵境内遺跡発掘調査団　1990）、逗子市池子遺跡群No.１－Ｄ地点（財団法人かながわ考古学財団　1995）、伊勢原市殿村遺跡（殿村遺跡発掘調査団　1989）、海老名市尼寺北方遺跡第８次調査地点（尼寺北方遺跡第８次調査団　1999）、大和市神明若宮地区内遺跡（神明若宮地区内遺跡発掘調査団　1997）、宮ケ瀬遺跡群表の屋敷（No.8）遺跡（財団法人かながわ考古学財団　1997）、同馬場（No.６）遺跡（財団法人かながわ考古学財団　1995）、同馬場（No.７）遺跡[2]（財団法人かながわ考古学財団　1997）の16遺跡を数え、対象資料は未製品も含めて41点（表１・第1～３図）である。[3]

いずれも、１遺跡１点～３点程度が出土しているが、その中でも特に小田原市御組長屋遺跡第Ⅰ・Ⅱ地点では未製品を含む16点が出土している。また、茅ヶ崎市上ノ町遺跡と隣接する宮ノ腰遺跡からも６点が出土しており、これらの遺跡では神奈川県内の他遺跡よりも多くの資料が集中出土している。これらの遺跡は鉢状を呈する石製容器の製作及び消費を考察する上で注目される遺跡であり、後節で詳細に検討し分析を試みたいと考えている。

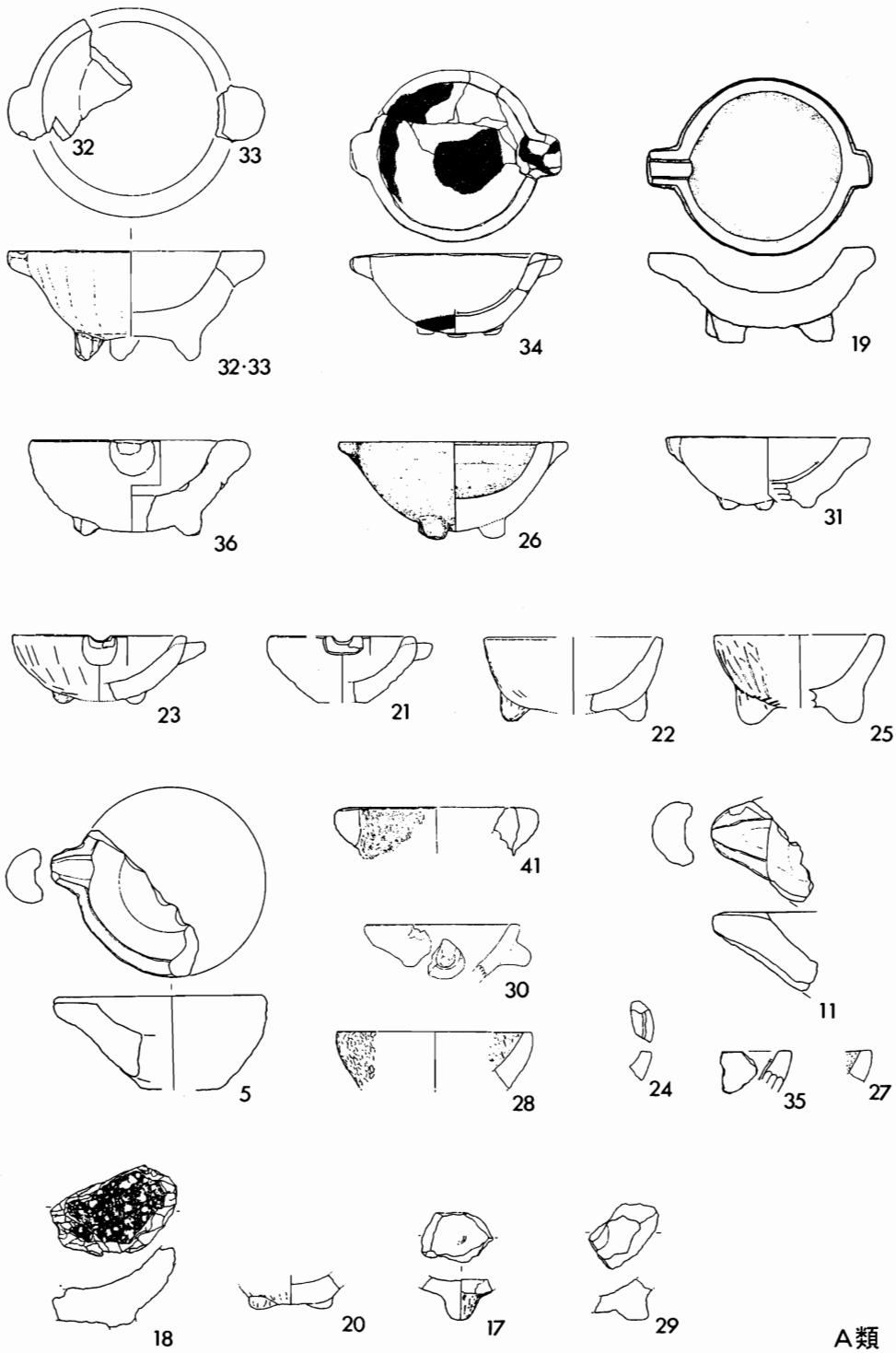
以下では、これらの資料について形態・石材・法量・欠損や付着物・被熱・赤化などの諸属性、出土遺跡と遺構・製作工程、機能、年代観に触れ、分析を行いたい。

(1) 形態的特徴

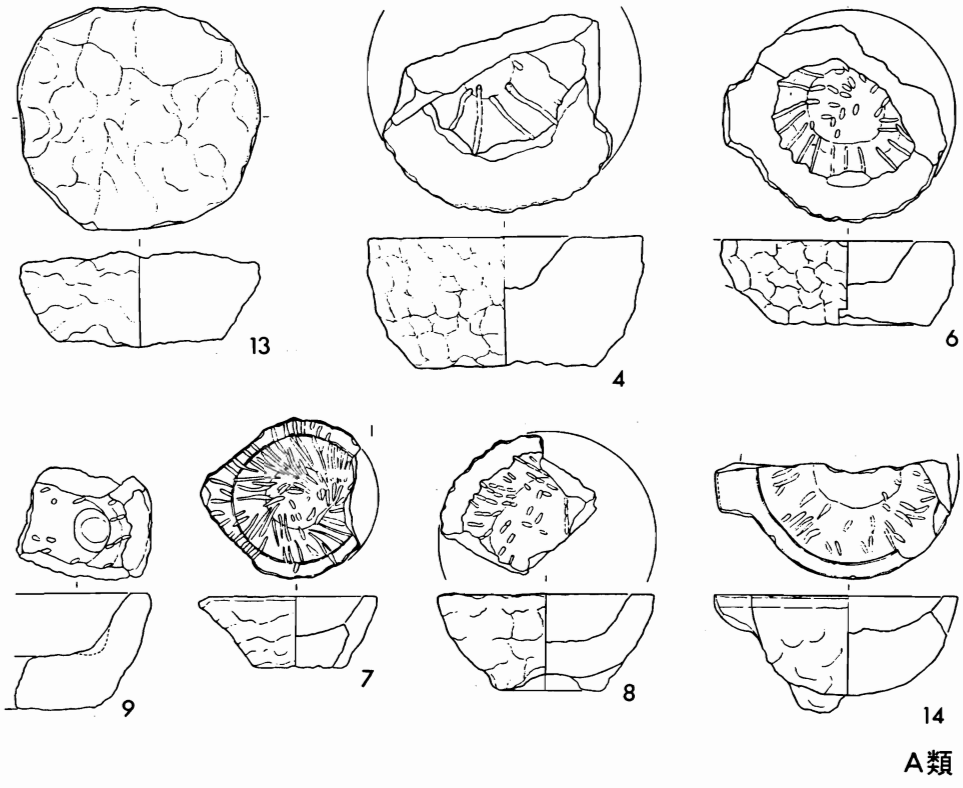
石鉢などと呼ばれる鉢状を呈する石製容器は、清水氏の資料紹介によると、今小路西遺跡北区土坑９出土資料では「半球形を呈し外底部の３ヶ所に円脚を有する。－中略－張り出す把手と－中略－対面に片口を施した」（清水　前掲）形態を持つものと報告されている。集成資料を観察すると、前述した石鉢とされる石製容器と同様な形態的特徴を持つものとこれとは別の形態的特徴を持つものが認められる。石鉢・捏ね鉢・ヒデ鉢などと呼称される鉢状を呈する石製容器には幾つかの形態が存在していることが理解される。

集成資料の形態的特徴から形態分類を試みると以下の４形態に分類が可能である。

Ａ類・・側面観が半球状を呈し、上面観は円形である。丸い外底面には円形脚（足）部が３ヶ所造り出される。水平な口縁部には平坦な把手と対面に片口部が脚（足）部同様に造り出されている。平塚市豊田本郷遺跡（19）、大和市神明若宮遺跡（34）を典型とする。その他、小田原市御組長屋遺跡第Ⅰ地点（４～９・11）、同第Ⅱ地点（13・14）、鎌倉市今小路西遺跡（26）、伊勢原市殿村遺跡（31）、宮ケ瀬遺



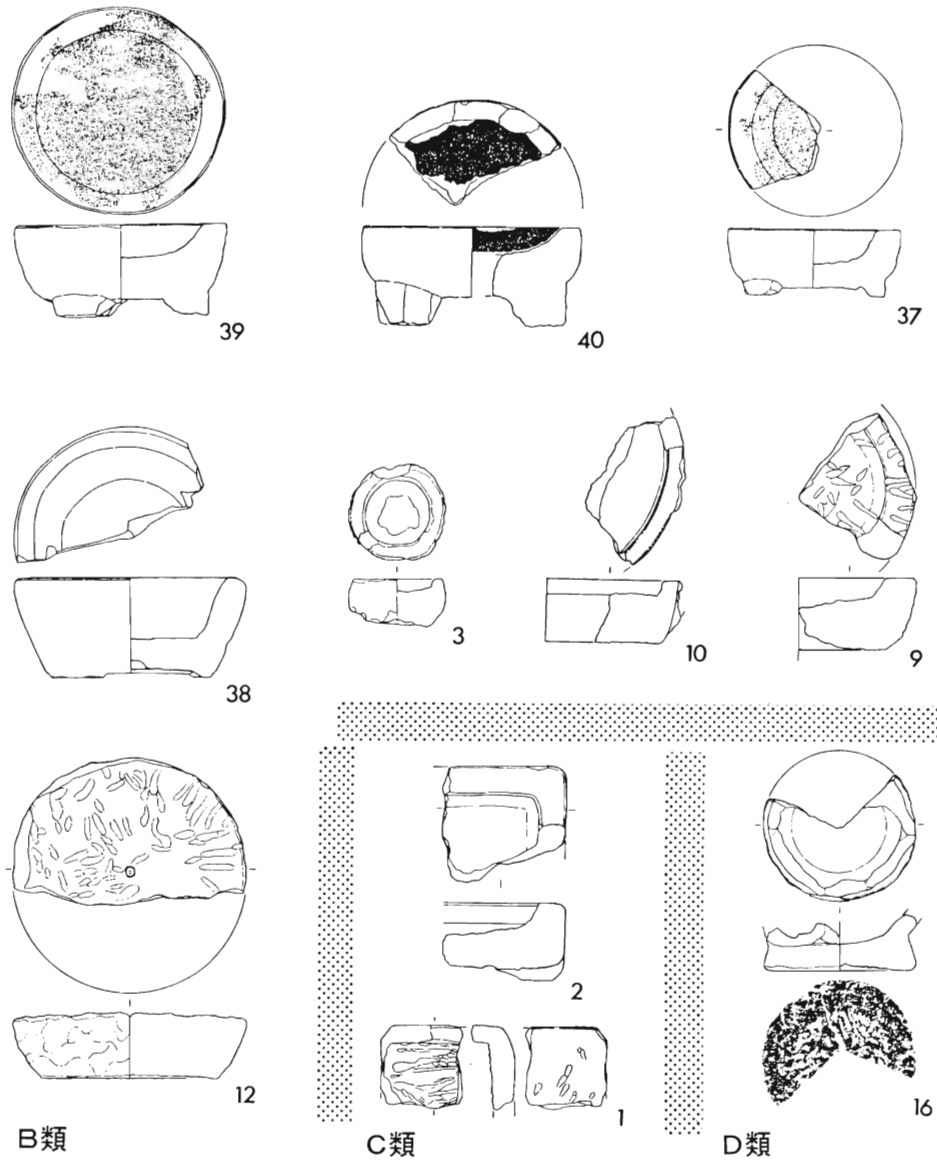
第１図　石製容器Ａ類（１）（Ｓ＝1/12）



第２図　石製容器Ａ類（２）（Ｓ＝1/12）

跡群表の屋敷（№.８）遺跡（26）、同馬場（№.７）遺跡（41）、海老名市尼寺北方遺跡第８次調査（32・33）、茅ヶ崎市上ノ町遺跡Ⅳ区（20～23）、同宮ノ腰遺跡（24・25）、大和市神明若宮地区内遺跡（35）、鎌倉市巨福山建長寺境内遺跡（27・28）、同円覚寺続燈庵（29）、平塚市御所ケ谷遺跡（18）、大磯町祇園塚遺跡Ｆ地点（17）、逗子市池子遺跡群１－Ｄ地点（30）である。集成資料中未製品も含め30点を数える。

Ｂ類・・側面観が盤状を呈するもので、上面観は円形である。水平な口縁部を持ち、器内面も皿状で比較的浅い。外底面に造り出しによる３ヶ所の高い脚（足）部を持つもの（37・39・40）（Ｂ－１類）、外底面が低い上げ底状を呈するもの（38）（Ｂ－２類）、平底を呈するもの（３・９・10）（Ｂ－３類）の外底部形状が３種認められる。Ｂ－１類は宮ケ瀬遺跡群馬場（№.６）遺跡（37・39）、同馬場（№.７）遺跡（40）を典型とし、Ｂ－２類は宮ケ瀬遺跡群馬場（№.６）遺跡（38）、Ｂ－３類は御組長屋遺跡第Ｉ地点（３・９・10）である。未製品を含め８点認められる。



第３図　石製容器Ｂ・Ｃ・Ｄ類（Ｓ＝1/12）

Ｃ類・・側面観は盤状を呈し、上面観は方形を呈するもので、浅い箱状である。平坦な外底面には、低い脚（足）部が造り出されている。小田原市御組長屋遺跡第Ⅰ地点（１・２）の破片資料２点のみである。この為本類の全体の形状は方形あるいは長方形を呈するのかは不明であるが、口縁部は水平であろう。

Ｄ類・・底部端が突出し、外底面は弱い上げ底状を呈する。小田原市御組長屋遺跡第Ⅱ地点（16）の底部破片１点のみであり、胴部～口縁部の形状は不明であるが、底部の形状から口縁部が直立して開く鉢状又は深鉢状を呈していると推定される。

A類は完形出土している（19）と５点に欠損して出土し完形に復元された（34）が典型例となるであろうことは前述したところであるが、集成した未製品を除く出土資料中完形品は２点のみで、その他欠損品である。各形態の完形・欠損状況については後述するが、A類とした資料中には片口部の欠損するもの（30・31・32・33・36・41）や把手部の欠損するもの（５・11・21・23）、把手部・片口部とも欠損するもの（22・25・28）、口縁部片（24・27・35）や底部片（17・18・20・29）が含まれている。これらの資料は、典型例（19・34）から得られた半球状、口縁部に片口部と把手部を持ち外底面に円形脚（足）部を３ヶ所持つと言う形態的特徴からA類として分類している。しかし、例えば無把手で片口部を持つもの或いは把手部・片口部を共に持たないものなどが存在する可能性も否定できず、それらの完形出土資料が無い現状ではA類としておくが将来細分できる可能性のあることは記しておきたい。但し、A類として最大の形態的特徴は口縁部に片口部と把手部を持つことであり、その形態的特徴が最もその機能を表していると推定されよう。

また、A類には小田原市御組長屋遺跡第Ⅰ・Ⅱ地点出土資料に未製品として判断される（４～９・13・14）があり、大凡の製作工程復元が可能であると看取されるが、詳細については別項で触れたい。

B類は、外底面の脚（足）部形態でB－１・２類に分類でき、外底面が平坦なものと合わせ３種に細分ができた。外底面が平底を呈するB－３類には更に口径の小さい（３）とやや大きい（９・10）が認められる。

また、B類にも小田原市御組長屋遺跡第Ⅰ地点でA類同様に未製品と思われる（12）が認められる。石臼未製品の可能性のあることが報告されているが、器高が低いことなど鉢状を呈する石製容器B類の未製品と考えたい。

C類・D類については破片のみの欠損品で構成されているため、全体の形状・形態が明確な資料が認められず不明な部分が多い。但し、これらの形態はいずれも小田原市御組長屋遺跡第Ⅰ・Ⅱ地点出土の資料である。今後完形品や大型破片資料の増加により詳細に分析ができることを期待したい。

鉢状を呈する石製容器は、４形態に分類が可能であった。その中でも特にA類は、未製品を含め集成した資料41点中30点で73％を占めており、B類は８点・20％、C類は２点で５％、D類は１点で２％である（第４図下段左）。また、A類出土遺跡は鉢状を呈する石製容器の出土している神奈川県内遺跡16遺跡中15遺跡を数え、広く県内ほぼ全域に及んでいる。このように、鉢状を呈する石製容器では、A類とした形態が神奈川県内で特徴的に普及した形態であることが理解されよう。

（２）石材

石鉢・捏ね鉢・ヒデ鉢などと呼ばれる鉢状を呈する石製容器は、どのような石材を使用して

製作されているのであろうか。神奈川県内の集成資料から、対象資料41点の石材を集計した。神奈川県内の鉢状を呈する石製容器に使用されている石材は、輝石安山岩・多孔質安山岩、粗粒凝灰岩、凝灰岩質砂岩、火山礫凝灰岩、花崗岩である。輝石安山岩と多孔質安山岩は今回の分析では安山岩としてまとめて扱うことにする。

第４図下段が鉢状を呈する石製容器の石材組成率を示したものである。安山岩は32点で79%、粗粒凝灰岩５点で12%、凝灰岩質砂岩２点で５%、火山礫凝灰岩１点で２%、花崗岩１点で２%である。ほぼ８割が安山岩を使用し、安山岩を多用していることが看取される。

前述した各形態別の石材はどうであろうか。Ａ類の使用石材は安山岩27点、粗粒凝灰岩１点、花崗岩１点、火山礫凝灰岩１点で90%が安山岩を用いている。Ｂ類では安山岩４点、粗粒凝灰岩４点であり安山岩と粗粒凝灰岩がそれぞれ50%となる。Ｃ類・Ｄ類は構成する資料数が少ないことによる可能性はあるが、Ｃ類は凝灰岩質砂岩２点で単一石材のみが認められ、Ｄ類も安山岩のみが使用されている。

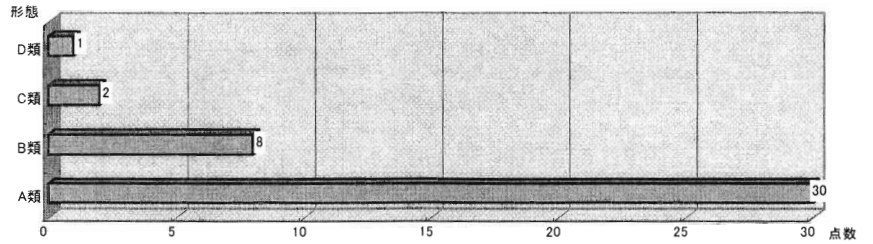
各形態別の石材利用では、Ａ類が安山岩を多用していることが認められる。輝石安山岩・多孔質安山岩は共に伊豆・箱根系の石材であり、神奈川の在地石材であることを留意しておく必要があろう。また、１点のみ認められるＡ類中の粗粒凝灰岩は七沢石であり、出土している遺跡も宮ケ瀬遺跡群馬場（№７）遺跡である。

Ｂ類は安山岩と粗粒凝灰岩が同様に使用されているが、安山岩使用のものは小田原市御組長屋遺跡から出土しており、粗粒凝灰岩使用のものは宮ケ瀬遺跡群馬場（№６・７）遺跡から出土している。粗粒凝灰岩は丹沢山系の七沢石と呼ばれる石材と多摩の伊奈石を使用しているが、伊奈石と七沢石の比率は１対１である。

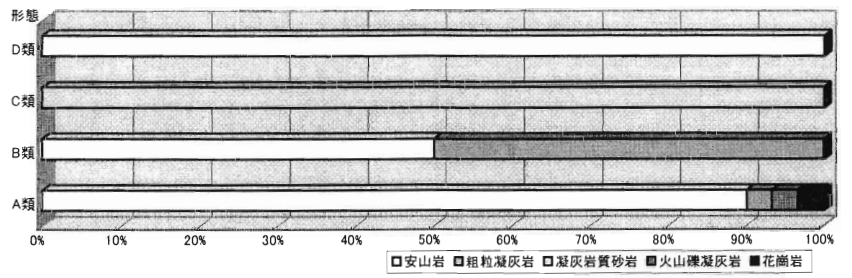
（３）法量

ここでは、完形品又は復元可能な資料の無いＣ類・Ｄ類を除くＡ類・Ｂ類の法量、特に口径と器高について検討したい。

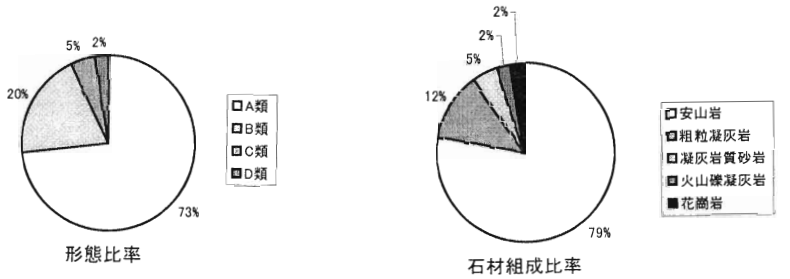
Ａ類の完形品である豊田本郷遺跡（19）は口径30cm・器高16.5cm・器厚4.8cmで、神明若宮地区内遺跡（34）は口径30cm・器高9.3cm・器厚2.3cmである。また、ほぼ完形である今小路西遺跡（26）は口径34cm・器高16.8cm・器厚３cmである。これらの資料から、Ａ類の法量は口径30～34cm・器高9.3～16.8cm・器厚2.3～4.8cmがほぼ標準的であると判断される。但し、(34)は外底面の脚（足）部が摩滅又は欠損している可能性もあり、器高の最低高は本来幾らか高いものと推定される。この完形品から得られた法量をその他口径・器高の推定可能な破片復元資料と比較すると、口径3～34cm、器高11～17cm以下の範囲内（特に15～17cm以下）に多くの資料が集中している。このことからＡ類は規格性の高い形態であることを示唆している。なお、口径の集中よりも器高高低のばらつきが大きく、脚（足）部の形状（高い・低い）差によっていると観察される。この器高及び脚（足）部形状の差はどのような要因によるものであろうか。



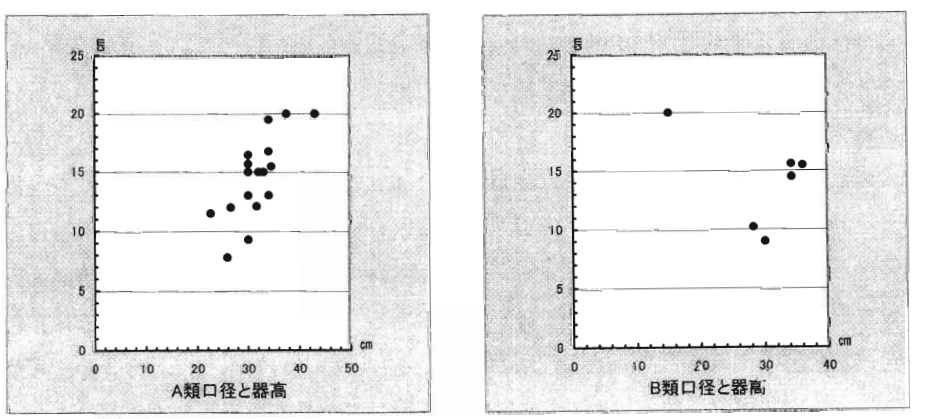
各形態と構成点数



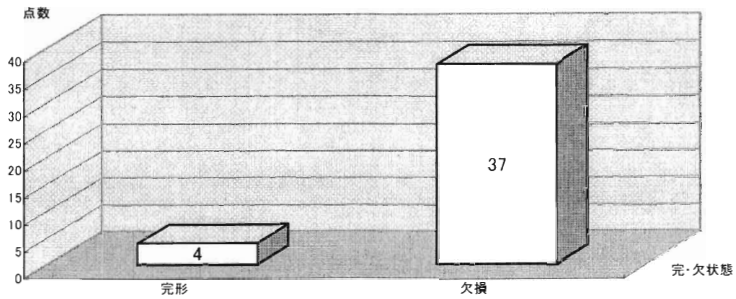
形態の石材組成



第４図　石製容器各形態の構成と石材



第５図　Ａ・Ｂ類の口径と器高



第６図　石製容器の完形と欠損

また、数値化はしていないが器高の低い資料は、ほぼ内器高も低いように思われる。

Ｂ類は対象資料がＡ類に比して少ないが、口径15cm・器高20cm、口径28～30cm・器高９～10cmと口径34cm～36cm・器高14.5～15.5cmの３つの分布が認められ、口径と器高比は規格性が高いことが理解される。これらの口径・器高比の分布と前述したＢ類の諸形態の関係は、Ｂ－１類は口径28～30cm・器高９～10cmと口径34cm～36cm・器高14.5～15.5cmに認められ、宮ケ瀬遺跡群馬場（No.６）遺跡（37）が器高の低いタイプであり、馬場（No.６）遺跡（39）と馬場（No.６）遺跡（40）が器高の高いタイプとなる。Ｂ－２類はＢ－１類の器高の高いタイプとほぼ同一法量を持っているが、内器高が高くＢ－１類よりも深い形状を持っている。Ｂ－３類の口径・器高とも復元可能個体は口径15cm・器高20cmである。

Ａ・Ｂ類ともに口径と器高の示す比率は、一定数値の範囲内に集中していることが認められ、一定法量の製品が規格性を持って利用されていたことが推定されよう。

なお、各形態とも器厚は２～５cmであるが、Ａ類とＢ－３類がやや薄い数値である。

（４）完形・欠損状況

分析対象資料41点中に完形品は４点のみである。形態別では、Ａ類に豊田本郷遺跡（19）・神明若宮地区内遺跡（34）の２点と御組長屋遺跡第Ｉ地点（13）の未製品１点、Ｂ類には宮ケ瀬遺跡群馬場（No.６）遺跡（39）の１点のみであり、Ｃ類・Ｄ類には認められない。なお、Ａ類の完形品の内、神明若宮地区内遺跡（34）は同一井戸址内から５点に欠損して出土したものが接合した資料であり、厳密には完形出土品ではなく、県内出土資料中で完形出土資料は豊田本郷遺跡資料１点のみである。

前述したように、集成資料41点中に完形資料は４点のみであり、欠損資料は37点を数え90%強が欠損品である。各形態別では、資料数の少ないＣ・Ｄ類を除いてＢ類は1/2から1/4程度の破片資料が多いのに比べ、Ａ類は更に細かい1/5から1/6以下や片口部或いは把手部・脚（足）部小破片などの状態まで欠損しているのが認められる。Ａ類の形態的特徴である片口部・把手部・脚（足）部は小破片となっても判別し易いことによるとも言えるであろうが、Ａ類とした鉢状を呈する石製容器は他の形態よりも細かく欠損していると指摘できよう。

このことはA類石製容器が、他形態の石製容器に比して消耗度の激しい作業に関わっていた可能性が高いことを示唆しているのではないか。後節で触れることになるが、A類資料の中に特に強く被熱している資料が認められ、他形態よりも薄い器厚でありながらも繰り返す被熱と放熱でヒビや弾けのような欠損を予想できるのではないか。

（５）付着物・被熱・赤化・磨滅などの諸属性

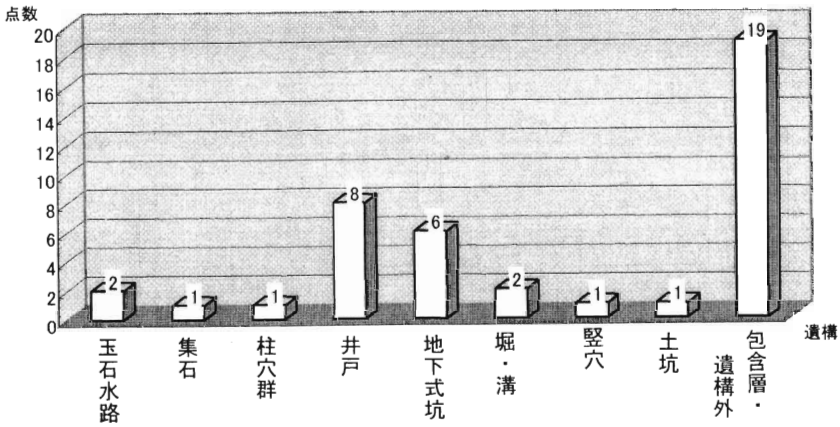
集成した鉢状を呈する石製容器資料には、内・外面又は欠損品断面の付着物・被熱・赤化・磨滅などが認められる資料が散見される。今回の分析では実資料の観察と検討を行っていないので報告書等の記載から判断する。

器内・外面及び欠損断面に付着物・被熱・赤化・磨滅などが認められる資料は集成資料41点中15点である。各形態別での内容は、A類は、（11）に強い被熱、（36・41）に被熱、（27）に断面被熱、（18・34）に被熱・内面磨滅と煤・黒斑又は黒変、（24・31・35）に内面磨滅、（29）に内面と外底面に磨滅がそれぞれ認められる。B類は、（３）に被熱・内面炭化物、（37・38・40）に内面煤付着が認められ、C類では、（１）に被熱・赤化・内面煤付着がそれぞれ認められる。D類については不明である。

A類は器内面・外面又は断面にまで被熱資料が多く認められ、（18・34）の２例に黒変又は黒斑が確認されている。また、器内面に光沢を持つほどの顕著な磨滅痕が観察される資料が多い。A類は平塚市御所ケ谷遺跡（18）と大和市神明若宮地区内遺跡（34）に煤・黒変や黒斑が認められるものであるが、特に大和市神明若宮地区内遺跡（34）の器内面及び器外面の煤又は黒変部分は、外底面では脚（足）部に環状に認められる。器内面では内底面と把手部及び片口部に認められる。外底面の環状煤又は黒変部分はA類が恰も火にかけられていることを示唆しているものであり、器内面特に片口部の煤又は黒変は液状物質が片口部を使い注がれていることを示唆しているように観察される。このことはA類石製容器の機能を考察する上で極めて重要な事項であると指摘しておきたい。また、A類に顕著に認められる器内面の磨滅は、前述した液状の物質を作業後に取り除くなどの結果による可能性も指摘できよう。

B類もA類同様に被熱した資料が存在するが、それらの最大の特徴は器内面に炭化物や煤が付着していることである。明確に器内面の付着物が図化されている宮ケ瀬遺跡群馬場（№６）遺跡（37・39・40）の、特に完形品である（39）では煤の付着が内底面から器面・口縁部まで万遍なく及んでいる。このことは、B類が器内面で対象物を繰り返し燃焼させている可能性が高いことを指摘できるであろう。

C類の内面に認められる付着物も煤であり、B類同様に器内面での繰り返される対象物燃焼の結果と考えられよう。



第７図　石製容器の出土状況

３．出土遺構と出土遺跡

集成した41点の鉢状を呈する石製容器は、遺跡内でどのような状況で出土しており、また、それら資料が出土する遺跡はどのような位置づけができるのであろうか。

（１）遺構別出土量

第７図は、集成資料の各遺跡内での出土状況から、遺構別・包含層又は遺構外で点数を集計したものである。

鉢状を呈する石製容器の遺跡内での出土状況は、遺物包含層（整地層も含まれると考えられる）や遺構外出土が19点で全資料の約46％を占め突出する。これに次いで遺構内として、井戸址９点・約22％、地下式坑６点・約15％である。その他は玉石水路２点・約4.9％、堀・溝状遺構２点、竪穴状遺構１点・約2.4％、集石遺構１点、土坑１点、柱穴群１点となる。これら各遺跡の遺構別出土状況からみると、鉢状を呈する石製容器は、前述した出土資料に対する欠損率の高さを加えて考慮すれば、井戸址・地下式坑を主とする遺構とその他整地層を含む遺物包含層に廃棄されることが多いと看取されよう。しかし、平塚市豊田本郷遺跡出土（19）資料は井戸址内から完形出土しており、単に欠損品の廃棄行為という単一事象では括れない意識下の行為も存在している可能性はあろう。

鉢状を呈する石製容器の各形態別では、井戸址・地下式坑から出土しているのはＡ類に限られている。また、Ｂ・Ｃ類は遺構別では水路・柱穴・竪穴状遺構に限られ、１点のみのＤ類は資料限界であるが遺構外出土のみである。諸形態別では明確に遺跡内での出土状況が異なっていることが認められるのである。

筆者はかつて拙稿で、神奈川県内遺跡出土資料を使って近世粉挽き臼の廃棄行為について論じたこと（小池　2000）があるが、近世粉挽き臼の遺構別出土量と今回分析資料の遺構別出土

様相を比較すると、近世粉挽き臼と中世末から近世戦国時代の所産と目される石製容器とでは堀・溝状遺構・水路と地下式坑との出土比率が逆転している。このことは別器種での廃棄行為の安易な比較に危険性を含んでいることも否めないが、廃棄対象遺構の消長に裏付けられた中世と近世との廃棄行為の差を示しているように思われる。

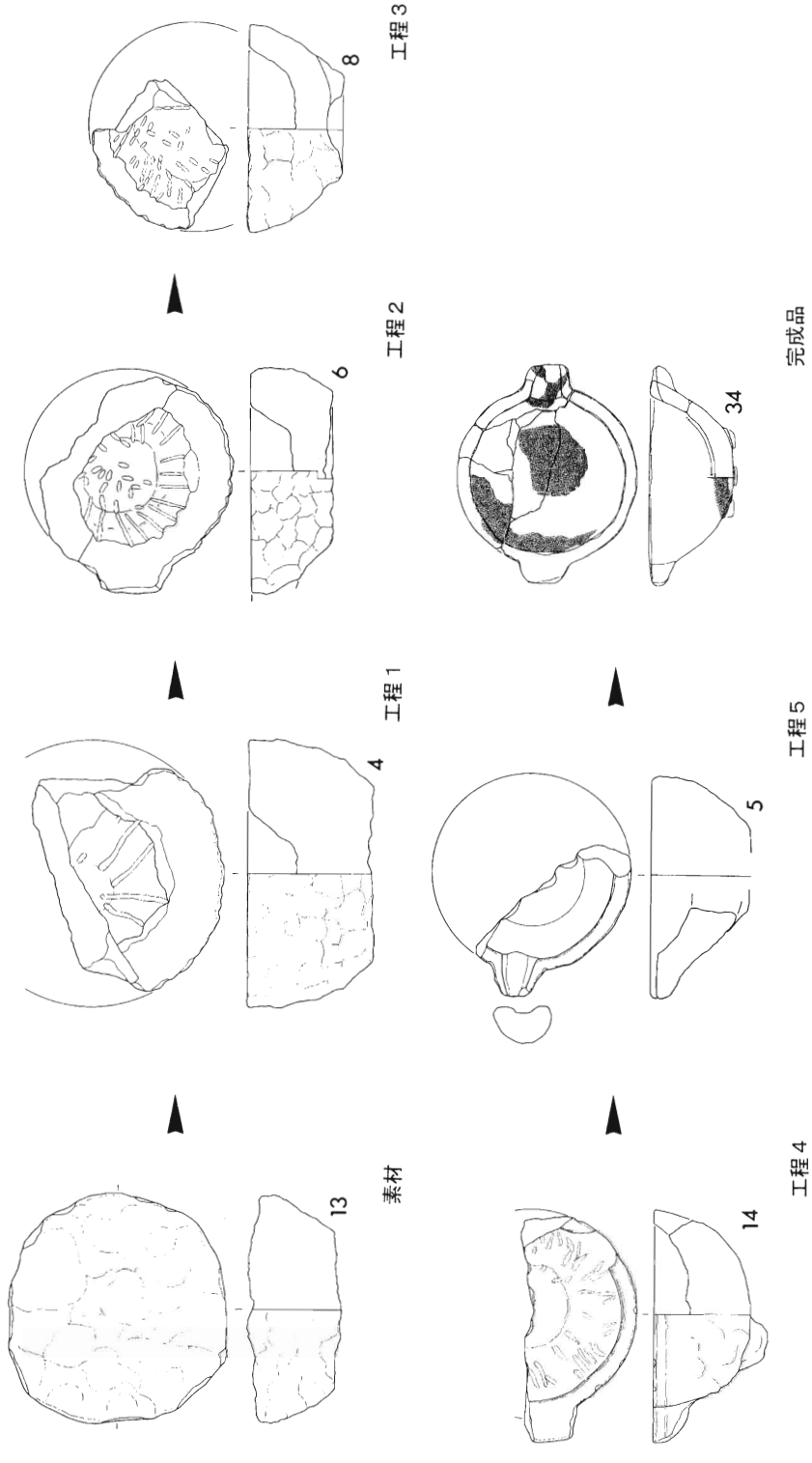
（２）出土遺跡の位置づけ

鉢状を呈する石製容器の出土点数は、集中して多量に出土している少数の遺跡と１～２点程度が出土する大多数の遺跡という遺跡間での保有量差が歴然と認められた。（４）１遺跡で多量に出土しているのは、小田原市御組長屋遺跡第Ⅰ・Ⅱ地点16点と次いで茅ヶ崎市上ノ町遺跡４点である。上ノ町遺跡は隣接する宮ノ腰遺跡２点と未発表資料であるが近年調査されたかながわ考古学財団調査地点での数量を加算するとかなりの点数になると推定される。（上ノ町遺跡については報告を待って今後分析対象としたい。）

特に注目されるのは、前述した小田原市御組長屋遺跡第Ⅰ・Ⅱ地点である。出土している16点内には石製容器のＡ類を主体とするものの各形態全てが出土し、Ａ・Ｂ類の未製品を含むもので、今回集成した他遺跡とは点数・その内容とも様相が異なっている。Ａ類未製品には、その製作工程復元が可能だと判断される資料が含まれており、御組長屋遺跡第Ⅰ・Ⅱ地点は鉢状を呈する石製容器、特にＡ・Ｂ類等の生産遺跡である可能性は高いと推定され、かつＡ類片口部（11）など強く被熱した資料も含まれているので、石製容器を用いた具体的作業も行われていたものと推定されよう。

御組長屋遺跡は報告書によれば、13世紀後半から16世紀末までの中世遺構群が密集し、16世紀を中心とした後北条氏期が主体となっている。また、それ以前の遺構群は「中世板橋宿」との関連も指摘され、第Ⅰ・Ⅱ地点の低地部を中心として屋敷地などの居住区と推定されている。第Ⅰ・Ⅱ地点は次いで江戸期に入り小田原藩が「板橋口」を守った弓矢・鉄砲足軽の居住区である御組長屋址と推定されるという。

多量に出土した石製容器各形態は、想像を逞しくすれば、それらに生活に伴う道具の生産と使用の結果によるものであると推定されよう。小田原城下では、後北条期の鋳造にかかわる集団（永原　1998）や近世期末の鉄鍋造り（五十嵐　2000）など文献からの研究が示されている。関東最大勢力である後北条氏はそのような専門集団を集中させていたと考えるのは妥当であろう。一方、１～２点出土している遺跡はＡ類石製容器の小規模な消費遺跡と推定することが可能ではないか。なお、小田原地域は石製容器の主たる石材と認められた伊豆・箱根系安山岩の原産地に最も近い立地にあり、小田原地域及び神奈川県西部周辺地域、特に石製容器の出土量の多い海岸部は、各遺跡の様相から在地石材と道具の生産及びその流通の要の地域となる可能性は高いと予想され、強ち暴論では無いように思われる。その視点からみると、丹沢山系の粗粒凝灰岩七沢石や多摩系粗粒凝灰岩伊奈石にも同様の生産遺跡の存在が予想される。



第８図　A類石製容器の製作工程（S＝1/12）

４．製作工程の推定

小田原市御組長屋第Ⅰ・Ⅱ地点出土資料中には、A・B類石製容器の未製品が含まれていた。これらの未製品の内、特にA類石製容器未製品には素材から完成品まで認められ、A類石製容器の製作工程復元が可能であると判断された。ここでは出土資料から観察されたA類石製容器製作工程の推定復元を試みたい。

半球形体部で口縁に片口部・把手部を持ち、外底面３単位の脚（足）部を持つA類石製容器は、素材（13）から完成品（34）（御組長屋遺跡資料に良好な完成品が無く神明若宮地区内遺跡資料を完成品として表示した）までに以下の５工程が認められる。

素　材（13）・・鑿等で整形された側面観逆台形を呈する盤状素材である。

工程１（４）・・素材上面中央部から器内面の粗整形を行う。工具は鑿か？

工程２（６）・・器内面の調整を更に進め、器外面の調整も行う。この段階で把手部及び片口部の粗整形を行い、同時に外底面で脚（足）部の整形を弱い窪み状に開始する。

工程３（８）・・外底面の脚（足）部の粗整形を行う。また、ほぼ半球状に器内・外面を整形する。器厚もほぼ粗整形を終了している。

工程４（14）・・把手部・片口部・内外器面及び脚（足）部の粗整形を終了し、細部の細整形を行う。（14）は底部がやや厚く残ってしまっている。

工程５（５）・・片口部の彫り込みや口縁部の細部整形等仕上げ工程であり、完成品に至る。

御組長屋第Ⅰ・Ⅱ地点資料からは以上のような工程が復元可能であった。B類や他の形態は把手部・片口部を持たない形態であるのでA類より簡略化された工程を取ると推定されよう。なお、粗調整までの鑿使用は推定できるが、仕上げ細部調整に使われる工具類は不明である。

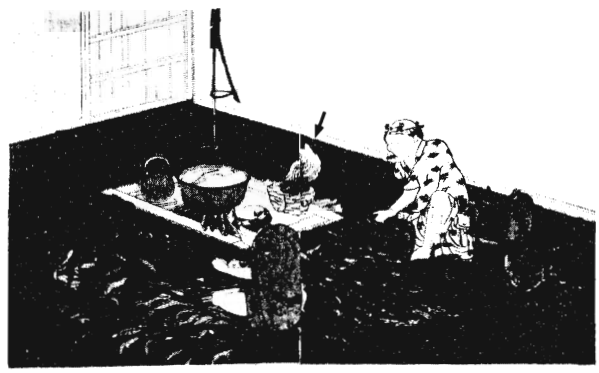
５．石鉢とは何か－年代観と機能－

神奈川県内出土の鉢状を呈する石製容器について、形態的特徴、石材、法量、完形・欠損状況、付着物・被熱・赤化、出土遺構と出土遺跡、製作工程について論じてきた。今回の分析結果から得られた石製容器の特徴をまとめると以下のようになる。

A類は半球形で把手・片口部、外底面に３単位の脚（足）部が造り出される。使用石材は在地系石材の安山岩が多用される。比較的規格性が強く口径30～34cm・器高11～17cmに集中する。

ヒデ鉢の使用例
（ヒデ又はじん松を炊いて照明とした）
「三州奥郡風俗図絵」より
（秋山・北見・前村ほか　1995
『図録農民生活史事典』より転載）

ヒデ鉢とヒデ
（江戸東京博物館　1995　『あかりの今昔
―光と人の江戸東京史―』より転載）



ヒデ鉢の使用例（囲炉裏端）「薩陽煙草録」より
（秋山・北見・前村ほか　1995　『図録農民生活史事典』より転載）

第９図　ヒデ鉢とヒデの使用例

器高の低いものと高いものとがある。小破片までに欠損するものが多く、被熱・赤化・付着物から判断される機能は、高温で液状物質に使用されていると推定される。共伴遺物から推定される年代は13世紀後半から16世紀後半であり、特に15～16世紀代に神奈川県内に広く普及していると考えられる。出土遺構も井戸址や特に地下式坑であり15～16世紀の年代観の査証となる。また、御組長屋遺跡・上ノ町遺跡[5]・宮ケ瀬遺跡群馬場（No.７）遺跡・筆者らが調査報告書作成中の小船森地区内遺跡などでは、鞴羽口・鍛冶用凹石や鉄滓など共伴する。前述の小船森地区内遺跡や上ノ町遺跡などでは鍛冶遺構と推定される竪穴状遺構も確認されており、溶湯などの容器として鋳造等の作業に関わる可能性が高いと推定されるが、具体的な使用方法や使用

例は不明である。[6] 本類を従来の名称で石鉢と呼びたい。具体的な使用法や使用例は不明ではあるが、石鉢は、戦国時代を中心として、豊富な伊豆・箱根系安山岩という石材供給を背景とした管理された生産、後北条氏にかかわる集団、城下周辺で集中するという一連の作業を表している石製品であるといえるのではないか。

Ｂ類は盤状であるが円形を呈するもので、浅い体部を持っている。脚部形状と法量で１～３類に細分が可能であるが、明確な機能差は判断することができない。使用石材は安山岩と粗粒凝灰岩が拮抗するが粗粒凝灰岩には丹沢山系の七沢石と多摩系の伊奈石が認められ、県内でも地域差が石材に反映されている。被熱・赤化・付着物から器内面での対象物質の燃焼が想定され、第９図に示すようなヒデ鉢と呼称される灯火具である。共伴遺物からは15世紀末から20世紀前半の年代が想定されるが近世江戸時代が主体となると推定される。灯火具の研究からは中世に用いられる灯火具とされているが戦国時代以前の資料は認められなかった。

Ｃ類は方形盤状を呈すると推定される。使用石材は凝灰岩質砂岩である。Ｂ類同様の灯火具又は火鉢などの機能が想定される。年代は16世紀初頭～19世紀までであり、戦国期から近世江戸期まで使用されている可能性が高い。

Ｄ類は１点のみの破片資料であり様相は不明であるが、鉢状又は深鉢状を呈すると推定される。使用石材は在地石材の安山岩であり、今後類例が増える可能性は高いと考えられる。Ａ類とほぼ同時期の所産と推定される。

６．おわりに

筆者は、Ａ類とした石鉢を伊勢原市殿村遺跡と大和市神明若宮地区内遺跡の２遺跡で調査報告し、今回も小田原市小船森地区内遺跡で報告書執筆中である。その中で、これらの石製品は「どのようなものなのか」と言う案外突発的素朴な疑問から今回の集成分析・考察を行った。

神奈川県内出土の鉢状を呈する石製容器について、形態的特徴、石材、法量、完形・欠損状況、その他の諸属性、出土遺構と出土遺跡、製作工程、年代観について触れ、比較的新しい時代に使用されていた石製品の分析を試みた。その中で、それらの石製容器は４形態に分類が可能であった。Ａ類とした石鉢には鍛冶に関わる機能が推定され、Ｂ類としたヒデ鉢には灯火具としての機能、Ｃ類には灯火具又は暖房具（火鉢）としての機能が与えられた。鉢状又は深鉢状を呈するＤ類には資料的限界から確定できる明確な機能を与えられなかった。

しかし、これらの「石」の道具類は、正に素材が「石」であるが故の適正を評価され、「ひと」が彼らの生活の中で道具として繰り返し使用してきたものに他ならない。今回の考察では、筆者の浅学故に主題でもあるＡ類とした石鉢に、具体的な鍛冶作業内での明確な事例を検証できなかったことが残念である。今後とも文献や絵図などの検討を含め、より一層研究を深めていきたいと考えている。

文末ではあるが、本論攷執筆に当たり、明石　新、大坪宣雄、宮田　真、滝澤 亮、服部実喜、大村浩司、長岡文紀、小林義典、小林　克、小林康幸、田村良照、江戸東京博物館の諸氏・諸機関には多くのご協力、ご教示を頂いた。また、挿図作成は木村京子、金山陽子、校正は安心院浩子の各氏にご協力いただいた。記して謝意を表したい。

註

(1) 平成３年度調査区第３号溝から石鉢口縁部片と報告されている１点が出土しているが茶臼受け皿片と判断できるので、対象資料としなかった。また、大磯町南仮宿遺跡溝状遺構から石製鉢１点が報告されているが、光沢を持つ黒色付着物（黒漆か）が内面に認められ茶臼受け皿片と判断し対象資料としていない。

(2) 宮ケ瀬遺跡群馬場（№.７）遺跡からは掲載した２点の他に、Ｋ９号遺構群地業層中から粗粒凝灰岩（七沢石）製の臼（竪臼）が出土している。推定口径49cm・現状器高24cmを計る大型鉢状を呈するものであり今回は対象外とした。

(3) これらの資料の他に未発表資料であるが、鎌倉市史跡建長寺境内遺跡客殿建設用地で池遺構内から石鉢把手部が出土しており、15世紀以降に比定されると言う（宮田　真氏による）。茅ヶ崎市上ノ町遺跡（かながわ考古学財団調査地点）からも出土例が認められる（服部実喜氏による）。また、筆者ら現在整理調査中の小田原市小船森地区内遺跡Ｂ地区（2002年３月刊行予定）でも井戸址ほかから石鉢片が出土している。遺跡総数は19遺跡となる。

(4) 見かけ上の保有数だけでなく、厳密には調査面積等の調査による資料批判と遺跡内容等の検討が必要である。今後検討していきたい。

(5) 茅ヶ崎市上ノ町遺跡（かながわ考古学財団調査地点）でも、鍛冶工房を推定させる竪穴状遺構が検出されていると言う（服部実喜氏による）。

(6) 島根県石見銀山では平成９年度調査で、戦国時代から江戸時代前半の町屋を調査し吹屋遺構で鉄鍋や石鉢を使用した銀精錬炉が検出されていることをインターネットで知ったが石鉢の詳細については報告書等検証していない。今後の課題としたい。

引用・参考文献

秋山高志・北見俊夫・前村松夫ほか　1995　『図録・農民生活史事典』　柏書房

尼寺北方遺跡調査団　1996　『神奈川県海老名市国分尼寺北方遺跡－第７次・第８次調査－』

五十川伸也　2000　「相州小田原山田家の鉄鍋作り」　『製鉄史論文集』　たたら研究会

伊奈石研究会　1996　『伊奈石　伊奈石の採石・加工と多摩川流域の流通についての研究』

今小路西遺跡発掘調査団　1990　『神奈川県鎌倉市今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』　鎌倉市教育委員会

江戸遺跡研究会　2001　『図説江戸考古学研究事典』　柏書房

江戸東京博物館　1995　『あかりの今昔－光と人の江戸東京史』

大磯町教育委員会　1992　『大磯町における発掘調査の記録Ⅱ』　大磯町文化財調査報告書第38集

1994　『大磯町における発掘調査の記録Ⅲ』　大磯町文化財調査報告書第41集

小田原市教育委員会　1998　『小田原城下欄干橋町遺跡第Ⅳ地点』小田原市文化財報告書第67集

2002　『小船森遺跡』　小田原市文化財報告書第102集

近世研究プロジェクトチーム　1995　「神奈川県内の近世遺跡の集成」　『神奈川の考古学の諸問題（Ⅱ）』　かながわの考古学第５集　神奈川県立埋蔵文化財センター

建長寺境内遺跡発掘調査団　1991　『巨福山建長寺境内遺跡　庫裏改装に係る昭和61年発掘調査報告書』

小池　聡　2000　「石臼は何故壊れるか－神奈川県下近世遺跡出土石臼からの考察－」　『竹石健二先生・澤田大多郎先生還暦記念論文集』　竹石健二先生・澤田大多郎先生還暦を祝う会

小林　克　1994　「近世照明具の研究の方法と課題－伝世資料と出土資料の比較から－」　『東京考古』12　東京考古談話会

財団法人かながわ考古学財団　1995ａ　『池子遺跡群Ⅱ　No.１－Ｄ地点　池子米軍住宅建設にともなう調査』　かながわ考古学財団調査報告３

1995ｂ　『宮ケ瀬遺跡群Ⅴ　馬場（No.６）遺跡　宮ケ瀬ダム建設にともなう発掘調査』　かながわ考古学財団調査報告４

1997ａ　『宮ケ瀬遺跡群ⅩⅠ　馬場（No.７）遺跡　宮ケ瀬ダム建設にともなう発掘調査』　かながわ考古学財団調査報告17

1997ｂ　『宮ケ瀬遺跡群ⅩⅢ　表の屋敷（No.８）遺跡（第１分冊中世～近世・古代）　宮ケ瀬ダム建設にともなう発掘調査』　かながわ考古学財団調査報告19

清水菜穂　1993　「鎌倉市今小路西遺跡の戦国土壙一括資料」　『考古論叢神奈河』第２集　神奈川県考古学会

新湘南国道埋蔵文化財調査会　1985　『新湘南国道埋蔵文化財調査報告』

神明若宮地区内遺跡発掘調査団　1997　『神奈川県大和市神明若宮地区内遺跡』

諏訪間　順　1993　「小田原城における戦国から近世初頭の陶磁器群の様相」　『考古論叢神奈河』第２集　神奈川県考古学会

続燈庵境内遺跡発掘調査団　1990　『円覚寺続燈庵－埋蔵文化財発掘調査報告－』

茅ヶ崎市教育委員会　1986　「宮ノ腰遺跡－鶴嶺小体育館埋蔵文化財調査報告－」　『茅ヶ崎市文化財資料集』　第10集

中世研究プロジェクトチーム　1995　「神奈川県内下における中世遺構の研究」　『神奈川の考古学の諸問題（Ⅱ）』　かながわの考古学第５集　神奈川県立埋蔵文化財センター

都市計画道路小田原早川線改良工事遺跡発掘調査団　2001　『神奈川県小田原市御組長屋遺跡第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ地点発掘調査報告書』

殿村遺跡発掘調査団　1989　『神奈川県伊勢原市殿村遺跡』

豊田本郷遺跡発掘調査団　1985　『豊田本郷　主要地方道平塚・伊勢原線新設工事に伴なう発掘調査報告書』

永原慶二　1998　「第９章　戦国都市小田原」　『小田原市史』通史編　原始 古代 中世　小田原市

日本窯業史研究所　1988　『神奈川県平塚市御所ケ谷遺跡』

堀田孝博　1998　「第５節　神奈川県下出土茶臼について」　『下鶴間城山（伝山中修理助貞信壘蹟・大和市No.181遺跡）』　大和市文化財調査報告書第66集　大和市教育委員会

益富壽之助　1961　『原色岩図鑑』　保育社

宮田　真　2001　「鎌倉市　史跡建長寺境内－客殿建設用地－」　『第25回神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨』　神奈川県考古学会

第10図　追加資料（S＝1/12）

追記１

校正時までに出版された小田原市小船森遺跡（小田原市教育委員会　2002）資料（42～44）と資料集成時見落としていた小田原城下欄干橋町遺跡第Ⅳ地点資料（45）を掲載しておく。いずれも安山岩製のＡ類である。

小船森遺跡（42～44）は、15世紀中葉の時期に比定されると考えられる。(42）はＢ地区第18号井戸址出土で推定口径29cm、現在器高８cm、器厚３cmを測る口縁部約1/6片である。(43）はＢ地区第10号特殊遺構（石敷き遺構）出土で、推定口径25cm、現在器高10.5cm、器厚2cmを測る。口縁部～胴部約1/4片であり、内面の磨滅著しい。(44）はＢ地区第13号井戸址出土で、把手部を有する口縁部片であるが口径不明である。現在器高7.9cm、器厚２cmである。

欄干橋町遺跡第Ⅳ地点（45）は、第176号遺構出土で、16世紀第２四半期の年代が想定される。現在器高10.7cm、器厚３cmを測る。片口部を持つ口縁部片である。

追記２

私事ではあるが、本論攷の校正中に父が他界した。享年71才であった。思い起こせば、筆者は父の採集していた石鏃を父の机で見つけ、同じものが欲しくて田畑を探し回って、土器・石器を集めた小学生であった。そんなことからも考古学を学びたいと思うようになった。教職を定年後、職に就くでもなく、取り立てて書などの趣味に生きる様子でもなかったが、帰省するたびに表採された土器・石器が増えているようであった。

考古学を専門として生業をたてるようになって、仕事の忙しさから父と父の表採遺物について語り合うことがなかったことが悔やまれる。形振り構わず、我ら息子たちの教育を考え生き抜いた父の霊前に、本論攷を捧げる。

2002．4．16

執筆者紹介　杉山博久（日本考古学協会員）
藤山龍造（慶応大学大学院生）
山田仁和（盤古堂考古学研究所）
中村哲也（玉川文化財研究所）
伊丹徹（葉山町教育委員会）
田村良照（日本考古学協会員）
小池聡（盤古堂考古学研究所）

目次英訳　吉田政行（かながわ考古学財団）

編集委員　大塚真弘、諏訪間順、田村良照、依田亮一

考古論叢 神奈河　第10集

平成14年４月25日　印刷
平成14年４月30日　発行

編集・発行　神奈川県考古学会
事務局　〒251-0043　藤沢市辻堂元町4-17-4
やよい荘102
郵便振替　00240－9－71208
神奈川県考古学会

印刷　㈲湘南グッド
〒251-0001　藤沢市西富1-3-16
電話　0466(25)2151

KOKO-RONSO KANAGAWA vol.10

CONTENTS

Hirohisa SUGIYAMA	Zennosuke Miwa and tiles from the Yohgoh-ji Temple
Ryuzo FUJIYAMA	On tanged points in the west half of southern Kanto region —Consider the retouching to rejuvenate tanged points—
Yoshikazu YAMADA	Jomon potteries which put cord marks on two sides from Mukaiharahigashi site, Shiroyama town, Kanagawa prefecture
Tetsuya NAKAMURA	Some aspects of the first half of the Late Yayoi period on the left bank of the lower reaches of the Sagami River—investigate of the results obtained through the excavation of Kuramisaido site—
Tohru ITAMI	The memotandum on Nagae・Sakurayama No.1 and No.2 tumulus
Yoshiteru TAMURA	Cave style tombs in the south of southern Musashi —Yokohama and Kawasaki area—
Satoshi KOIKE	What is stone bowls "Ishibachi"?

1997.4